

奇譚クラス

新しい風俗文獻誌

6月号



裸形の路 雪俊 遙
鉄の指 西田 仁

奇譚クラス

6

THE KITAN CLUB

Published Monthly By Tensetsya

Osaka Japan



定価二百円

斯道愛好家に贈る絶好のコレクション

本誌モデル諸嬢総出演

ブロマイド式フォート百二十八姿!!

悦々写真集 決定



本誌口絵に登場したこのある聖蹟美女三十数名の大団放りなポーズを凝らすつて特写した百二十八姿のブロマイド。キヤビネットの隅から隅まで強烈なる悦々の雰囲気がわんわんとせかえさるような香気を漂わせ思わずマニヤをうんと神めがせる聖蹟写真集の決定版。口絵には発表できない超絶作品のオンパレード。絶対に一般市販しない限定版につき、必ず天星社宛直接お申込み下さい。誠に味え美女のすべの秘宝のペールが、皆さまの手によつてここに開かれるのです。どうか、今すぐお申込み下さるようお願いしています。

略号(プロ)

定価 千円

大坂市阿倍野郵便局 天 星 社
〒545-0001 大坂市阿倍野四丁目十四番地

本写真集は一切書店販売を致しません

悦々

五百円 別冊奇譚クラス 限定版 特別号 オ4弾



第一グラビヤ

東京	不	じ	臣	佐	真	と	宮	花	漫	都	あ	な	ま	ま	ま
重	藤	藤	安	立	立	立	立	立	立	立	立	立	立	立	立
中	村	村	村	村	村	村	村	村	村	村	村	村	村	村	村
中	村	村	村	村	村	村	村	村	村	村	村	村	村	村	村
中	村	村	村	村	村	村	村	村	村	村	村	村	村	村	村

第二グラビヤ

乱	れ	咲	き	な	ま	し	花	本	初	子	清	美	子	子	子
花	本	初	子	清	美	子	子	子	子	子	子	子	子	子	子
花	本	初	子	清	美	子	子	子	子	子	子	子	子	子	子
花	本	初	子	清	美	子	子	子	子	子	子	子	子	子	子
花	本	初	子	清	美	子	子	子	子	子	子	子	子	子	子

- 第一口絵
- 1 犬吠きしヨ
 - 2 鬼面の顔
 - 3 耐舌のハシゴ
 - 4 墓地に揺れる奴隷
 - 5 迫り来る洗脚器
 - 6 本立ちの中の囚女
 - 7 煙に吸いた顔
 - 8 非情の顔
 - 9 電灯に揺れる舌
 - 10 回廊木馬
 - 11 刺青される女
 - 12 舌間の宙吊り
 - 13 アクロバチスト急進
 - 14 恐怖のコンクリート部屋
 - 15 空倉庫の怪事
 - 16 暴虐の部屋

- 第二口絵
- 17 黒皮の牢籠
 - 18 ゴム紐との闘い
 - 19 受難の瞬間
 - 20 変形洗脚器
 - 21 消えぬ灯
 - 22 森の精
 - 23 強まりゆく痛覚
 - 24 迫り来る悪魔
 - 25 夢という名の犬
 - 26 祖上のいけにえ
 - 27 狙われる美囚
 - 28 軍中のもかき
 - 29 踏みしめられる女
 - 30 ハンモック椅子
 - 31 耐舌の座禅
 - 32 煙燻と顔

絢を競う艶姿115ポーズ



豪華な内容とモデル陣
限定版 特別号 オ3弾
緊縛写真集
クワフ集
特価五百円 略号「クワフ」
表紙三度刷、内容グラビヤ印刷

大坂市阿倍野郵便局 天 星 社
〒545-0001 大坂市阿倍野四丁目十四番地

四十項目 百十五ポーズ



一艦飾り易く 一女飾り難し 俊平・画



ラビヤ・フォト

巻頭口絵

奇譚クラブ 第六号 目次

目次 一 風流いろは歌留多 二 三十九夜物語 三 肉市場 四 文壇 五 刺青マニヤの弁 六 愛責記 七 学校保健婦として 八 悪の半生記 九 女性の切腹 十 高原の一夜 十一 牧神の饗宴 十二 宇宙のどこかで 十三 不浄なる聖物 十四 フアンタジヤ・マゾヒスティカ 十五 夢幻小説 十六 奇クサロン 十七 女子寮の争い 十八 社長と女秘書 十九 女装愛好家へ 二十 モデル屋へのお願 二十一 鼻はかわいい愛玩物 二十二 竹野ひろ子ミルへの私信 二十三 短信往来 二十四 浣腸の実験 二十五 接について 二十六 奇譚三十九夜物語 二十七 大盛映画 二十八 足についての文献と記録 二十九 告白 三十 マゾヒズム天国 三十一 体験告白 三十二 体験記 三十三 告白小説 三十四 女性の切腹 三十五 権権マニヤ 三十六 読者通信

重松テースト……………黒川不二男
柳源文字……………四馬 孝
橋の扶の仕置……………四馬 孝
謎の幻燈「オットセイと美女」……………黒川不二男
フォト「逆手」……………黒川不二男
物語小説の花……………黒川不二男
或るビジネスガールの自害……………黒川不二男

濡れた壁像……………楊成・塚本 鉄三
板の間の艶姿……………黒川 文代
黒蛇のもたえ……………黒川 文代
エビ責フレイへの過程……………黒川 文代
幽囚くさり……………黒川 文代
そちらへ行くのはいや……………黒川 文代
撃つたれる女……………黒川 文代

グ 女性切腹の幻想……………大塚 啓子
Mフォト幸福なる誘惑……………黒川 文代

告白 わたくしの体験……………黒川 文代
Mの小説 鉄の指……………黒川 文代
鉄の指……………黒川 文代
女装愛好家……………黒川 文代
解制異聞 哀恋断片奇談……………黒川 文代
或る妻の記……………黒川 文代
不浄なる聖物……………黒川 文代
フアンタジヤ・マゾヒスティカ……………黒川 文代
夢幻小説 牧神の饗宴……………黒川 文代

奇クサロン……………黒川 文代

女子寮の争い……………黒川 文代
社長と女秘書……………黒川 文代
女装愛好家……………黒川 文代
モデル屋へのお願……………黒川 文代
鼻はかわいい愛玩物……………黒川 文代
竹野ひろ子ミルへの私信……………黒川 文代
短信往来……………黒川 文代
浣腸の実験……………黒川 文代
接について……………黒川 文代
奇譚三十九夜物語……………黒川 文代
大盛映画……………黒川 文代
足についての文献と記録……………黒川 文代
告白……………黒川 文代
マゾヒズム天国……………黒川 文代
体験告白……………黒川 文代
体験記……………黒川 文代
告白小説……………黒川 文代
女性の切腹……………黒川 文代
権権マニヤ……………黒川 文代
読者通信……………黒川 文代

近藤 隆……………131
近藤 隆……………134
木村 清……………142
田中 文男……………154
田沼 龍男……………156
斎藤 京一……………160
渡部 かね……………168
日影狂太郎……………174
教奇 咲……………182
多摩 宏……………186
読者通信……………192

風流うちは歌印多

三十九夜同人作

淹れい子ゐる

まけるたじ

一枚ぬぎ

や

嫉く女房の

縛り

甲斐

げ

怪我をせぬ

縛の程の

よさ

ま

こ

縛はぬ先に

杖のむ

ち

ふ

震えてゐる雪子屋のモデル

る

て

ふ

亭主の

好きな

吊し主見め

縁は
田舎の
なみの
サドと
メゾ



蠟
淚
文
字

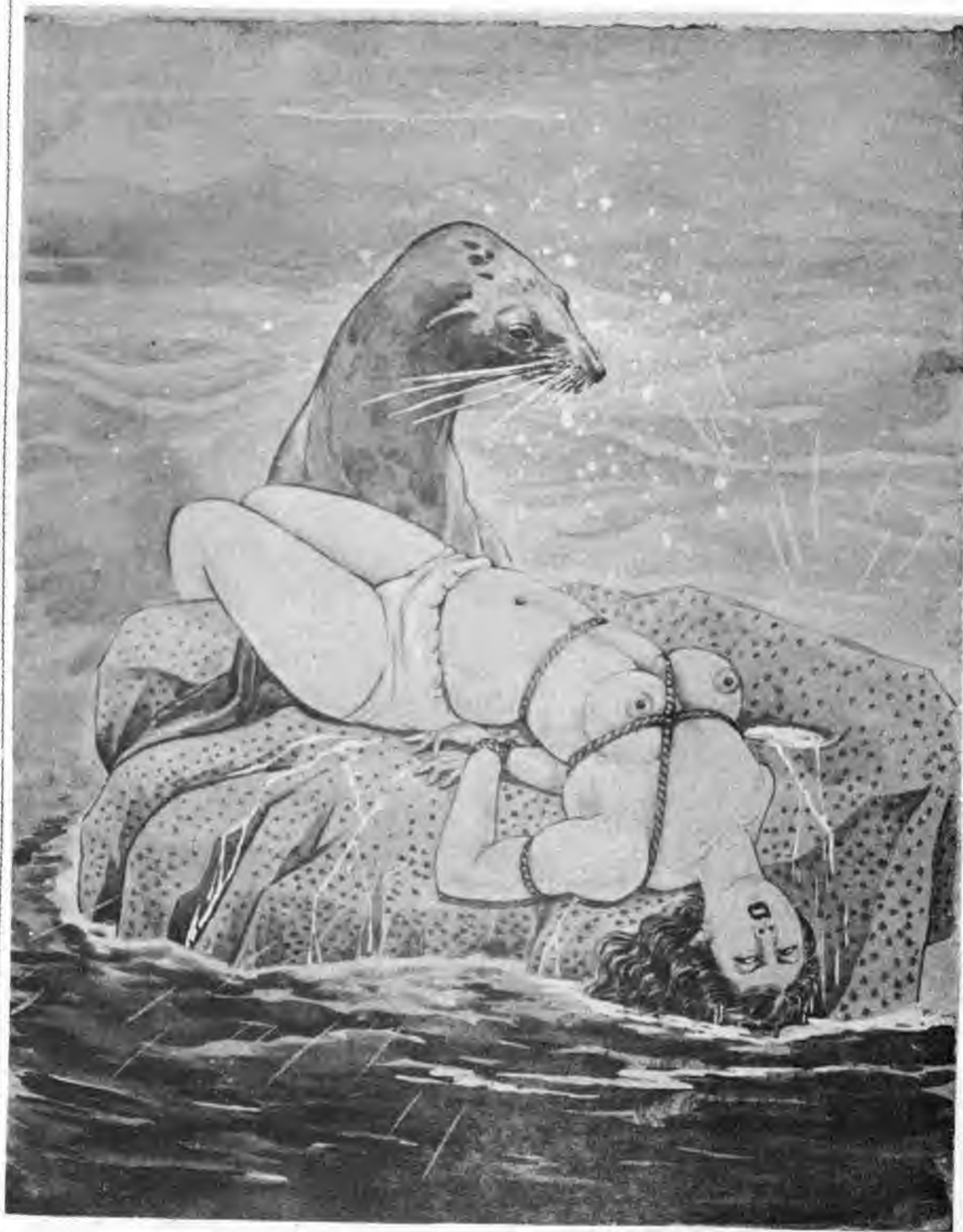
(四馬孝画)



橋の袂の仕置

(四馬孝画)





海の幻想　〈オットセイと美女〉

(龍　れい子画)



逆手

春日ルミと愛川悦子



物置小屋の花 （黒川 不二男画）



あくどいいたずら（黒川 不二男画）



或るビジネスガールの自害

(龍 れい 子 画)

濡れた塑像

構成 塚本鉄三





板の間の艶姿







黒蛇へのもだえ



大塚啓子



エビ責プレイへの過程



幽囚のくさり





「そちらへ行くのは、いやッ」



鞭うたれる女



梨花悠紀子



女体切腹の幻想





幸福なる隷属







新しい風俗文献研究誌

奇譚クラブ

六月号



1962年 6月号

(第16卷 第6号 通刊 第166号)

創作

裸

ら

形

ぎょう

の

賂

まいない

雪

俊

遙

「困るなあ小松君。野原さんの原稿は、今日なら確実に取れるとあんなに固く言ってたじゃないか。だから僕はその分三頁をあけて待っていたんだ。もう一ぺん行って頼んで来たまえ。」

編集長の囁み付くような声に、デスクで解説記事を書いていた羽柴が顔を上げた。又始ったな。新米記者はいつも此の調子で脅かされ、揚句は一寸した落度をみつけてクビだ。

小松は真赤になっておどおどしていたが、仕方なさそうに部屋を出て行った。

「これが取れなかったら君はクビだぜ。」

編集長の言葉に驚いて振返った小松の目に、こちらを見ている羽柴の憫む様な顔が映った。小松は一寸下唇を嚙んで口惜しそうな顔をした。

「野原さんて酷い人。此の前、今日までに絶対書いておくってあんなにはっきり請合った癖に、今日行ったら剣もほろろなんですもの。あの調子じゃ、もう一ぺん行ったらって無駄なことは解ってるわ。すると私はクビかしら……」

道を歩きながら小松は考えた。クビという言葉のあとに、当然、此の夏、中風で倒れた父と、まだ学校へ行っている弟妹のことが頭に浮んだ。

「困るわ私、クビにされちゃ」

編集長の前に跪いて哀願してでも、それだけは赦して貰いたかった。併しあの羽柴という青年の前では、まさかそんなことも出来ない。こんなことになるんだったらK学院短大なんて花嫁学校へ通ったり、父の収入をいいことに、卒業後三年もぶらぶら遊んだりして

いないで、もっと早く、若い娘が勤めるのに良い時期に、大きな会社にも勤めてれば良かったわ。

小松は恐々、針間商事の市場部長室のドアを又ノックした。

三時間後。小松は晴々とした表情で、極東経済通信の編集室（と言っても銀座裏の古ぼけたビルの一層小さな部屋にたった四人の社員が居るだけなのだが）のドアを排した。

「小松さん、貰って来たかい？」

「ええ。編集長は？」

「もう帰ったよ。君が原稿貰って来たら、すぐ印刷へ廻す様に言われてるんだ。」

「え？」小松は思わず赭くなった。

「二人ともさっきはあんな顔をして見送った癖に、私が原稿を持て来るのを当然みたいにしてるわ。まるで私が、代償を要求されて喜んで体を縛らせて来たことを知っているみたい……」

「それからね小松君。舞坂君は勤務成績が良くないんでクビにしたから、君、誰か婦人記者に適当な人知っていたら編集長に紹介しろって言ってたぜ。」

羽柴は原稿を手に、あたふたと部屋を出て行った。

一人だけ取残された小松は、小さな掌で細い首筋を一しきり撫廻し、やれやれという表情をした。それからその手で受話器を握んだ。「もしもし、東京クロニクルの社会部ですか？ 米田望助記者はいらっしゃるでしょうか。……アラそう、丁度良かったわ。私小松っていうんです。一寸米ちゃん呼んで下さい。」

直ぐ受話器の奥から懐しい、ボーイ・フレンドの声が響いた。

「もしもし、アノネ米ちゃん。私折角勤められたんだけど、又すぐクビにされちゃいそうなのよ。え、ま、ヘマをやればね。というよりゴロ雑誌だから、給料を払わないでもいい様に、無理に理窟をつけてクビにするのかもしれないの。今日クビになった先輩の女の子がそんなこと言ってたのよ。私、一生懸命やってみる積りだけど、クビにされても困らない様に、米ちゃん顔の広い所で、どこかそれとなく探してよ。」

「へえ、そうかい。と言われても俺が知ってるのは……、ああそうそう。針間商事なら社長から部長に至るまで、ちよくちよく秘書を取換るって話聞いたけど……。松公は一寸可愛い面はしてるけど、身体が小さいから向うさんが採用して呉れるかなあ。」

「うーん駄目。針間商事ならうちのパトロンじゃないの。それにすぐ取換える所なんて嫌よ。クビにされに入るみたいじゃないの。」

針間商事という言葉が出る度に、小松の頭について先刻の出来事が映画の一場面でも思出す様に鮮かに蘇って来る。気のおけない弾んだ口調で会話を交しながら、小松はふとあのことを米田に話したらどんなに驚くだろうと思った。

新橋の映画館を出て下谷の妾宅まで自動車を飛ばす間に、Z省総務局長常岡東一郎は針間商事の前を通った。

六階建真四角の新築ビルも、夜が遅いので殆ど窓の灯は消えているが、豪華な設備で有名な重役会議室と、その隣の控室はこんな時刻にも拘らず明々と灯が点いていた。

常岡は一寸不審そうに眉をひそめたが、玄關の前を通過する時、見覚えのある田辺渉外部長が、好い身体をした女秘書を従えて入っ

て行く後姿を見て、ああ、と思った。

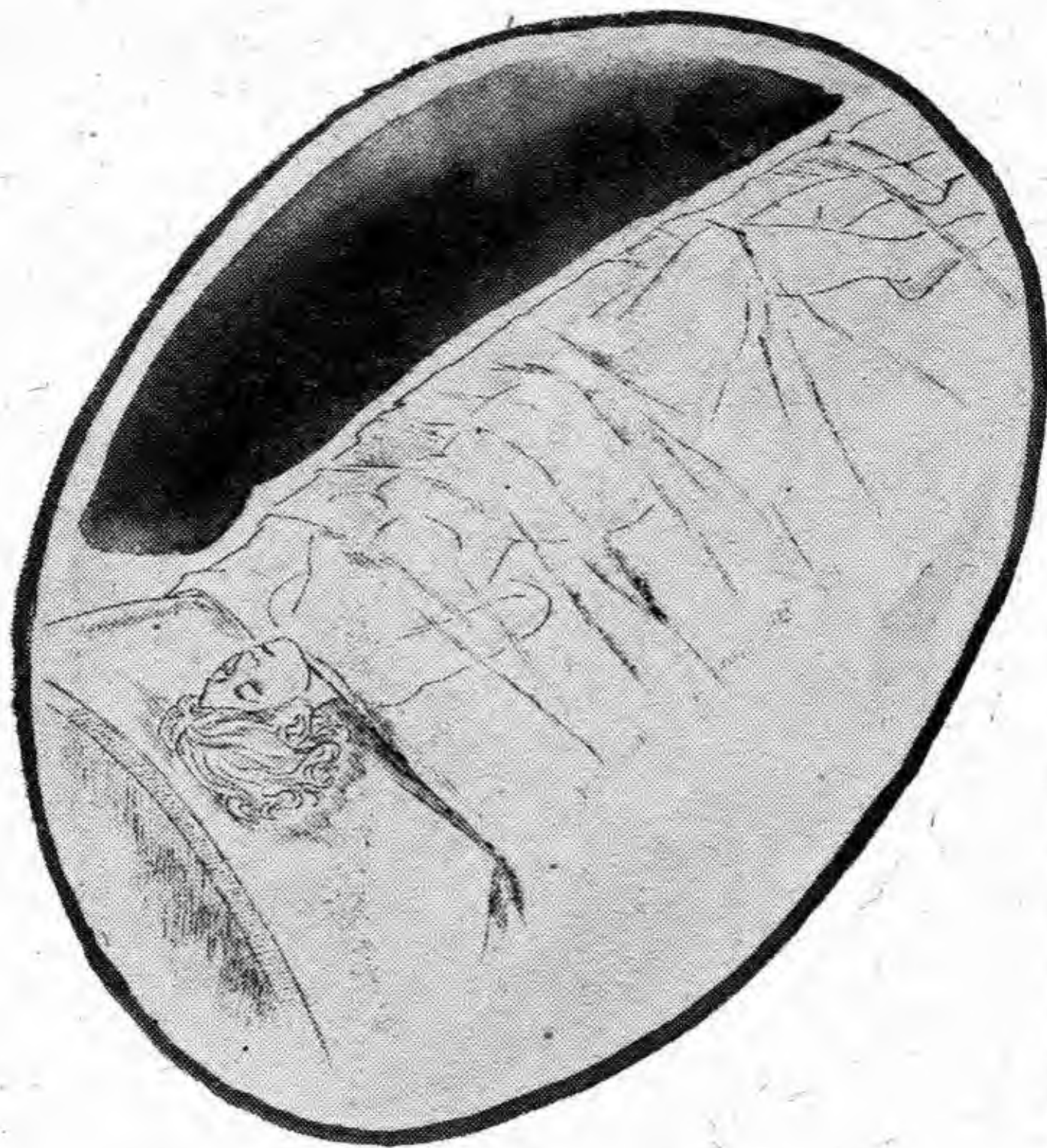
針間の電撃作戦と言え、経済界では知らない者が居ない。必要とあれば真夜中でも会議を開くとさえ言われていた。

針間がZ省に顔を利かせたがって頼りに下僚を抱き込んで、という噂は常岡も聞いていた。何れはZ省随一の実力者で、次の次官は間違いないと言われている彼の所まで、附届けが来ることは明かだった。

常岡は実はそれを待構えているのだ。最近めきめきのし上って来た天下の針間商事が、常岡程の男を動かそうとするのに何十万などという端金を出さず筈がない。

六年前、部長になったばかりの頃囲った下谷の妾ももう卅を過ぎた。世田ヶ谷の本妻は四十を廻っている。常岡は異常に嗜虐性が強いので女体の傷み方も甚だしかった。ピチピチした近頃の甘娘を見ると、勃然と食欲が起って来る。

ふと垣間見た、明るいグレーのツー・ピースを着ていた田辺の秘書を、常岡は心の中で見なおしてみた。身長は三寸か四寸あったろう。男なら誰でも思わず眼をみはるような女だった。一寸見だけに余計心をそられるのかもしれない。



彼は勝手に空想した。女秘書が頭上で両手を菱形に開き、両脚も菱形に開いて、映画で見た、高築暁子の処刑を受ける姿態と同じポ

ーズになった。

狐の国の女王に扮した高築が河童の国に捕えられて殺されかかる場面だった。

両の手首と足首を並べて縛った縄目のきつさ。後方の磔刑台に両膝を縛り附けられ、白い裳がさつと割れる。脇腹を軽く突かれ、悲鳴をあげて、身動きならぬ身体を微かにうねらせて苦しむ。

彼はスクリーンにそんな姿を晒す暁子を見て、やはり年だ、と思った。同時に自分の年を思出し、遺瀕ない焦りを感じた。

若い頃の暁子は冷い程高貴で理知的な美貌を持ち、学生や若いサラリーマンなどのインテリ層に圧倒的な人気を持っていた。Z省に入っただけの若い事務官だった彼もその一人だった。

彼の不満は只一つ。高築の被縛姿が絶対に見られないことだった。大概の監督は顎で使ったという程誇り高い彼女が、縛られたりしなかったのは当然だったろう。

併し今の高築暁子は半裸で縛られ、悲鳴を揚げ、身を曲らせて辛うじてスターの末席に名をとどめている。

常岡にはそれが今の自分と似ているように思われた。高築にとってあられもない媚態が必要である様に、四十七才の常岡には権力と金が必要なのだ。

常岡は此の頃廿台の青年を見ると、嫉妬めいた感情が湧上って来ることが時々あるのに気附いていた。若い女を手に入れば此の感情は静まるかもしれない。

書記の差出した目録を、針間社長は念を入れて読返した。

一、平屋建洋館一棟。地所二百坪附。

時価約百卅万円。

一、乙女一人。廿六才。百六十三糎。

体重五十六キロ。

一、乙女一人。廿四才。百四十八糎。

体重四十八キロ。

但し本目録御覧後直ちに御焼却可被致御願申上候。

「渉外部長。常岡にサディズムの気があることは、絶対に確かなのだな?。」

「言うまでもありません。私が部下に秘かに調べさせたところ、浅草や吉原あたりの縛りの実演で、何回も客席に居る所を見たそうです。そうでなきゃ私だって、うちの女秘書や極東通信の女記者を、ああ惨くクビにさせてまでマゾ女を探したりはしません。」

「その二人は間違いないね。」

「私の秘書に関する限り、神かけて誓います。」

「田辺君が神かけて誓うのなら、私だって神かけて誓います。極東の女記者は大丈夫です。」

野原市場部長が口を挟んだ。

「社長。隣室に万端の用意を整えてございますから、社長御自身で確認なさったら如何でしょう。」

「うん。」

針間の白髪の下で小さな目がキラリと光った。

社長を先頭に重役達はどかどかと隣室に入って行った。

隣室は椅子、テーブルを片隅に片寄せて、豪華な絨毯の上に大きな新しいベッドが二つ並べてあった。

白いシーツを首までかけて寝かされている二人の女が、顔を赭らめて重役達を迎えた。

薄いシーツは寝ている女達の身体の線を鮮かに浮立せている。一人は小さく、一人は大きい。二人は後手にされて胴をベッドに縛附けられていた。

「ふうん可愛い娘じゃないか。」

針間は気持良さそうに小さい方の娘の小さな顎を撮んで、赭くなつた顔を真上から見下した。瓜実顔、というよりも椎の実型と言つた方が良く、整つた顔で、唇は小さく賢げに引締り、円らかな目は生々している。

「名前は……。」

「小松……。」

終りまで聞かずに針間の太い指が小松の小さな鼻をギュウツと撮み上げた。唇が割れて、小粒だが綺麗に揃つた白い歯の間から、桃色の可愛い舌が苦しそうに蠢くのが見えた。

「少し体が貧弱だな。もう少し肉附が欲しいね。それに肌が黒くて粗い。」

「併し社長。此奴は少し茶目^{こいつ}だけど、素直で羞しがりで、可愛い娘ですよ。顔もまず美人の部と言えるでしょうし」

「うん、不合格とは言つてはせんよ。」

会議中からずっと此の部屋で二人の番をしていた渉外部の若い社員が、ベッドの横に附いているハンドルを廻した。ベッドの床がバネ仕掛でぐうっと持上る。

小松は朱を注いだ顔を横に背け、目を固くつぶって泣出しそうになつた。

隣の女はそんな小松の様子を気持良さそうに見ていた。彼女はどこかふてぶてじい所があつてケロリと天井を見上げていた。

練馬に新築した贈賄用の家に車で搬ばれる途中、小松は思いがけない自分の境遇の激変に驚き、恍惚^{うつつり}としていた。

ジャンヌ・ダルクの哀れな物語りを読み、ジャンヌの苦渋を想像して、息が詰る程興奮し、羨望したのはまだ女学校の三年位の時だつた。

私もそんな目に合されることが出来たら、どんなに素晴らしいだろうと思つていた。併し実際に自分の身の上に、そんなことが起るとはとても思えなかつた。

ジャンヌ・ダルクだのガリガイだの、引廻された上焼殺されたという三島のお関^{おせき}だのは、封建社会という良質の堆肥の上に咲いた豪華な花のようなもので、民主主義になつてしまつてはもう咲き様がないと思つていた。

だから彼女は進歩という言葉が大嫌いだった。学生時代の米田が、尤らしい顔で社会主義の公式論を持出すと、いつも茶目な笑顔で聞流していた。今ならまだお金の為に売買されたり、男に自由に弄ばれたりする女が居るけど、社会主義になつたらもっと窮乏になつてしまう。

そうは思つても女の口からそんなことはとても言えないので黙つていた。

(※^{ミヤカ}ハニヤハニヤ^{ハニヤ}) + ^{キリ}キリ^{ハニヤ}ハニヤ^{ハニヤ}

そんなおかしい公式を一人で手帳に書いてみて、慌てて一字も解らぬ様に又消してしまつたりするのが精一杯の所だった。

「ねえ。あんた可愛い子ねえ。」

隣の女が急に小松の腕を押えて彼女の心を現実に引戻した。女は片手にいつのまにか細い婦人用のベルトを持っていた。

「私石塚って言うの。覚えるのよ。いいわね。」

中央から半分が黒。半分が緑になっている薄いスウェードのベルトで、キュウツと後手に縛り上げられた。傍若無人だ。夜が遅いとは言え車の中は明々と灯が点っている。

運転手が気附いて振返って笑った。羞しそうにうなだれる小松。

スウェードのベルトが柔かな頸に巻き直された。

頸動脈を止められて小松は跪いた。頸から頸頭部へ焔の束が噴上げて来た。顔は真赤に充血し、米嚙に太く青い静脈が浮上り、「グウツ。グウツ。」と咽喉が鳴る。

石塚は悪魔の微笑でそれを覗き見ながら、小松の細頸を締め上げた。嬌かなベルトを緩めたり緊めたりした。その度に気味悪く開き放しの小松の目から間歇泉の様に涙が溢れ流れる。

車が漸く停った時。涙でぐしよ濡れになった臉の端には幽かに血さえ滲んでいた。綺麗に光る目で拷問者は拷問者を見上げた。無限の怨恨と讚美の色の混った美しい目の光だった。

常岡局長が針間から贈られた妾付きの妾宅に初めて現れたのは翌日の日も暮れてからだ。

家は近所の家から大分離れて原と雑木林の間に建ち、四囲は高い鉄柵に囲まれ、柵の内側にも多くの樹木が植えてあった。その上此の家には密室造りの地下室さえ用意してあった。

針間商事の社員達を送返し、すっかり鍵をかけてしまうと常岡は

地下室へ降りて行った。

扉をあけた彼は思わず立停った。病院のレントゲン室の様な窓一つないコンクリートの小部屋の真中に、大小二個の女体が、奇妙な箱に入れられて立っていた。常岡を見て小柄の女は羞恥に頬を真赤に染め、大柄の女は艶然と笑った。二人の首から箱の前に木の札がぶら下り、墨痕鮮かに、

贈呈。

常岡東一郎殿。

と記してあった。

小松にとってもそれは忘れられない一瞬だった。或る強い男が我身を箱に詰め、別の強い男に、或る種の利益を受けることの代償として勝手に贈ってしまった。人格だの自由だの、そんな物はありはしない。彼女は只、縛られ、弄ばれ、苛さいなまれていればそれで良いのだ。何という幸運。

箱には穴が開いていて首だけ出す様になっていた。両手は背骨の上で一本に縛り合され、底のない箱を胸の上まで冠せられている。四隅からは足の下の方角い板まで棒が伸び、その真中にも棒があって、首の後から背筋、踵にぴったり当り、腿と膝と足首は固くそれに縛り附けられている。石塚より六寸も背が低いので、爪先と板の間には練瓦が三枚重ねてある。髪の毛は束ねられて天井の板に吊上げられているので、項垂れることさえ出来はしない。これは立枷と言って、昔中国で盛に使われた拷具だと聞いたが、本当に苦しかった。身動き一つ出来ないでいる位い苦しいことはないと思った。

天下の針間商事が周倒な計画を凝らして贈った此まいないの略が、常岡の

気に入らない筈はない。

常岡の出勤は早かった。

玄関先に手を突いて見送った和服の小松は、胸をときめかせながら奥の寝室に駈込んだ。

「アッ、アッ」

石塚の苦しそうな呻声が廊下まで聞えている。

朝の陽は、もう一杯に寝室に射し込んでいた。琥珀色の曙光を一杯に浴びて、白い、豊麗な石塚がカーテンの様に窓辺にぶら下がっている。いや寧ろそれはカーテン代りにというべきだろう。綴帳の様なカーテンはベッドの上に置かれ、太い銀色の針金にはカーテンの鍔の代りにイヤリングが通され、石塚はそれで鼻中隔を挟まれて吊されていた。豊かな全身に膏汗が滲み、仰のけた顔に鼻梁が一層隆起して、鼻中隔が前に丸く迫出している。蒼ざめた顔には荒縄の猿轡が頬を二つに裂いて喰入っていた。

「石塚さん、今降してあげるわ。」

急いで石塚に手をかけた途端。小松はハッとして手を引込めた。出勤したと思っていた常岡が庭先に立って、出がけに試みた「カーテン」の効果をじいっと窓越しに見守っていたのだ。

五十六キロの体重が後手にかかり、縛られたままの全身に苦悶の表情を浮べてのたうつ、くねる……。

折よく石塚の爪先は床に触れた。窓枠の上底とカーテンの銀線が正確な三角形を描き、その頂点に滲めにねじくれた石塚の鼻が位置し、背筋は垂直に伸びて、脛脛を硬直させた白い足裏を精一杯見せている。両脚が苦痛に細かく震え、振動は全身に伝わった。

腕時計を一瞥して常岡は踵を返した。その姿が見えなくなると小

松は椅子を持って来てその上に立ち、銀色の針金の端の鍵を窓枠の鍔から外してやった。

金色のイヤリングの細いねじが、石塚の柔かな鼻中隔に突刺さっていた。

常岡は前の晩、カーテンの針金で石塚の手足を縛ったりしている内にすっかり此の責道具に魅せられてしまった。

役所へ行く途中でも、薄い白麻のストラックス姿で自転車に乗った少女を見ると、直ぐ頭の中で、その自転車の代りに、太い螺旋巻の銀線に置きかえてみた。明治時代の女工虐待の一手に、荒縄で梁に吊したというのがあったが、彼が想像したのもそんな図だった。

役所では、大勢のオフィス・ウイメンを農家の軒先の丸干大根みたいに、役所の窓の白いカーテン紐からズラリとぶら下げる妄想が彼を捉えた。どのオフィス・ガールを想像しても、身長はともかく遅しさに石塚に及ぶ者は居そうもなかった。

併し夜妾宅に帰って、二人を前に銀色の針金を手にした途端、別の責手が彼には浮んだ。

彼は錐を持って来て後手に縛った石塚を横に寝かせ、顔を膝で押えつけて鼻に錐を擬した。

「チーッ。」

一瞬石塚の口から鋭い悲鳴が洩れ、唇を噛んで静かになった。こんなに簡単に女の鼻中隔に孔をあけてしまうのは勿体ない気がした。

錐を挟る様に廻して孔を大きく拡げていると、流石の石塚の目にも薄く涙が浮いて来た。小松が両手を突いて傷ましうに石塚の顔

を覗き込んでいる。

「小松君。今度は君の番だ。」

「厭です。小父様、堪忍して頂戴。」



小松は合掌し、哀願の目で常岡を見上げる。構わずその手を後に廻して縛ろうとすると、飛退って、今度は両手を畳に突いて許しを乞うた。

「幾ら何でもお鼻に孔をあけるなんてあんまりです。堪忍して、小父様。」

美しい顔が唯一の財産の小松が、例え鼻の奥でも、顔を傷つけられるのを恐れる気持は解る。が、常岡にしてみれば、だからこそ誘惑が強いのだ。それに小松の素振には、男の前に手を突いて憫みを乞うこと自体を楽しんでいる様な感じさえ受取れる。

常岡は長い細引を持って来て、小松の手足を合掌姿のままひしひしと縛り上げた。手首を縛った縄は、最後に首にかけた。

顔を軽く上に向け、可愛い鼻に錐を当てると、よく光る目から涙の滴がつと頬に流れ出し、小鼻の両脇に小さく溜った。

「気の早い奴だ。もう泣いてやがる。」

小松は泣きながらとうとう鼻に穴を通された。そこへカーテン線の端の鍵を通し、ペンチで鍵を鑿に直した。

何かの家畜みたいに、鼻を一本のカーテン線で繋がれ、鞭で追われて二人は地下室へ連れて行かれた。一人が遅れると鼻が強く引張られるので、二人とも思わず声を上げた。

日曜の早朝。

一台のトラックが門から中庭に入ってきた。

トラックは多量のバラスと少量の割栗石を積んでいた。

常岡は石材店の店員に命じて、バラスを細長く敷いて白い小路を作り、あちこちに割栗石を置かせた。

二人は古ぼけて何本も釘の出ているハイヒールを素足に履かせられ、その上を歩かされた。

歩き難いので、初めてハイヒールを履いた少女の様に上体を前に腰を後に引いて、お尻を突出す様な恰好で歩かなければならなかった。

「空襲の時、線路をてくてく歩いていたら、前を歩き難そうに歩いている女の子のもんぺ姿がとても立体感があったんで、それから思附いたんだ。常岡式女性鑑賞法とでも言うのかな。」

常岡はそんな呑気なことを言って、ニヤニヤ笑いながら二人を眺めているが、歩かされている二人は、固く革の枯れた古靴に膚を擦られ、足裏を釘で挟まれて、拷問靴でも履かされている様な痛さだった。

常岡はそのままの姿で二人を立樹に縛りつけ、家の中へ入ってし

まった。

その時一台のヘリコプターが低空で二人の頭上をゆっくり飛んで行った。羞恥の余り二人は思わず顔を伏せた。

もう一度出て来た時。常岡は水を一杯詰めた一升瓶を四本抱えていた。二人はそれを両手の中指の附根に括り附けられた。指一本でぶらぶら揺れる一升瓶の重味を耐えて歩かされた。ともすれば瓶の底が割栗の稜に当って割れそうになる。

「小松君。その瓶を割ると極刑だよ。」

体力の劣る小松の苦渋は大変だった。終いには眩暈がして来た。

或日は又「兎跳び」という奇刑が執行された。

生花の剣山けんざんを沢山買わせて密室の床に並べ、その上に薄い羅紗を敷いて石塚にピョンピョン跳ばせるのだ。

石塚は手足を縛られているので前へ跳ねるより動き様がない。ピョンと跳んだ石塚のすぐ後を、可愛いチョコレート色のハイヒールを履いた小松が追って行き、右手に持った卅CCの注射器の針で追いつける。

ウツ、チーッ。

針が刺さると、悲鳴を揚げて巨大な白兎は又ピョンと前へ跳ぶ。

後を追って小松が又、

プスーリッ。

ウツ、チーッ。

プスーリッ。

ウツ、チーッ。

小松は時々剣山けんざんに躓いて転倒した。すると華やかなコバルト色の

スカートが花の様に開いて、悲鳴があがった。

針間商事とZ省を中心とする大規模な汚職の網の目を最初に手繰り出したのは、東京クロニクルだった。針間社長の、いかにも戦後派の実業家らしい強引な贈賄ぶりに、汚職慣れのした国民も舌を捲いて驚いたことは、先刻読者諸氏が御承知の通りである。

網の目の中央で、精力的な鬼蜘蛛の様に貪婪に好餌を貪っているに違いないと、全国の新聞が予想した常岡局長が突然に自殺をし、その夫人が、

「主人は最近、部下の中から多勢の収賄容疑者を出して、国民の皆様には申し訳ないとしても沈んでいました。神経衰弱の発作じゃないでしょうか。収賄などとはとんでもない。私は主人から俸給以外一銭だって受取った覚えはございません。」

と語ったことも、捜査を通じて彼の収賄事実が現れず、東京クロニクルさえが遂に、

「常岡局長の死は単なる神経衰弱の発作だった。彼は見掛けによらず純情な男だった、とZ省内では専ら評判である。」

と書いたことも、まだ読者諸氏は多分記憶しておられるだろう。

練馬の家は針間商事の手で秘かに密室を潰して売りに出された。

併し常岡そっくりの男が出入し、家の前を通ると時々幽かだが女の悲鳴や呻き声らしいものが聞えた。此の奇妙な家の噂は暫く近所の人々の口を賑わした。それも段々下火になって余り人の口に上らなくなつた頃、その家の売買を扱った不動産屋の所へ東京クロニクルの若い記者が訪れた。

野心に燃える彼は、それから三カ月必死の探索を続けた。そして或日久しぶりに針間商事に現れ、秘書室の石塚某女、及び小松某女への面会を申込んだ。石塚は留守だった。一人現れた小松を見て彼は顔色を失った。

「小松、というのは君だったのか……。」

二人は銀座裏の小料理屋の二階で相對した。

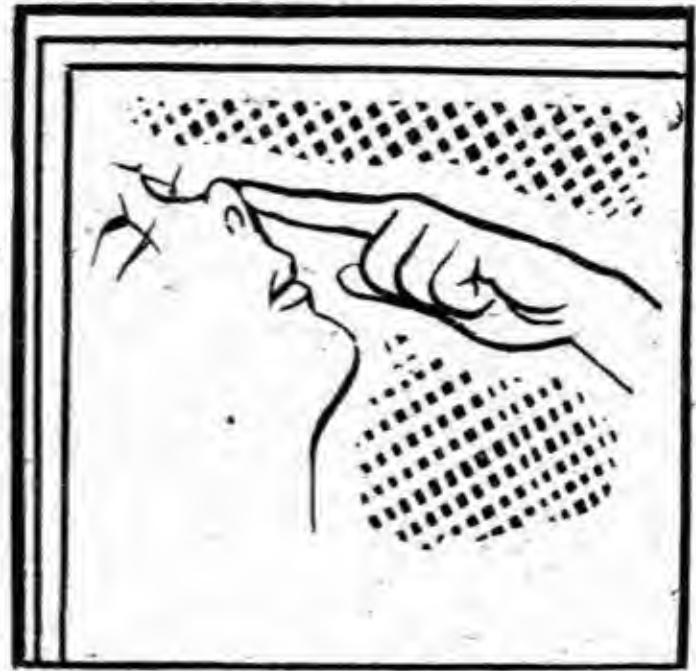
「よくそれだけ調べたわね。流石に米ちゃんだわ。でも一つだけ感違いがあるわね。私も石塚さんも、お金の為に賂された訳じゃないの。生れついた血の故なの。それはね、あの常岡さえ、それが露わされた場合を恐れて自殺した程、人に知られてはならない血なのよ。それさえなければ私は米ちゃんのものなの。でもいいわ。私なんかどうでもいいから、米ちゃんは此の記事をスクープして偉くなって下さい。ね。」

小松の顔が何かの決意で崇高な程美しく輝いて見えた。その目の前で長い間の汗の結晶である汚いノオトを、米田望助は音立てて破いた。

「死んじゃいけないよ松公。たとえ、どんな血を持って生れたにしろ、その為に死んでいいなんて理屈があつて耐えるものか。死ぬんじゃないよ。え。」

一年程後に米田は結婚した。

花嫁は小松ではなかった。



告白

わたしの体験

松本 瑳智子

私は、本年二十二才になる女で、現在電話交換手をしておりますが、多分にマゾを自覚しています。

ずい分昔から、いじめて貰いたいという漠然とした希いを持っていたのはたしかですがそれが後に述べるような、まるで気の違った者のような一時期を過し、決定的にマゾヒストの座に括りつけられてしまったと思えるのです。でも、そんな自分の気持がマゾヒズムというものだとは知ったのは最近のことで、偶然に読んだ本誌によって識ったのです。私をいじめて、直接に「苦しい嬉しさ」というも

のを体得させてくれたS子さんも、こんな心理的なことは知らなかったらしく、何も話してはくれませんでした。

私が本誌を初めて知ったとき、それはつい三カ月ほど前のことです。書店で何気なく手にした時の私の驚きと喜びを御想像下さい。そしてそれが、私の、それまでの何か自棄的ないらだたしい気持に一種の安らぎを与えてくれるものとなりました。でもその瞬間には胸がドキリとし、自分の秘やかに胸の奥に畳みこんでいた姿が、ハッキリした形で公衆にさらされているような恥かしさで、顔が燃え

上るように火照ったことを覚えています。以来、本誌を手離せなくなったのは当然です。

私には、今のところ「お友達」がありません。いえ、世間一般にいう意味のお友達のことではありません。本当に自分というものの心の底まであけっぱなしに出来るお友達のことです。これは私の、結婚適令期という年令のせいでもあるのでしょうか。どんな親しくしている人にでも、思わず知らず心に衣をかぶせてしまつて、あの時のようにガムシヤに没入も出来ず、Sさんのように積極的に私をいじめてくれる人にも出合えず、どこか胸

の隅に大きな破れ穴があいているような淋しさを感ぜ、本誌を無二のなぐさめにして過している昨今なのです。

でも、私の体験からいって、本誌は他の雑誌ではみられない特色で、私の心をなぐさめてくれるとはいいいながら、やはりどこか物足りなさを感じます。これは、本誌が公刊物であるので、記事の限界という点でいろいろ編集の方が苦心のセーブを加えていられるためでしょうか。それとも、私の望んでいるようなことは、私だけのことなのででしょうか。

私の体験を少し書かせて戴きます。

郷里の学校を卒えた私は、すぐ神戸の電話局に就職し、寄宿舎生活にはいりました。始めの内は、お仕事を覚えるのに一生懸命でしたし、そんなことは夢にも考えていませんでしたが、少し慣れて、気持ちにゆとりが出来てきた頃、室替えがあつて、私はS子さんという、私より四つ年上のお姉様と二人で一室に住むことになりました。

S子さんは、それまでもお仕事のことや身の廻りのことで、何かと相談にのって下さっていたし、私としてその室替えはとても嬉しく、ほんとの姉妹以上の親しい生活に入れ

たことを喜んだものでした。

そのS子さんが、あるとき、ふざけて私にいたずらしたのを機会に、急に私を組み敷いて鼻を摘まみ上げたのです。私は、自分でいうのはおもしろい感じがしますが、色が白いことと、鼻の形の整っていることに関しては常々生んでくれた両親に感謝し、ひそかに誇らしく思っていました。それで、S子さんが私の鼻を摘んだ瞬間、やはり、私の鼻は美しいのだわという自信と、何かいい表わせないので、妙に羞しい気持ちとがとっさに入りまじって湧き上り、思わずS子さんの手を振り払っていました。

するとS子さんは、私をうつぶせにして、いきなり私の両手をとって背中に捻じ上げてしまったのです。そうされると、急激に何か私の体内の血が沸き上ってきて、えたいの知れない期待に胸が踊る感じがしたのでした。

S子さんは、そんな私の奇妙な気持ちがわかったのかどうか知りませんが、無言のまま私の背中の中の手を手早く細紐で括り、さらに胸まで紐を廻して括り上げてしまいました。

私は自分の心とは全然逆に、むちゃくちゃに暴れました。でも縛られてはたかが知

れています。S子さんは、暴れる私の両足をもう早く揃えて括り上げると、おもむろに鼻を攻撃？し始めたのです。

私は頭をすっかり掴まえられて転がることも出来なくなると、しようがないといった恰好で力を抜きました。それからもうS子さんのなすがままでした。私が、うんといじめて貰いたいという気持ちに没入してしまったのですから――。

タオルでさるぐつわをされ、鼻を入念にいじり廻され、くすぐり、捻り上げられながら私は、訳のわからない悦びに身をふるわせ続けていたのです。

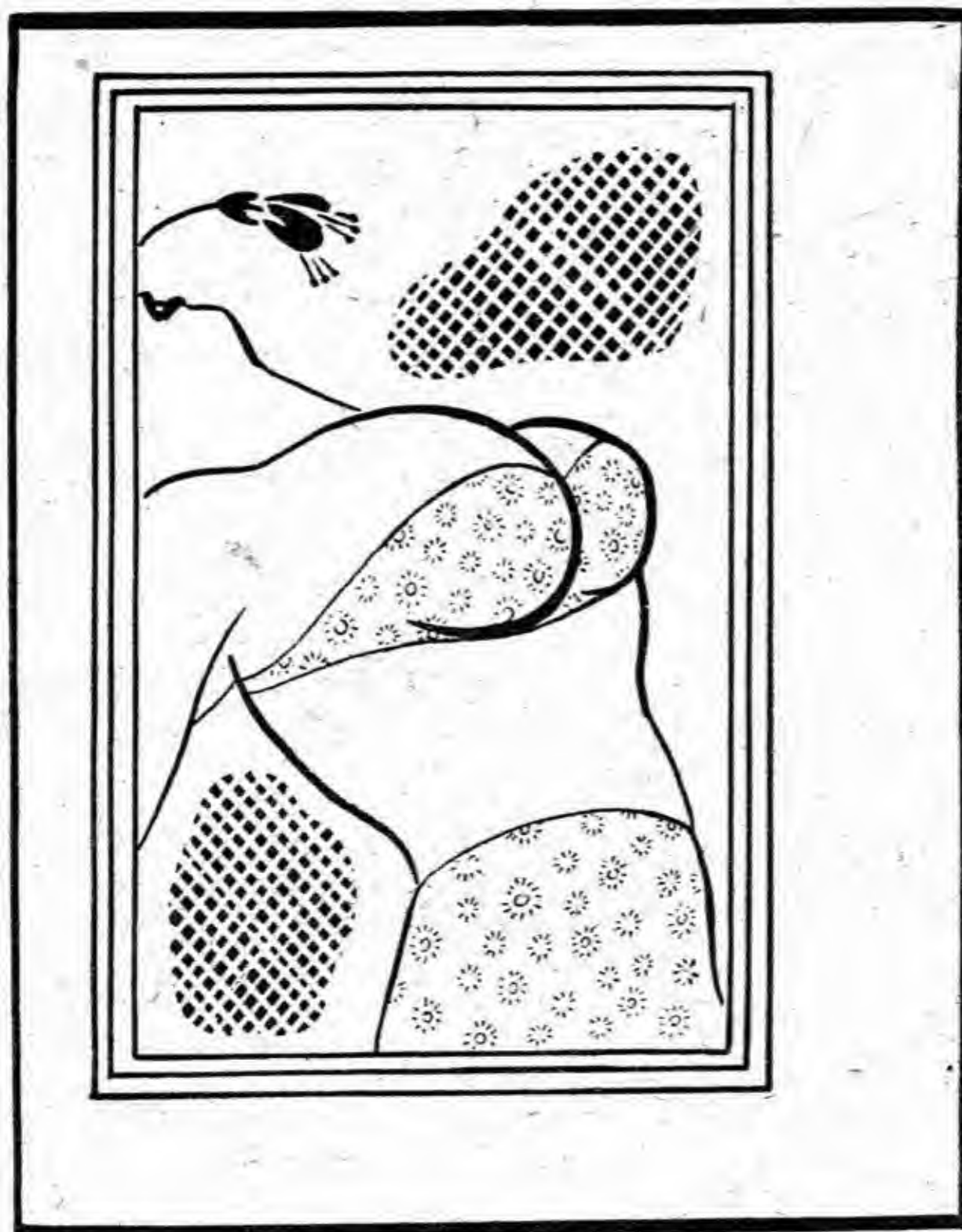
私を括り上げていた細紐を解いてからS子さんは謝りました。でも私の「嬉しかった」という言葉を聞いて驚いたように何遍も念を押した末、無言で、じっと私をみつめました。私は消えてしまいたいほど恥ずかしく思いましたが、再びS子さんが私の腕をとったときには、自分から両手を背中に廻してしまいました。S子さんはゆっくりと括ります。そしてとうとう、その夜は後手に括られたまま寝入ってしまったのです。

それ以来、私達二人のこの奇妙な遊戯は毎

夜行われ始めました。

でも、二人だけで狭いながらも一室をもらっていた生活は長く続きませんでした。もと

もと、人員の関係で一時的な室替えだったの
で、四週間の後には、又、元のように六人部
屋に室替えになってしまったのです。



私は悲しくなっていました。もうあの
遊戯が出来ないからです。S子さんは秘かに
訴える私をなだめて、お休みを利用して旅館
などで縛っては下さいましたが、お金がかか
るので毎公休という訳にはゆきません。私は
やるせない不満の日々を送っていました。

そんな私に、さらに悲しいニュースがもた
らされました。S子さんが郷里へ帰ってお嫁
入りをするというのです。私は涙を一杯に溜
めた眼で聞いていましたが、S子さんも淋し
げに低い声で話すところによると、いろいろ
複雑な事情があって断われないところに追
込まれているらしいのでした。S子さんはこ
ちらに好きな男の人でも居れば、それをたて
にして断わるのだが、と聞いていましたが、
よし、そんな人があっても断れるかどうかわ
からない程のことだったのでした。

そして、いよいよ明日帰郷するという前日
に、休暇をとった私と共に、有馬温泉のある
宿に、お別れの遊戯を目的で、思い出をこし
らえるために出掛けたのです。

その宿で、私達、いえ私は、見事な思い出
を身を以ってこしらえることが出来ました。
今こうしてペンを執っていても、体がふる

えるほどの実感を持って迫ってまいります。

でも私には、それを順を追って書けないのです。半ば夢中であつたからかも知れませんが、強烈に頭にやきついていいるのは、その日初めて、パンティとブラジャーだけの姿になつて、素肌直接受けた麻縄の締めぐあい。

本格的？に受けた高手小手のギッチリした緊縛感。殆んど手足が一緒になるぐらいの逆エビ縛りの苦しさ。ところ嫌らわず捻り、くすぐられて、ごろごろ転げ廻つたときの気持。

そして、さんざ鼻いじめをされて、何回となくしゃみを連発させられ、千切れるばかりにもみくちゃにされた鼻の、痛く、そして甘美な苦痛の一刻……。そんな感覚的なことだけが、つい先刻の出来事のようにアリアリと思ひ出されるのです。

いいえ、ただ一つ。眼の下に花が、カーネーションの花一輪が、大きく閉じた瞼に浮び上ってまいります。

それは、S子さんが、さんざいじめた私の鼻孔に、床の間の花ビンからとった一輪をさして「花のカンパセの、花の鼻にさした花は素晴らしいわ」と冗談めかしていったのに、しいたげられる悦びというものに酔っていた

私が、つられて見開いた眼に映つたカーネーションのクローズアップです。

鼻の一輪差し。私はS子さんのこの思いつきに、責められながら感心していたものでした。

翌日、神戸駅で、涙をためて別れを惜しむ私の鼻を、発車間際につと手をのばして軽くつねってくれたS子さんも、涙ぐんでいました。

そして、それが本当の別れになつて、手紙の四、五通を交したきりで、S子さんからの音信はピタリとなくなつてしまいました。私からのお便りにも、もうご返事も参りませんが、一たいどうなさつたのでしょうか……。

私達のして来たこと、殊に、私の虐められて喜ぶなどということは、普通の人から見れば、全く気違い沙汰としか思えないことでしょう。でも、本誌のファンの方なら理解して戴けるに違いないと思います。本誌を読んでこんな奇妙な希いに身を灼く女は、私一人ではないらしいことを知り、幾分は気も安らぐ思いなのですが、やはりマゾヒストというものは淋しいものだと思います。

後手にぎっしりと縛られた上で、逆吊りに

されて鼻孔にお茶ビンから水を注がれる。さるぐつわを噛まされて鼻からタバコを無理矢理喫わされる。鼻に細い紐を通して曳き廻される。等々、私の血を沸き上らすこれらの情景は、結婚前の娘の希つてはいけないことなのでしようか。

今になって思い返せば、S子さんから受けた数々の責めも、私にとつては物足りない責め方であつたに違いありません。あれだけは、もうごめんと懲りる責め方というのがひとつも思い当たらないのですから……。

こんなひどい責め方を希う私は、病氣なのでしようか。こんなことは夢か幻に描くよりはかに仕方のないものでしようか。

私も女です。やはり結婚の問題が絶えず頭にありますが、こんなことに理解のない方ともし縁があるものとしたら、私の人生は結婚と同時に閉ざされてしまふでしょう。それを考えるとき、私は底の知れない暗黒の洞窟に投げ込まれたような気持になつて、ろーそくの灯を求める思いで本誌を開きます。

どうか同好の方達の、こういう場合の心境や、その気持の整理の方法など、もっともつと戴せてくださいますよう。心から編集部の方にお願ひして、私の恥ずかしい告白をおわりたいと思います。

マゾヒスティック小説

鉄の指

西田 仁

I

「困ったわ」

マダムの真紀が、せっぱつまつたような声をあげて道の端に立ちどまった。いまの訪問先で一時間ほど待たされて、さらに用件に小一時間かかったのだが、初めてのうちなので遠慮したのだろう。私は事態を察してニヤニヤしながら、

「その木の蔭でなら、いいでしょう」

真紀の持っているハンドバッグを受け取る

べく手を伸ばした。

「ええ」

真紀はそのなかから紙を出し、暗い樹木の蔭にはいつていった。

あとに残るほのかな香料にまじって麦の匂いを乗せた風が流れ、爽やかに晴れわたった紺青の空に星がいっぱいまたいたっている。酒場から酒場への渡り鳥で、夜空の星などここ数年来見たことのない私がぼんやりそれを眺めていると、とつぜん、

「キヤッ」

という真紀のするどい悲鳴が林のなかから聞えて来た。

「ど、どうしました？」

私ははっとして飛びあがった。こんな稼業をしているくせに、生来の臆病がいまだに抜けない私だった。胸をどきどきさせながら目を凝らすと、叢のなかにうずくまっている真紀のすぐそばに、黒い塊のようなものがゆっくりと動きまわっている。

「誰だッ」

と叫んだが返事はない。が、次の瞬間、私

はなれば夢中で土を蹴り、いきなりその黒い影におどろかかっていた。そうせざるを得なかったのだ。

いま受け取ったばかりの金が五十万、私の内ポケットにはいつている。真紀の資金だがこれにもしものがあつたらたいへんだ。万一手強い相手ならば、私が揉み合っている隙に真紀が助けをもとめるだろう。二町もいけば人家があり、その先が車の通る街道だと教えられている。

あたまのなかの血が逆流するような緊張のうちに、私はそれだけのことを計算したが、それも杞憂に終わったようだ。

こちらに勢いのついていたせいもあっただろうが、相手は手応えもなくぐしゃりとつぶれ、はやくも「ぐ、ぐう」と泥を噛んだ。しめたとばかりそのまま嵩にかかって押えつけ、利腕を逆にとって背中へまわした。

「どうだ、この野郎」

「うわァ」

思いつきり捻じあげられた腕の痛みにはたばた抵抗をはじめたやつは、なんと骨と皮ばかりに瘡せおとろえた浮浪者ふうの中老の男だった。弱いはずだ。私はほっとしながらも油断はせず、そいつの首筋に右手を当てがっ

てじゅうぶんに締めつけながら、真紀のほうを見た。

「はやく済ませてしまいなさい」

「だいじょうぶ？」

いくら私でも、相手がこんな男ならば怖がることはなにもない。しかし真紀はまだ不安なのか遠くへはいかず、私の目の前に、それでもさすがに向うむきになった。そのうしろ姿を見つめながら、この女もずいぶん弱気になったものだと思つた。これもやっぱり金のせいだ。

むかし、その日本人ばなれのした豊満な肉体に原色のドレスをまとい、基地の町をわがもの顔にあるきまわっていた頃には、手のつけられない暴れ馬だった。小さな子供に「パンスケ」とからかわれ、その子の家まで追いかけてさんさんになぐりつけた揚句、驚ろいて飛び出して来た若い母親まで半殺しの目に遭わせたという、当時の仲間たちの言葉をかりれば「胸のすくような」実績の持ち主だったのだ。

それが近頃になって運が開け、この地上にわずかな富を積んだので、きゅうに淑やかに振舞って、平穩に世の中を渡ろうと考えはじめているのだ。

もったも、誰だっていい着物を着て豊かに暮らし、肥たごにぶつかるようなまねはしたくないだろうが。

私はとにかく、真紀のくれた支度金で新調したばかりの背広の尻を、どっかりとその男の上に据えたまま、着紀の身づくりの済むのを待った。

「なんなの？ その男。泥棒でもないようだけれど」

心身ともにすこし落ち着いたのか、真紀がのんきことを訊いた。私は、真紀があんまり派手な悲鳴をあげたので、びっくりしておどり出たまでのこと。この男が何者であるかは知るよしもない。

「浮浪者じゃないのかな」

私はあらためて男の顔をのぞき込んだ。鼻も口もわからないばかりに真っ黒に汚れきった顔。坊主あたまに白髪が光っているようだが、月明りのせいかな、その三分の一ほどはつるつるの禿に見える。

私は撥ね返されないように用心しながら、地面に流れているその手首を踏みつけようとしてぎよっとした。コードパンの硬い靴底に伝わった感触は人間の腕ではなかった。細い芯のおった空っぽの袖。

——腕がない！

私はかたわらに白く立っている真紀を見あげた。てらてらと光っているその男のあたまのかたちが、にわかに現実のものとなって私

の胸によみがえった。

「マダム！」

「なによ大きな声出して。追いかけてこられないようにしてはやくいきましょ」

真紀が本性をあらわしていった。追いかけてこられないように処置をしろとはどういうことか。

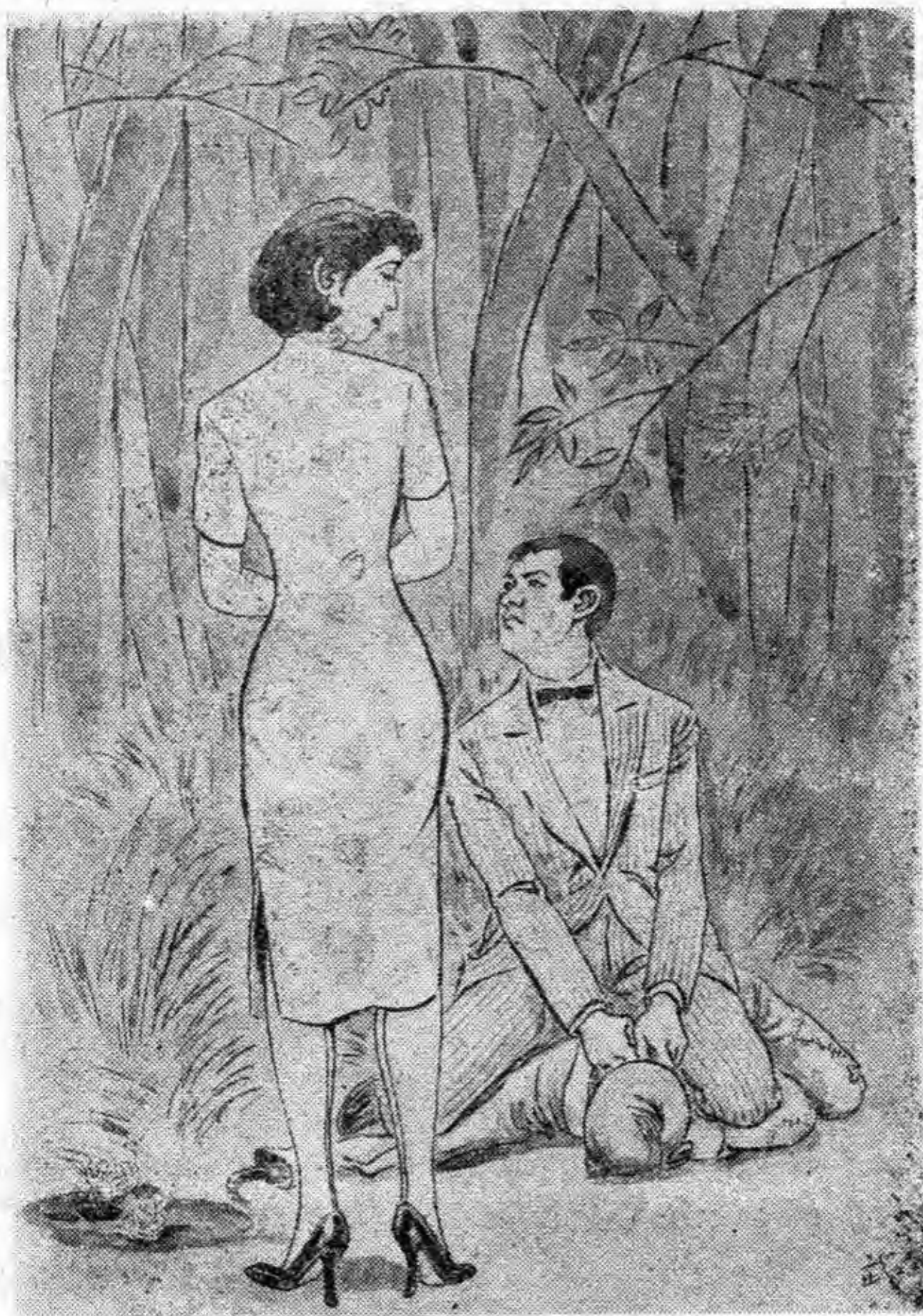
II

「まんざらの初対面でもないようですよ」

押え込んだ手を、すこし緩めてやりながら私はいった。
「冗談じゃないわよ。そんなルンペンに知り合いがあつてたまるもんですか」

ほんほんと巻き舌でいってのけるが、真紀もそう大きな口を、私にはきけない立場に在る。私はいい客筋を掴んでいるバアテンだし、なによりも十何年からの歳月を、即かず離れずつき合つて来た間柄だ。真紀が背の高い外国兵の腕にぶらさがって歩いていた頃を知っているものは、もう真紀のまわりには私しかない。

私は当時、東京の端に在る



基地の食堂ではたらいでいた。それはつらい仕事だったが、役得というものも、ないではなかった。いっばんの国民が空腹をかかえ一握りの飯に目を光らせている時代なのに、まず食うに困るということがない。それどころか、貧しく育った私にとって生まれて初めてのごちそうといえるものさえ、ここでは口にすることができたのだった。体じゅうが冷めなくなるほどアイスクリームを舐めたり、ポンド入りのクラフトチーズの缶詰めをスプーンですくって食べることは、戦争まえでも許されなかったぜいたくであった。

また、接收家屋の入居者が決まるまで、当番の兵隊と二人きりで一週間も留守番をすることがあり、そのときはまったく天国だった。食事の世話をするというのがおもてむきだが、日本人とのあいだにいろいろナルトをつけるのを頼まれることが多い。それは金儲けのこともあり、また女のこともあった。真紀もそのような女のひとりであった。

その前の年から実施されたサンマータムという時間割りに合わせて、まだ日の高いうちからやって来る真紀は、じぶん勝手に冷蔵庫を開いてコカcolaなどをガブガブのみながらG・Iの帰って来るのを待っている。駐留

軍に勤めている日本の男とこうした女とのあいだには、一種の反撥をともなった奇妙な親近感があった。おたがい自棄な気持ちが底に流れて、女が小生意気に振舞わないかぎり、見よう見まねのレディファーストで、男のほうはなにくれとなくめんどろを見てやるものなのだ。——片腕のない、そしてあたまの一部がつるつるに禿げている浮浪者を私たちが見たのは、そういう日のある暮れ方だった。

掃除のついでになに気なく台所口にまわった私が、ダスターシュートの扉をあけてあさましくもぞもぞやっている、きたない作業衣の男の姿をみつけたのだ。そしてそのとき、私は物もいわずに男の背を跨いで立った。駐留軍要員の悲しみ。巨大な白い戦勝者に対する屈辱に満ちた奉仕の毎日。私たちはそれに対するひそかな復讐のように、巷の日本人に對してずいぶん乱暴なことをしたものだ。たとえば基地の食堂にはよくコソ泥がはいり、折良くそういうのを捕えたときには、相手の弱味につけ込み、幻の権力を笠に着て、ひどいリンチを加えるのだ。

女のほうもそうだった。これはつい先頃まで、東京の盛り場でもよく見掛けたが、たべもの屋の店先などにじっと坐り込んで、いく

らか貰うまでは動かないタチの悪いいざりの男がいた。彼もずいぶん歴史のふるい浮浪者で、当時はこの町に流れついていたが、女たちはこれに金をやらず、そのかわり舗道につきのめしてベンチのように使用することを発明した。かわるがわる腰をおろし、わざと反動をつけて痛めつけながらゆうゆうと客を待っているのだ。こんな女は無尽蔵にいた。髪ぼうぼうのあたまのうえに逞しい髻を戴き、嫖客連の笑いものになっている哀れな姿を私も見たが、この撃退法はじつに効果があった。さすがの彼もいたたまれずに、やがて東京のほうへ逃げ出したらしい。

こんな環境のなかに、若い身空で生きている私であったから、ゴミの落し口に首をつっこんでいる浮浪者を見つけたときにも、ちょっとしたいたずらを思いついたわけだ。その浮浪者は、人の気配を察してか、慌てて立ちあがろうとしたが、うえには私がいるし、じぶんのあたまはシュートのなかにつつこんでしまっているのだから動けとれない。

「なんだこんなところにもぐり込んで。恥を知れ。ここは接收家屋だ。見つかったら沖繩いきだぞ」

私は威丈高になって、いままで何度口にも

した科白をいった。

「で、でも——」

大きく開いた私の両脚のあいだでうごめきながら、浮浪者は震えた声で答えた。

「メイドさんが、残りものはくれるといったんで」

「嘘をつけ！」

「嘘なんかつきやしません。い、痛い、離してください」

私は彼の襟首をつかんで、力任せに捻じ伏せながら、

「真紀さァん」

と大声で呼んだ。G・Iが帰ってくるまでは真紀も退屈しているだろう。二人がかりでなくさんでやるのもおもしろいと思ったのだ。

「なによ」

ドアをあけて真紀が顔を出した。私は浮浪者の顔をそのほうに捻じ向け、

「このひとか？」

と訊いた。

「違う。このひとじゃない」



浮浪者は、じぶんのあたまのそばにつ

っているショートパンツの女の姿を一と目見るなり「もっと若い、堅気のメイドさんで」

このいいかたはまずかった。とたんに真紀の大きな目が怒りに燃えて吊り上った。私が事情を説明する間もあればこそ、矢庭に長い足を挙げて男のあたまを二、三度蹴りつけ、

「堅気でなくてわるかったわね。残飯あさりの野良犬のくせに！」

そして私に向かい、

「ちょっとあんた、ハーブが帰ってくるまで逃さないように押えつけててよ」

といった。ハーブとは、ハーバートなんと

かというこの当番兵のことだ。しかしその男が帰って来たところで、こんな野良犬一匹なんというのではない。おそらく、まえの主人に使われていたメイドが気の優しい娘で、この男に余りものなどを与えていたのだろうと私は思った。だから私としては、当時日本人のあいだで伝説のようにいいふらされていた沖縄の強制労働をネタにたっぷりおどかしやりながら、真紀と二人で二、三十分も責めたら放してやるつもりだった。が、それをいってしまったのはミもフタもないのだ。

「そうしよう。人の家に忍び込んだうえに、嘘をつくとは日本人の面汚しだ」

聞いていた浮浪者のほうは、これはたいへんなことになったと思ったらしく、突然ガバッと撥ね起きようとした。

「あッ」

もう完全に取り押えたつもりで、いい気になって冗談口を叩いていた私

の体がぐらりと揺れ、落し口のうえの壁に、いやといふほど額をぶつつけた。

「痛えー！」

腹立ちまぎれの拳を振りあげるよりもはやく、はだしの真紀がぱっと飛び降りて来て、

「なにをしてんのさア、男のくせにだらしない！」

というなり私をつきのけ浮浪者の襟をとって、ずるずると三和土のうえに引きずり出した。

「こうして身動きもできないようにしてやるのよ」

「ゲエッ」

押しつぶされたように悲痛な呻きが男の咽喉の奥から洩れた。額に乱れかかる長い髪を、真紀は首を振って払いながら、

「さあどうだコソ泥。さっきはなんとかいったわね。だけどこうして馬乗りされてみりや、あたしが若い如若くないが、身に泌みてわか



るだろー！」

マドロス型の縞シャツと白いショーツがいまにもはちきれそう。たしかに若さの溢れた真紀の体が、思い切って伸び切った強靱な四

肢が、ほとんど抵抗力を失った相手の肩のうえに君臨して見るも無惨に押しつぶし、馬を責めるときのように躍動した。

「あんた足のほう押えてよ。あたしこっちから、逆さ馬乗りになって締め上げてやるんだから。あのチイ子だって、それで降参させてやったんだ」

チイ子とは喧嘩相手のことだが、どうも若くて堅気のメイドさんというさっきの一言がよほどお気にさわったらしい。血走った目がきらきら光っている。

「気の強い女だなあ。もういい加減に許してやれよ」

あまりにも殺気立った真紀の攻撃に、さすがの私もへきえきしてこう声をかけたが、真紀は無言のまま、はやくも相手の左手を逆にとり、片膝立てになっ

がら、ついで右手もうしろへ捻じ上げようと狙っている。こうして絶対有利な逆さ馬乗りの体勢になり、敵に最大の屈辱を与えながら思うさま痛めつけてやろうというのだ。これで私が足を押えれば、相手は固い三和土のうえにはりつけにされたようなもの、ビクとも動けないままにやがて許しを乞うだろう。喧嘩慣れた基地の女の残忍な戦法がうかがわれた。しかし女がこんなことをする場面は、そうめったに見られるものじゃない。私は下敷にされている男の足のほうへまわった。

と、そのとき――

「キャアッ。いや！」

おそろしい悲鳴とともに、真紀がとつぜん飛びあがった。つづいて男ものろのろと立ちあがり憎悪を塗りこめた目で私たちを見た。

「畜生、おぼえてろ」

低い恨みの声がその口から洩れた。真紀はもうふつうの女の子にもどり、私の腕にしがみついた。その真紀のおかげで泥だらけにされた男の作業衣の右の袖から、無気味に光る鉄の指が、鉤形に曲つてのぞいている。そしていまの格闘で飛ばされた戦闘帽の下にはなんで負傷したのか、三分の一ほどはまったく毛の生えていない傷痕が、生々しい歪みを

見せて残っているのだった。

III

「ああ、あのおじさんね」

「あおとき」からすでに十数年。いまは新興の盛り場で女給パーテン二十人を使うバアのママだ。真紀の態度は、さすがにそれだけの年輪を感じさせる落着きを持っていたがいうことはしんらつだった。

「それであんた、まだ乞食してんの？ あおとき、たしかおぼえてろつかいってたようだけど、今夜は十年ぶりだめでたく返り討ちってわけね。ははは」

しかし相手は、あの接收家屋でのことが思い出せないでいるようだ。もともとあたまたにケガしているので記憶力に障害があるのか、あるいはずっと屈辱の毎日を生き抜いて来たので、そのなかのひとつを選び出すことができないのか。いずれにしても、もうこれ以上ひどい目に遭わされそうもないと判断したらしく、やっと腰を上げた私の下をすり抜けるようにしてずるずるとあとずさりを始めた。

「ちよいと待ちなよ」

それを真紀が呼び止めた。スベ公時代の口調だった。近頃の真紀の口からは、めったに

聞くことのできない言葉ずかいだ。

「へ？」

おびえたように見上げる浮浪者の目が、梢を洩れる月光にはっきりと見えた。

二歩三歩、真紀はそのほうへ近寄り、相手の面前に立ちはだかった。両手を腰に当て、白く光る支那服の足を大きく踏み開いている真紀を見て、私はある期待に胸を躍らせた。

むかしの真紀とは違ういまの真紀。高価な香料、ぜいたくな衣服、優雅な身のこなし。その真紀が、いまこの男に対してなにをしようとしているのか。私は真紀の裾の割れ目から、ちらちらと見える脚の艶に目を凝らした。正直にいうが、私が真紀をそういう目で見たのは今宵が初めてだった。

「おじさんよ」

やがて真紀の朱唇がほころび、またふだんとは別人のような低い声が流れた。

私は身を硬くして、真紀のあの美しい脚が惨めな浮浪者の体を跨ぐのを待った。が、真紀は私の期待した願望を裏切り、あるかなきかの微笑を片頬に浮かべると、ハンドバッグを開いた。

「せっかく会ったんだ。ラーメンでもおあがりよ」



映画通信

銀幕の残酷シーン

吉田和夫

最大の観ものは東映の「天草四郎時貞」

だろう。「時代劇残酷物語」といわれるだけに、ゴウモン、シバリ、ハリツケと、迫力のあるシーンが、大島渚監督のリアルな演出で描かれる。

「ミノ踊り」では、十人の男女キリシタンが後手にしばられて曳きだされ、その上にミノをかぶせて括りつけ、火を点けられるのだ。熱さに走り廻るさまがミノ虫のとび廻るさまに似ているという極刑である。遂に焼死するところを、三国連太郎の絵師にその姿を描かせようとする。

この撮影は、まかり間違えば火傷という

だけに大変な苦勞だったろう。

ハリツケでは、大友柳太朗、丘さとみの夫婦キリシタン。それに橋蔵の天草四郎の母（毛利菊枝）、姉（八汐鉄佳子）も捕えられ、火あぶりにされる。アップでは、ハリツケ柱にくくりつけられて眼前に火の手が上るのがみられる。

その他、キリシタンのうたがいで捕えられた若い農家の女房が、にんしんの身を半裸でしばられ、池の中につけられて水責に苦しむさまなど、すごいシーンが多い。

同じく東映作品、大友柳太朗の「丹下左膳」では、久保菜穂子の櫛巻お藤が捕えられて、左膳をおびき出すためのオトリにされる。しばられたまま道中させられるのだが、勿論、左膳に救い出される。

大映作品では、長谷川一夫の「裁かれる越前守」で、月丘夢路が越前若き日の情婦お袖に扮してしばられ姿をみせる。

白い手を離れた数個の小銭が、今しがたまで真紀が居た雑草のなかに、ばらばらと散った。

土俵際ギリギリ一杯のところ、みごとにうっちゃりを喰わされた想いで、一瞬、そのやりかたをキザなマダムぶりように感じた私は、その小銭の行方を見て新たな血の躍りを覚えた。

真紀はやはり真紀なのだ。昔の暴れ馬はやはり暴れ馬に違いないのだ。ただ、違っているのは、直接的か間接的かの相違である。より意地悪いこのやり方は、彼女の精神的成長の故と解すべきか。

男はしばらく私たちを見上げていたが、すぐにそこに四つん這いになると、てらてら光るあたまを傾けて真紀の投げた銭を探しはじめた。

ガサガサ、ガサガサ。

そこだけに露をためている下草の繁みを、あの鉄の指で必死に掻きわけているおとを聞きながら、私は真紀にうながされて、あるき出した。

真紀はなにごともしなかったように、野道の石ころにヒールをとられながら、月の光のなかをあるいていた。

女優漂泊記

身悶えるあけみ

(下)

近藤

一

それまでは色気が無い女の子だと云われていたのに、さゆりを慕わしく思うようになってメッキリ色気が出たと云われ、責められる女としても美しいと云われた。

ドサ廻りでも女優は女優。私が縛られ女優として人気が出始めると時々お座敷がかかった。ピンクローズでは美原さゆりのお供だったけど、梅村幸三郎一座では、ともかく私も一応の看板だから、舞台の外でもお芝居を強いられる。

土地の興行師の親方とか地元有力者とか大事な御最負筋だと、一座の看板女優がお相手をしなければならぬ。嫌な奴と思いがけなくも笑みを浮かべてお酒の相手をし、適当に嬉しがらせる演技もせねばならないのだ。

梅村幸三郎一座には親方の二人の娘がいる。私が加入した頃はまだほんの子供だったけど、今では随分背も伸びて娘らしくなった。姉が梅村美智代、妹が梅村まゆみ、二人とも親方の血筋らしく結構芝居心があつて人気を呼んでいる。姉妹でも余り似ていない。姉の美智代は陽性そのもの。目鼻立ちも大まかだし、伸び盛りの上背もスラリと高く、声量もたっぷりしていて、もう少し肉がついたら立派に女剣戟の座頭という所。親方も男の子が無いだけに楽しみにして、色気が無くて困ると云いながらも眼を細める。サッパリした気性で男の子のように振舞うから、いつも小麦色の健康的なお転婆娘だ。まゆみの方は色白で華奢で静かな娘。パッチリと大きな瞳だけが姉と共通で、あとは対照的、いつも愁を漂わせた顔が綺麗で美人の相と云える。

美智代を座長にして女剣戟の一座を持たせたいと親方は私に云った。私がいった時、美智代は中学の三年生だった。勝気な美智代

だから友達に負けたくなかったのだろう、中学を出たら高校へ行きたいと云い出した。美智代に甘い親方も流石に思案に余って私に話

ドサ廻りでも

女優は女優

私が縛られ

女優

として

人気が始めると

時々お座敷が

かいた



え



しかけた。私は何となく美智代の中に私自身を見るような気がしていて、好きな娘だったからこれからの座長になる女の子は高校ぐらい出てなければ駄目だと云い切ったのだ。美智代は高校へ進んだ。出欠のうるさくない、お金が物を云う私立高校で、実際に美智代はよく学校を休んだけれど、そのことがあって美智代の気も晴れたし、私を実の姉のように慕ってくれるようになった。まゆみは中学だけで、可憐な娘役を勤め、今では娘盛りの匂うような色気を誇っている。そしてやはり、私を姉のように慕ってくれるのだ。

美智代は舞台の申し子だと云われていた。小学生のうちから結構達者な芸を見せていたとか。丁度今で云えば、白木みのるクンのように天才的で稀少な存在だったのだ。座長が眼の中に入れても痛くない思いの愛児なのだから、初めての舞台はどうか知らないけれど、いつも端役ではなく、固定した狂言の、固定した役

を振られるのも自然だったろう。

美智代のために作られた芝居が『豆助捕物帖』というシリーズで座長の幸三郎さんが目明しの親分として付合い、美智代はその一の子分豆助として大活躍をする。チョコチョコ可愛らしいが正に主役で、梅村美智代の人気が出た。けれども子供の成長は激しい。伸び盛りには一年に十幾廻も伸びるから、美智代はいつの間にか豆助のイメージから遠くなってしまったのだ。色白でおとなしい妹娘のまゆみには、元々男の子の役は向かなかったし、特に豆助という捕物上手のイメージなど全然持たせていなかった。

美智代の舞台からチョコチョコした子供の愛らしさが抜けて豆助捕物帖が演じられなくなった時、座長の胸には、美智代を娘役に使うよりは、もう暫く待って若衆として売出そうという考えがあったらしい。

根が少女だけに股旅物ではやくざの凄みに欠けていた。或る時期では白虎隊とか島原の乱や西南戦争をもじった前髪姿の若武者ぶりを見せていた。座長が偶然に私の責められる女を観てから間もなく、美智代を主役にして、私と競演させる新しい企画が座長の胸に秘められたのである。私が買われて行き、妖艶な悪女として売出されて、『半次郎捕物控』が創られたのだ。

私には初め梅村万寿枝の芸名が考えられていたけれど、私が千原あけみを捨て難くて、結局一字だけ貰って梅原あけみを名乗った。然し、いずれは座長の用意してくれた梅村万寿枝になる日が来そうだと、今では観念している。

梅村幸三郎一座の当り狂言『女郎蜘蛛』

お高僧頭巾の女賊、女郎蜘蛛のお銀という女、紫の布に包まれて目鼻立ちは確認し難いが、膚の白いことや、凄艶な瞳の妖しいことで、誰云うとなく絶世の美女と噂が立った。岡っ引き根性もさりながら、人一倍女に目のない武蔵屋藤兵衛親分が意気込んだのは当然のこと。自分の手で御用にすれば、あわよくばとの下心を持っているから、張切り方も大したものだ。

藤兵衛親分のはやる心を抑えにかかるのが、親分の隠し女という常磐津文字春、すらりとした立姿は白百合を思わせる滅法いい女。膚が抜けるように白く、張りのある声の艶は男を惹きつけて放さない。恐妻で評判の藤兵衛親分がトロリとして眼を細める、浮世絵そのもののような女っぷりなのだ。

何せ女郎蜘蛛のお銀という奴が、弱い町人には眼もくれないが、やたら権柄づくの武士や、金の威光を鼻にかける町人達を眼の仇にして、色仕掛でたらし込み、手強い男は鋭い刃物で心の臓をブスリ一抉りしてから洗いざらい頂戴するという寸法だから、もしも藤兵衛親分がぶつかったりすると、美人に弱いし、随分と弱い町人を泣かしているだけに、まず恰好の餌食になる筈だったからだ。とは云え、虎穴に入らずんば何とやら、文字春をなだめすかして江戸の街を歩き廻るものの、藤兵衛親分はいつも裏をかかれて苦りきるばかり。悪い奴等を殺すことを却って歎ぶような怪盗お銀は地獄耳と云おうか、捕物陣の動きを手にとるような神出鬼没。おまけに大の男が物の見事に急所の一突きを喰うあたり、なかなかの強か者らしい。といって、何しろ、正体不明で手懸りを残さないやり口では、まるで雲をつかむような話なのだ。余程途方に暮れたのだろう。何を血迷ったのか、江戸の街を嗅ぎ廻ってお銀という名の女を片っ端から

縛り始めた。白髪のお銀もあれば、まだおかつば頭のお銀もある。織物問屋近江屋の一粒種のお銀（まゆみ）も情容赦なく縄をかけられてしまふ。親達の哀訴も何のその、十手をふり廻して曳っ立てて行く。

お銀と名づけたばかりに、思いがけぬ災難に見舞われた近江屋夫婦は、睡眠はおろか食事すら喉に通らず、一日中嘆き悲しむばかり。とうとう思い余って越前屋惣助に救いを求めた。謝礼は大枚と聞かされて憤慨した若親分半次郎も、親子の情は先刻承知とばかり、十手を懐にぶち込んで立ち上る。

近江屋の一人娘のお銀が合憎と色白で華奢、お高僧頭巾を被ると立姿が噂の女郎蜘蛛そっくりで、藤兵衛親分が縛って来た中では一番本物らしいという不運な話なのだ。些か自棄気味でお銀と名のつく女を片っ端から縛って来た藤兵衛親分自身が驚ろいた位。ひよっとして本物かも知れないと錯覚を起こし、連日の拷問にも勢い熱がはいりすぎる。まして相手が深窓の箱入娘とあっては全く高嶺の花。縛るにも哭かすにも二度とない機会だ。

昼は凄まじい拷問、夜は牢舎の恐ろしい慣わしに苛まれて、近江屋のお銀は身も心も疲れ切って、最早口をきく気力も無い。見兼ねた半次郎が特に預かることになる、藤兵衛親分のお冠がすっかり曲ってしまった。慌てて気嫌を直して貰おうと追掛ける半次郎に気づかず、藤兵衛は文字春の家へ潜り込む。

常夜燈の陰で思案する半次郎の前を通り過ぎた女。顔を紫の布で包んではいが、すらりとした線の佳さ、正に鬼百合という所か。そっと尾行を始めた半次郎を知るや知らずや、その夜の警戒手薄の一角、悪名高い因業金貸大黒屋利右衛門の家の辺りで姿が消えた。

訝かしく思う半次郎の視野に紫頭巾の女が現われ、跡をつけた半次郎が辿りついたのは、先刻の文字春の家の裏手。思いきって飛込んでみると長火鉢の前に御機嫌の藤兵衛親分が白河夜船で、文字春の姿は無い。さては、と意気込む半次郎が踏込む台所続きの四畳半に、当の文字春の艶やかな悶え姿。燃え立つような緋縮緬の長縮緬、小布を丸めて押込んだ口を手拭いの畳んだので覆い、腰紐で前手縛りに縛り合わせた手首ごと胴のくびれを扱帯がぐるぐる巻締めていく。乱れた裾前から、こぼれる白い脛の佳さ、くの字の身悶えもゾクとする眺めだ。

犯人と睨んだ文字春の意外な被縛姿。だが半次郎の疑いは晴れず却って畏にかける。仕掛けた陥し穴に落ちた女郎蜘蛛のお銀らしい女はやはり常盤津文字春。頑強に否認する女とこれを助けようとする武蔵屋藤兵衛の間に立って、半次郎必死の探索が続く、厳しい拷問が繰返され、さしに強情な女賊も遂に耐えきれずに屈服したのが日限をきられたその日のこと。救い出された近江屋のお銀は両親に迎えられ、謝礼の大金をふり向きもせず立去る若親分半次郎を、娘らしい精一杯の想いを込めて見送り、その傍を文字春の女賊お銀が曳かれて歩く所で幕になる。

勿論女賊お銀は私、半次郎が美智代。

男役の似合う美智代は確かに芸熱心で、舞台には烈しい意欲を示していた。肉体的にもタフだったけれど、それ以上に勝気だったから、どんなに辛い稽古でも、決してキツイとは云わなかった。蛙の子は蛙、美智代は親譲りの座長らしさをいつしか身につけていた。芝居の虫だし、座員の面倒を見るし、そして更に座長らしいワンマン振りも、或る程度露呈して来たのだ。

私のことを他人前では「あけみ姉さん」と呼んでくれるけれど、普段は「お姉ちゃん」と半ば甘えてくれる。私には余り雑用がない。その代り、美智代の気が向いた時は、いつでも引張り出されて相手を勤めさせられる。美智代の芝居そのものが私との競演をヤマにしているし、何よりも私と美智代はウマが合うらしいのだ。私は美智代が好きだ。我儘なきかん坊の所も案外な甘えん坊の所も、実の姉になったように可愛いと思える。もともと芝居は好きだし、美智代が納得するまで相手をして決して苦痛にならない。そして美智代も私を好いてくれる。顔も体も声も匂いも、総てが何となく好きで堪らないのだそうだ。

「お姉ちゃん、ごめんネ。」

美智代にしては精一杯の言葉だったろう。

稽古に疲れた時は私の肩を取縋るように抱き、姉に甘える妹のようにして憩うのだ。その時の私は勿論後手の高手小手という姿、首繩を掛けられることもある。

「あたし、お姉ちゃんが好きなんだ。それなのに酷いことしちゃう。悪い子だね、あたし。」

私は静かな微笑を覚えた。

「ほんとは、あたしだってお姉ちゃんを可愛がりたいたんだ。なのに、お姉ちゃんはあたしよりずっとずっと大人なんだもん。癪だな。あたし、どうしたらいいか分なくなっちゃうんだ。」

正しく恋の告白だった。美智代の稚い心には、私への愛と憎しみがモヤモヤしている。女が女に恋をすることは決して無いことではない。私自身、美原さゆりに激しく恋をした経験がある。女として遙かに優れたさゆりに憧憬と慕情を抱いた私が、今は美智代から烈

しく恋慕されるのだ。嬉しく恥ずかしく、妙な気持がする。

少しオーバーな表現をすれば、片時も離れ離れ私と美智代だから、芸熱心と結びついて暇さえあれば激しい稽古に打込むのも自然の成行だろう。普段からそうだが、もし巡業などで不馴れの小屋へ出ると、どんなに手馴れた演し物でも、私達は得心のゆくまで稽古をした。私と美智代の出演で稽古が必要なのはまず立廻り。そして私が縛られ、拷問を受けて迫真的な苦悶を演じる所が中心となる。美智代は手加減などしてくれない。縛しめは厳しく責めは烈しい。苦しい。痛い。だが心の炎がじかに皮膚を焼き、胸を搏って快い。私がこの可憐な暴君の嗜虐を避ける理由は一つも無い。

縛られることの好きな私には、虐げられることがこよなくいとおしい。美原さゆりに恋を覚える頃から縛られ役に徹して来た私だから、今では責められることが生甲斐とさえ云えそうになった。自分でも女らしいと思う豊かな五体を厳しい縄目で締付けられ、容赦ない苛責に身悶えてのたうつ時、総ての雑念を離れて没入できる世界の展開を識ったのだ。烈しい愛憎をむき出しにして私を恋する梅村美智代が、私に満ち足りるに価する縄をさばいてくれる限り、私は美智代から離れたくはない。

稽古の時、私達は黒のタイツを着る。動きの荒さに適しているからだ。時代劇を得意にしても、美智代など近代性の強いせいか、殊にタイツ姿が似合う。

私は手荒く突倒される。俯伏せの背を美智代の膝が踏みつけ、私の腕は逆に捻上げられて背へ曲がる。右手が左手に押しつけられ、交叉して束ねられると一段落、あとは私の身悶えがそのまま厳しい



お高僧頭巾の女郎蜘蛛の

お銀



縄目を美しく整えるだけの役目しか果さない。タイツ姿の私の体は思いきった屈伸が利く。両脚を背へ曲げて、後手首と結びつけた逆海老のポーズも、割に馴染みのポーズになった。舞台にかけることの勘い責めでも、私の体力のための良い鍛練法だった。舞台で私に加えられる拷問は爪先立ちに吊られての鞭撻ちや海老責め、石抱きという所、芝居とは云えリアルな責めのムードを創り出すとなるとどうしても怪我はつきものだ。痣や擦り傷の絶えないのも仕方が無い。大きな怪我をしないために、そして苦痛の激しい縛しめの下でゆとりのある演技ができるように、厳しい鍛練は一日も欠かせない。

私と美智代は、私の体をモルモット代りに、いろいろ実験してみた。滑車で舞台の上に逆吊りにされ、頭が床から二尺程の宙吊りの儘、様々の悪態をついた。声が少しも思うように出ず、血が頭の方へ下って来て舌が縋れ、台詞を喋るのも死ぬ思いだった。五分と保たなかったろう。男のような唸り声で、徐りと縄のよじれに合わせ廻っているばかりだった。型通りの後手高小手の受縛に首縄が加わり、俯伏せに抑えつけられて括り合わされた足首が背中へ引かれ、凄まじい逆海老の苛みが襲う。肩が、首が、腿が、抜けるように痛く、全身がバラバラになりそう。腹部を底にした揺籠のように

グラグラ動き、悲鳴と呻きが湧き上る。そこまで完全に縛り上げられた私に、ごろごろ転げ廻って喚く芝居が強いられるのだ。

「殺してっ！ 畜生！ 殺せえ——っ！」

台詞が台詞でなく、本心だった。

美智代と私が軸の芝居では縛りがないとお客様の満足が得られなかった。私達の稽古は如何に速く、形良く、厳しい縛しめを創るかにある。完全な緊縛は容易なものではない。私が神妙にして、進んで

縛り易いポーズをとってもむづかしいものを、私が抵抗しながら雁字絡めにされるなどは至難な話だ。私達の悦虐性向を別にしたら、体格や体力そのものでは私と美智代は大差がない。結局、私が必死の抵抗のように見せた演技で、うまく両手首を縛らせてしまうのだ。手首が縛られると、下手に暴れると骨が痛いし、美智代が踏んだり蹴ったりすれば思い通りの縄目が創られて行くのだ。よく映画や他の芝居にあるような、最初に胸を縛るのは抵抗されながらできる縛りではないと思う。まず腕を捻じて手首を縛るか、喉を縛っておとなしくさせなければ駄目だと私は思う。

私の被縛姿は、縛られ役が背後で縄の端を握るまやかしいものではない。真実、両腕の自由を奪われ、手首を高く吊上げられ、喉を堰かれ、疼痛に五体をジワジワと浸すものなのだから、妖しく美しいのも自然だと自負している。

「お姉ちゃん、しっかりやって」

「ウン」

カチッ、カチッ、と美智代が思いがけない切火で送ってくれる。

私は幕の前へよろよろと駆けて出て、前のめりに倒れた。強いライトが私に絞られる。喘いで起上り、一步三步よろめいてまた倒れる。捕手の幸三郎座長が舞台の袖から声で追う。

「待てっ！ 伊勢屋女房お文、親殺しの下手人、亭主の命迄狙う極悪人、御用だっ！」

「違う！ 違います！ 私しや知らない！ 赦して、赦してっ！」
喘ぎなら声を返し、私はよろよろ逃げまどう。舞台から客席へ降り、通路を走り歩き、お客の坐席の背に身を支えて荒々しく息をつ

く。これは私と美智代の考案で、舞台を客席にまで拡張した、云わば立体化の試みなのだ。初めての日、私には客席の反応が、痛い程に嬉しく感じられた。全くの成功だった。

捕手が二人、私の背後から挟みうちに迫る。忽ち私は捉えられ、左右の腕が捻上げられる。私は身を揉んで叫ぶ。

「赦してっ！ 私じゃない、私じゃない！」

「御用だ！」

「神妙にしろ！」

男二人にしっかりと捉えられると、私がどんなに暴れた所でふりほどけたりはしない。私はもがきながら、ズルズル押されるように舞台へ戻される。舞台で待構えるのが武蔵屋藤兵衛、通路で喚く私の前に来ると、いきなり両頬を張り、私の悲鳴を愉しむように、左手が私の胸倉を掴んで締上げ、右手が続けざまに頬を撲つ。

「太え女だ。構わねえから、フン縛って、しよっ曳いて行け！」

舞台の下で、お客の真前で、私は大の男三人がかりの縛しめを受ける。男の力は美智代の緊縛と違い、武骨で只強い。私の身悶えより、藤兵衛親分の意地悪い責めで、胸ははだけ、衣紋が抜けて、肩や背は勿論、時には胸許までが覗けてしまう。

「伊勢屋の隠居殺しの下手人お文、武蔵屋藤兵衛が召捕った！ おい、女。俺の吟味はちつとばかりキツイぞ。どうだ。さんざお手数をおかけたお詫びに、これから近所廻りと行くか。」

「嫌、嫌です。親分様、そればかりは、赦して、お願い！」

身を揉んで必死に哀願する私を、無慈悲な十手が小突く。

「親殺しの女だ！ 亭主殺しも企てた伊勢屋のお文たアいつだぞ！ 人殺し女の顔を、よく見てやってくれ！」

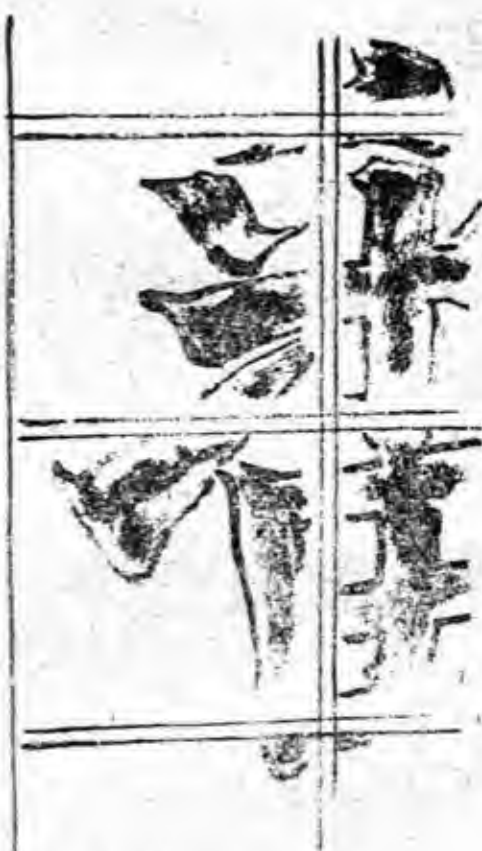
髪を掴まれ、私は客の注視に顔を曝して臉を閉じた。

「お疲れさま。お姉ちゃん、凄いのさすがだね。殺したい位、綺麗で良かったヨ。」

抜衣紋の受縛のまま、縛しめを解かれずに次の景に移る僅かの間、美智代は私をいたわってしてくれた。若々しい腕に身を凭せて、私は憩う。半次郎の衣裳が凛々しく似合う。

「さ、お姉ちゃん、幕があくヨ。今度は笞と海老縛りで、大分キツイけど、お姉ちゃんなら大丈夫だよネ、いつも馴れてるしサ。」

私の役は太物商伊勢屋の家つきの女房お文。娼養子の清次郎という佳い男との間に男の子まである仲だが、清次郎には他に女があり、いつしか疎んじられた。店を清次郎に譲ったお文の父太兵衛が隠居後間もなく急死。愈々自分の代になった清次郎はお文を片づければ邪魔物の無くなる理屈で、充分に企んだ親殺しの芝居なのだ。尤もらしく見せるために自分の身の周りに小細



工を重ねて亭主殺しを匂わせ、おまけにあらぬ間男の噂を囁き引に吹込んだ。武蔵屋藤兵衛の手で縛られては、どの道助かりっこない。面白半分に町を曳き廻された挙句、番屋の中で凄惨な拷問を受けなければならぬ。

絞り出すような悲鳴と哀訴。笞の音。「チッ、癪な奴だ。もう伸びやがった。」いまいまして舌打して、藤兵衛は私を足蹴にする。私の体は前屈みの二つ折のまま、ごろりと倒れる。あぐらを組んだ足首と首を結ばれた海老縛りが、親殺しを白状しない私への拘束で呼吸も不自由な体を十手がえぐったりこじったり、割竹の笞が力任せに振り下ろされるのだ。悲痛な呻きが高く低く、悶えが一頻り続いたあと、ガクリと首を垂れて私は気絶する。高手小手の海老縛りで意識を喪った演技は物凄く苦しい。思わず唸り出しそうになるし、蹴転がされたり手荒く抛り出されたりすると息が止まる想いがする。

番屋の仮牢に入れられた私は、見廻りに来た半次郎に哀訴する。苛烈な拷問に耐えかねて失神しても、すぐに息

をふき返えさせられ、より以上の責め苦に虐げられる私のお文は、やはり女の身で力に限度もある。いっそ一思いに殺された方が楽だと思ふ。只、心残りは家にいる坊やのこと、実の妹お美代（まゆみ）によりしく頼んで欲しいと言附ける。

間もなく私は藤兵衛の拷問に負け、心にもない親殺しを認めて囚衣を着る。明日は伝馬町送りというその晩、私は何者かに盗み出され行方不明になってしまう。日夜の拷問で疲れきった私が自分で逃出す筈はないと出張する藤兵衛は、清次郎の訴えでお美代を縛ってしまう。お美代を厳しく責立てても私の行方は分らない。三日後、伊勢屋の手代佐助に匿まわっていた私は、清次郎の居間へ忍び込み、清次郎と情婦に恨みの刃を刺し通す。騒ぎに駆けつけて呆然と立すくむ佐助がお美代と相愛の仲と識った私は、佐助に坊やを託して、思わず打伏して哭く。その肩をそっと叩いたのが半次郎。私は涙を払って起上り、総ての罪を着て両手を自ら背に廻す。

「お文、覚悟はできてるだろうな。」

「ハイ、磔でも縛り首でも、御存分のお仕置をなすって下さいまし。」
「番屋から逃出したのも、お前一人の才覚だ。子供に逢いてエ一心のことだ。いいな。誰も手伝っちゃいねえんだぜ。」

「ハ、ハイ。」

私を盗み出した佐助の背後には、半次郎の温情があったのだ。

世間を騒がせた女罪人伊勢屋お文の処刑は磔と決まった。町には高札が立てられ、評判になった。

「死んで行くお前にとっちゃ同じことだろうが、お前の親殺しは無実と分った。お前は只、亭主とその隠し女を殺した罪でお仕置にな

るんだ。お前にとっちゃ憎い奴だろうが、人を殺せば死罪は免れねえ所だからナ。……それからもう一つ。お前の妹のお美代だが、手代の佐助と夫婦になって、坊やが一人前になるまで伊勢屋の店は守り通すと云ったぜ。あの二人、お前のために命を賭けて働いたんだ。姉さんのお仕置の日じゃ、坊やを抱いて、きつと別れに来ると云ってたぜ。」

私はそっと顔をそむけて眼頭を抑える。

「さ、お姉ちゃん、愈々最後だから頑張って。磔なんて何だか可哀想だけど、お姉ちゃんてなきやんでなきや演れないんだもの。これと着換えて。こっち向いて、ちゃんと菱型に縛るんだから。囚衣で本縄か。お姉ちゃん、凄く似合う。ずうっとこのままにしときたい位だナ。さ、今度はお姉ちゃんの独り舞台なんだから、思いっきりやって。」

美智代と私はニッと笑った。

先頭に罪状を記した捨札が立ち、罪人としてオレンジ色の囚衣に純白の太目の縄で本縛りにされた私が、客席の通路を一わたり引廻される。コンクリートの床が女の素足にヒヤリと冷い。舞台に昇り、下手に引据えられて刑の宣告を受け、服罪を誓う。後手の縛しめが解かれ、上手に置かれた磔柱の上に仰向けに寝かされる。足台も何の支えも無い、白木の十字架に、私は両腕を一杯に拡げて緊縛される。ギッチリ括りつけられると確かにキツイし、泳え難い。だけど、これが緩くてはとて芝居どころではない。縛しめが緩いと、私は小声でもっと緊くしてと要求する。

「柱を立てい！」

私の体がぐうっと持上がり、宙に浮く。

「ああ、姉さん！」

「御新造様ア！」

舞台の袖に現われたお美代が叫び、佐助が坊やを高く捧げて見せる。その二人を無情の竹矢来が堰く。私は磔柱の上で肯いて見せた。私自身の重みで体がズズッとずり下り、縄目に強く掛かる。胸や胴や膝が殊に疼く。五体がぐうっと締上げられる感じ。いつまで保つか覚束ない。早く処刑にかかってと希う。

「何か云い残すことはないか。」

「ハ、ハイ。最早、何も。」

「よし。やれ！」

二人の非人が長い竹槍を持って左右に分れ、一旦交叉してから、二度目にさっと私の脇腹目がけて突出す。

「ううアッ、うわっ！」

生身の身体を竹槍で刺し貫かれる激痛。私は頭を振り、激しい縄目の下で全身を悶え抜く。私の苦悶に、竹矢来を隔てて佐助の絶叫とお美代の号泣が起る。眼隠しの白布を拒んだ私だけけど、この苦悶で布を振落す方が効果的だと思い改めた。眼隠しの顔でお美代の声を追い、佐助の抱く坊やを見ようとする女囚の姿はいかにも哀れで美しいだろう。だが眼隠しを振落すのは容易でない。緩く結ばれても耳に掛けて落ちないこともあるだろう。結局次の日から私は髪を束ねて長く背に垂らし、眼隠しは耳と髪ごとふわりと止めるようにした。

喚き、悶え、眼隠しは落ちたものの、も早、女囚には断末魔の苦痛が襲い、視界は無に等しいのだ。

場内は暗転。真赤なライトが刑架土に苦悶する私の一身に絞られて何百かの視線を誘導し、白いライトが矢来の外のお美代と佐助に浴びせられる。

非情な槍先が突通り、引抜かれる。もう一度、そしてもう一度。肩や胸が喘ぎ、腹部が波うち、臉を閉じて下唇を噛む女囚は凄絶なことだろう。

あまりにも烈しい刺戟に、観衆は息をのみ、身動きもできない様子。お美代も佐助も声を失い、そっと背後に立った半次郎に支えられながら、私の最期を見守っている。

ガクリノ 頭を極度に垂れる。

私という女は磔られて死んだ。

体当り演技、決死的熱演、なんて言葉は不要と思う。私は只、美智代が好き、芝居が好き、責められるのが好きなだけだ。稽古と稽古の合間に舞台を勤めて、一年三百六十五日、休みが無い。でも私にできることは縛られて責められて苦悶するだけ。それさえむづかし過ぎて精一杯なもの、他のお芝居なんて出来やしないし、やってみたいとも思わない。

私の体が続く限り、美智代の求めに応じ、美智代の加虐を求め、明けても暮れても縄を纏い、鞭に呻き、苛責に悶え続けるのだ。昨日も今日も、そしてまた明日も、梅原あけみの身悶えは熄むことがない。

縄に憑かれて私は身悶えるのだ。いつまでも、いつまでも。

(おわり)

解剖異聞

哀恋腑分奇談

伊藤悦代

夕立の前

蘭医杉田立白は、今宵に迫った生腑分イキフワケの決行を思うと切迫した興奮に駆られて、蘭書の横文字迄、ぼうと霞んで来るのであった。

厳しい炎暑も愈々日暮れたか俄かに涼味を帯びた夕風が忍びやかに半白の髪のはつれをそよがせて行く。皺に彫りこまれた渋茶色の面は五十路と云う年よりはるかに老いさせて見えるのは、激しい研究から来る疲労セイの故であろうか。藍鼠の透綾の単衣に、真夏でも道服を着けた奇異な服装は、身振りかまわぬ習性の一端が偲ばれて苦笑の種となる。

「生腑か!! とうとう僕の宿望も適えられそうだ。」立白はぼそぼそと呟くと、満足感を表情に浮べてじっと眼を輝かした。

生腑分!! 何と云ふ奇妙な話。しかし立白にとっては待望久しき逸物だったのである。三月前実行した罪人の死体腑分でさえ、その私下げには、幾度奉行所に無駄足を踏んだ事であろう。其の度に叱咤されるのが落で引下つて来ねばならなかったが立白は絶望しなかった。既に五十路を越えた老の身ではあるが、心身には蘭医学に対する凄じい研究熱が沸々とたぎり、特に人体腑分と云う試みは我が国

最初の実験であるだけに、その気構えは恐しい迄に真剣であった。

が、遂にその願望の達せられる日は来た。度重なる熱心さに根負けしてか、南町奉行は屈けて死罪人の払い下げを承知してくれたのである。それは三月前、立白は勿論狂喜した。急拠自宅に持帰ると一刻も猶予せず、其の夜の中に決行した。

予め調べのついた蘭書と照合して人体の臓器は少しの相違もなく合致して居た。彼は血塗みれの手をふるわせて雀躍した。

が人間は飽く無き欲望の鬼である。立白は死腑の腑分が達成すると、更にその研究心は翼を拡げ、是非生腑で試したい、きつと死体とは相違する点がある筈だ。と彼は新しい欲望に腐心した。だが死罪人の払下さえ容易にしなかった奉行所である。まして生腑などもあるの他と思うと立白は顔に暗色を漂えて懊悩した。そこでいろいろ対策を練った挙句、その頃の腐敗した世相の裏道を行こうと決心した。

地獄の沙汰も金次第、其の為には書籍の大半も売り尽した。やっと袖の下とやらを潜らせると、立白は初めて行った罪悪感に、ひそひそと身内を責められて困惑した。年はとつ

でも案外純情多感な彼であつた。
、そうした、いわくつきの珍重な生胴なのである。

初夏の夕闇は薄墨をはいた様に書斎の中にも這い寄つて来た気配だ。玄白は未だ火も点さず読書して居たのだが、愈々読み難くなつた字に気がついたか、ぱたりと書物を伏せる。と膝に乗せた儘暫らく瞑目した。澄んだ心氣に、それとなく忙しい夕暮時の巷の喧騒が遠く聞えて来る。向島一帯の下町情緒であつた。

「お父様!! どこにおいでになりますか?」
何用があるのか艶めいた細い声が耳朶を打つた。夕餉の膳を知らせる声であろうか。と、今迄冷静にして居た玄白の口からぽろりと一言「あれも不びんな奴」と悄然と呟いた。娘の吟子の事であろう。

一雨来るのか妙に蒸して来て明け放された八畳の間にも俄かに夕嵐が吹き込んで来た。「お父様入ってよろしいでしょうか?」

敷居際に手をついた吟子は
「まあ!! まだお灯りも点けませんで……」

と入るなり急いで行灯に手を触れる。一瞬さっと明るく描き出される部屋内の色彩。うづ高く積まれた書籍の鈍いくすんだ色が、あてやかな吟子と対照して反対色を織りなして

居る。

「何か用か?」

ぶっきら棒に訊く父の言葉に、吟子は玄白に寄りそうと身をくねらして

「お母様はいないし、何だか変な空模様で心細いのですもの」

と甘えかかるのであつた。

地味な紫鹿の子の結綿にお召縮緬の縞の単衣がよく似合う美しい娘である。くっきりした目鼻立ちに面長の色白顔であるが、その面に漂う憂色の何と淋しい感じであろう。二十歳と云う縁遠い年の故ばかりでも無さそう

だ。

「今行く」
と答えたのみで、玄白はじつと俯向いてしまった。

吟子の淋しい顔を見る毎に二年前の冷酷だった己れの所業がまざまざと思い出されて彼の胸を抉るのであつた。稲光りも次第に数を加え、雷鳴さえも響いてくる夕立前の一時であつた。

祭の宵

もうかれこれ二年にもなろう。其の頃、玄白は、小沢睦二郎と云う子飼いの弟子を愛顧

して殊に目をかけて居た。実際、睦二郎は素直な心の持主で、勉学振りも他の三人の弟子より熱心だし、勿論頭脳も優秀だった。

睦二郎は玄白が未だ中年の頃、厳しい冬の或る一日、彼の門前に行倒れて居た浪人者の子らしい十才僅りの童を哀れと思い、其の儘邸内に留め置いたのだが、睦二郎は年と共に其の才能を現わし、遂には玄白最愛の愛弟子になつてしまつたのだ。何となく其素性をしのばれる、氣品に富んだ優雅な美しい顔立ちであつた。

師の玄白は心秘かに将来への望みを懸けて、彼さえ良ければと迄信頼して居たのである。それが或る日。玄白不在の夏祭の宵であつた。

「もし睦二郎様、あの、吟子です。」

細目に明けたすすけ障子の隙間よりそっと瞳を覗かせたのは、玄白の秘蔵娘吟子の優姿であつた。が何とも返事がない。その筈、一人仄暗い行灯の灯の下、蘭書に魂奪われて居る睦二郎には、夢の国の声だったのである。

吟子はさっと眉を寄せると又思い切つた様に語氣を強めた。

「ハイ。御用で御座りますか?」

今度は氣附いたらしい。優しい白晝の顔が

声と共にさつと振向く。吟子は振向いた睦二郎の美しい顔に吸い寄せられたか、滑る様に部屋に身体を入れると、驚く睦二郎を尻目にそつとその傍へ寄りそつた。

「いけません。先生に見付かったら、私が叱られます。お願いですから出て……下さいませんか？」

頬を紅潮させて必死の弁明である。が、吟子は無言戦術。有り余る思いをじつとその双眸にこめて、恨を含んだ眼差しも艶しく睦二郎の面に秋波を送ると、さすが羞恥を感じてか、ぼつと頸迄紅葉を散らす。

何の事はない。幼なじみの恋の手習である。暫くは夢の雰囲気に包まれて唯灯影だけが知った振りに瞬いている。

睦二郎も根負けしてか、困惑した表情で読み差しの本もその儘、膝に両手を置くと俯向いてしまった。取って二十三才の若々しい体内には青春の血が燃えたぎっている。狭い三畳に膝つき合せて居ては、木石と云えども自制の心は容易ではなからう。

祭ばやしが遠く近く郷愁を誘う様に聞えてくる。

「睦二郎様。吟子は突然入って来たりして……悪い事をいたしました。」

と謝まる吟子の声に、今度は睦二郎が無言の行である。何時までも埒があかぬと思つたか吟子は大胆にも突然白魚の様な手をつと伸ばすと端座している睦二郎の膝の上へ重ねた。睦二郎恋しさに情炎のとりこと化した乙女の振舞である。其の頃の町家育ちには似合わぬ人もなげな態度であつたが、やはり十八と云う年がさせる艶いた仕業であらう。

「あ……」と驚いて顔を挙げる睦二郎の双眼に絡みつく露の眸。無量の恨みを含めた幽艶な眼差しに逢うと、彼は言葉もなく沈黙した。

かくも近くに脂粉の香をかがされては強固な自制心も失われてか、触れなば落ちんその風情に睦二郎の心には激しい息ぶきが荒れ狂い、その眼は俄かに輝きを帯びて来た。喰い入る様に吟子の顔を見詰める白晳の面に、やる瀬なげな愁色がちよつと浮ぶ。……いつの間にか双方の手はしつかり握り合わされて、夢の園に遊ぶ二人であつた。

突如……逢瀬は激しい罵声で醒まされた。ほんに束の間の春夢であつた。

「何事だ!! 睦二郎其の様は!! 見下げ果てた奴。僕は……僕は飼犬に手を噛まれた様なものじゃ」

敷居を一步跨いだ儘、激しい怒気を含んだ眼差しで睨みつけ、わなわなふるえる玄白。

末は……と思ひながらも現実にくうした逢瀬を見せられると、我慢出来ない頑固な気性であつた。一粒種の秘蔵娘を奪われたという空虚な悩みは、たとえ形だけにはせよ、許し難いと思つた。

「出て行け。破門じゃ」と云い捨て、戦っている吟子を引ずるように連れ出し、頭低くうなだれている睦二郎には、もう見向きもしなかつた。

老の一徹と云うには、余りにもつれない態度である。

翌日の夕刻、折からの夕風に送られて、裏門から悄然と出て行く睦二郎の姿があつた。一包の荷物を横だきに白緋に袴をつけた其の姿は、何となくうらぶれて、見送る者として唯の一人も無かつた。一度閉された師の心は如何に詫びても二度と解けず、悲しい結末に終つた。うつ向いて歩を運ぶ彼の双眼にきらりと一滴露の玉が光る。

腑分開始

月日の経つのは露の間である。

玄白はあの夜以来すっかり淋しい娘に成つ

てしまった吟子の素振りを見るにつけ、祭の夜のことは彼の大失策として後悔するのであつた。

それに此の頃いつ洩れたか彼の罪人死体解剖は痛く世人の反感を買い、非難はこうとうと沸き返って居た。

無智蒙昧な大衆には恐らく立白が羅刹の様に見えた事であらう。折々邸めがけて石の礫が降るのもその結果であつた。

「負けるものか。僕は日本の医学の開発の為、どうしても遂行するのだ。その為には腑分もやむを得ぬ」立白は世の中から指弾されればされる程、愈その決心を固くした。

寝苦しい夏の夜も最前の驟雨で、すっかり涼しくなつてか寝静まつた江戸の町々は物音一つ聞えない。もはや亥の刻もとくと過ぎた事であらう。が立白の書齋にはまだ明



武
重

々と火が点って居た。これらが彼の戦場である。

蘭書に眼を離さぬその耳へ忍びやかな廊下の足音が近づいてくると、

「先生!! 万事整いました。お越し下さい」

弟子、原東吾の声である。

「よし分つた。すぐ行くぞ」愈待望の生腑分だ。立白の心は躍る。弟子を帰すと立白は騒ぐ心を押鎮めて庭先におり立った。

清々しい夜空は満天の星で飾られ、ひんやりした夜気が快く感じられる。三日僅りの細い月が中天にふはりと懸つて、穏かな深夜の風景であつた。

腑分部屋と決められている離れの八畳へつくと素早く内から開けられるくぐり戸、ぱつと一条の光茫が庭先へ流れ出す、と思うと再び閉まって元の静寂に還る。一目で見渡

せる部屋の中は、四方に銀燭が灯されて眩しい迄に明るかった。

畳の中央には大きな白木の板が据えられ、既に目隠し猿轡をされて四肢を縛しめられた今宵の生胴が、じっと仰向けにされていた。観念してかぴくりとも動かぬ。獄屋から連れてこられた其の儘の姿である。

立白は一瞬、ぎくりと良心の呵責を覚えたが、三人の弟子の手前務めて平静を装い、弟子の差出す細紐で襷十字にきりりと綾をなして横に坐った。

いよいよこれからである。左の介添えの弟子が、素早くよれよれの浴衣の前をはだけて左右に捲くる。「おや!!」と思う程若々しい白い肌だった。

立白は之を切り裂くのかと思うと、瞬間恐しい様な気もしたが、気を持直して外科道具の小刀を手を取った。さつと緊張する四人の態度。真剣な弟子達の眼差し。

疑 惑

痛みに堪えられず、神妙にして居た生胴が沈黙を破つてのたうち始める。必死に押える弟子の手を振りはらう様に、ぐっと身を浮か

して左右に揺する。瘦せた頸が激しく振られて、乱れ髪が海草の様にまつわる物凄さ。突如ぱらりと猿轡が取れた。が罪人は唯「ウーム」と一声苦し気に呻いたきりであった。慌てて仕直そうとする弟子共と立白は、はっとした。見た様なと感じたからである。男にしては優しすぎる様な鼻。口許。が、彼は再び心を静めると、解けた猿轡もその儘に、小刀は更に胸元へと裂き始めた。脂肪が集ってか薄皮をそぐ様に手際よくは裂けない。無気味な感覚が右手を伝わって頭の芯迄感じられる。弟子は生胴と同じ様に顔色を変えて腰と頭を押えつけている、赤い筋が太く一本鮮かに描かれると、忽ち真白い胸はさつと柘榴の様に弾じき割れて、真紅の血潮が奔流の様に溢れ出る。

立白はやがてその手を胸の下部で止めると血塗みれの左手を其の儘ぐいと斬り口から奥へ突込み何やら探っている様子。

罪人はたまらなくなったか、今迄辛抱強く唯呻いて居た口を、荒い息遣いに代えて喘いで居たが、突然身体全体を小刻みにふるわせた。土気色に変じた額にべっとりと脂汗が浮び、眩しい燭火に照らされた白い胸元に真紅の花が咲く。

凄惨此の上もない地獄絵図であった。が立白は何の感情も湧かぬのか、無表情の儘何か擲んでぐいとむしり取った。

臓腑をちぎられた痛みにさすがの罪人も「ウワー」と絶叫しながら身をくねる。立白の左手に握られた毒々しい血塊が灯影に反射して鈍い光を放つ。学究の鬼と化して、それを見究めるに忘我の境地の立白の耳に、其の時微かではあるが「先生!!」と呼ぶ弱々しい声が聞えた。

確かに生胴の口から洩れたのである。立白ははっと我に返ると、忙しく弟子に「目隠しを取れ!」と命じた。そしてその結果を恐れる様にじっと罪人を凝視した。

生 腑 分 完 了

「おお!! お前だったのか!」ぐっと息を呑む師、立白の悲痛な顔。みるみる血の気が引いて行くのがありありと分る。棒立ちになったまま声も無い弟子三人。

「睦二郎殿か?.....」

眼には見る見る露があふれ出す。それは確かに二年前に破門された筈の睦二郎の無惨な有様であった。がどうしてこれへ.....深い深い謎である。

睦二郎は以前より稍々面瘦れして、其の美しい顔には、人生の苦悩を経験した深い憂色が現れて居たが、その中にも恩師に殉じる尊い犠牲者の喜びが満ち溢れて居た。

「玄白先生!! お許し下さい。最後迄頑張るつもりでしたが意気地ない為、痛みに負けつい……お邪魔をしてしまいました。……」

苦痛を忍びつつ、きれぎれに詫げる睦二郎であった。

「私は……大恩受けた先生への御恩返しにの万分の一にも思つて、わざと生胴に願ひ出ました。……これより他に、此の睦二郎の辿る道は御座いませんでした。」

「そうか!! そうだったのか!!」

血を吐く様な言葉に、さすがの玄白もうなだれて、今更の如く己れの因業深い手をじつと見詰めるのであった。と、睦二郎は、次第に弱まる己が命の灯に氣附いたか、俄かに叫んだ。

「お続け下さい。折角の御研究、私の為に挫折されては申し訳ありません。少しでもお役に立てば本望に存じます」

健気な睦二郎の言葉であつたが、玄白は二度と続行する氣は起らなかった。

二年前の非行を悔いている彼にとって、ど

うして此の愛弟子の身体を、これ以上己が手で切り刻めよう。玄白には最前の勇氣は疾うに失せて居た。

「杉田先生!! 私情に駆られている場合には御座いません。それでも先生は科学者と云われますか? 恥かしくは御座いませぬか?」

語氣を荒げて師を叱咤する様な、鞭撻の聲だった。どこから此の聲が出ると思われる氣息奄々たる睦二郎であつたが、白晳の面はほんのりと桜色に紅潮し、激情の爲出血は愈其の量を増した。

玄白は夢から醒めた様に、つと首を挙げた。

「私情云々」の言葉に、はじめて科学者としての意識を取戻したのだろう。きつと緊張の色を見せると、再び小刀を取上げてまだ呆然としている弟子達へ声を掛けて身構えた。

「睦二郎!! よく云つてくれた。お前の命は儼が貰う。苦しいが我慢してくれ……」

血を吐くような思いだった。学究の作業は再開された。たくましい手捌きであつた。瞬く間に白い腹部は一直線に赤い筋が走った。

今度は睦二郎も齒を喰ひ縛った儘時々呻くのみで一言も叫ばなかった。蠟人形の様に透き通った顔色だった。無表情に見える玄白の双眸にうつすらと露の玉が宿る。

と、夥しい出血に遂に、其の命脈も尽きるのか、睦二郎は、今迄瞑目していた両眼を細く明けると、

「先生お別れです。……吟子様によろしく……」と蚊細い声で別辭を述べ終るとその息の根はすつと止まった。臨終である。かすかな微笑を浮べた様に美しい死顔だった。四人は思わず合掌した。

其の時である。

めぐり逢い

錠のおりた入口の戸を激しくたたく音。

「お父様!! 吟子です」

「駄目だ。入ってはいけないぞ」

「お開け下さい。何やら、とても胸騒ぎがしてなりません……」

狂氣した様な乱暴さである。玄白は慌てた。この場の凄惨な状景を一目でも覗かせたら、結果が恐いと思うから、勢い制止の語氣も荒くなる。

と、突如、どうした弾みか、錠があいたのである。

途端にさつと剛張る玄白の表情、止め様としたが間に合わなかった。ばたばたと裾を乱してかけ込んで来た吟子、弟子の手を振り払

う様にして生胴を、恐いもの見たさで見詰め
たが、それが慕う人の変り果てた姿と悟った
瞬間ぶるぶると身ぶるいしたと思うと、その
場へへたへたと崩れ落ちてしまった。

隙間洩る夜風にあふられて、燭台の焰がは
たはたとほためくとふっと一灯消えた。

「む、睦二郎様……」

絶叫していざり寄ると、血塗みれの屍に取
組んだ儘、泣き泣きかき口説く哀れな姿。

「おそかった、おそかった」

と咄く声もよくは聞き取れない。泣いて泣
いて泣くより他に術の無い今の彼女であっ
た。

あの祭の翌日、悲しい破門を受けた睦二郎
は寄辺ない身を、いろいろ伝手を求めて呉服
の行商人と成って糊口を凌いで居たが、其の
間にも度々吟子の手を通して破門の許しを願
って居たが、吟子は未だ解けぬ父の心を恐れ
て云い出しかねて居たのだ。

が、運命は飽くまで彼に不遇であった。ふ
とした事件から正直者の睦二郎が殺人と云う
恐しい嫌疑をかけられ、濡衣の儘、牢に繋が
れたのである。

睦二郎は煩悶した。永久に許しを受けられ
ぬと悟ると、俄かにはかない前途に無情を感

じ、死罪の宣告を受けたのを幸いに、どうせ
死ぬからにはと、師、立白の生胴に応じるよ
う願ひ出たのであった。いさぎよい彼の心で
あった。

狂乱模様

愛しい睦二郎の世にも無惨な死様に逆上し
たか、今迄唯ひたむきに泣きむせんでいた吟
子が、突然ぱっと頭を挙げると

「オホホホ……」

と甲高い空ろな声で笑い出したのである。

「アッ!!」

と色めく弟子達より、更にぎよつとしたの
は立白であった。

「あの気丈な吟子に限って……」

と自負して居ただけに一層慌てた。がその
心の下から「無理もない。……」と娘いじら
しさの気持が沸々と起ってくるのを、どう仕
様もなかった。その眼に屍を抱いて戸口の方
へ歩いて行く吟子の狂った姿が映った。血塗
みれ死体とそれを抱く狂女。すべてが朱一色
に彩られて、それは美貌のうら若い男女故に
一層凄じい地獄図絵であった。

立白は手足をわなわなふるわせて落ちくぼ
んだ眼を見張ったまま、此の狂態を見守って

居たが

「先生!!お嬢様が!!」

と立騒ぐ門人の声にも

「捨て置いてくれ……。儂が悪かったのじや。
むくいちゃ」

と絶望的に云い切ると、これ以上見るのを
恐れるかの様に、つと横を向いてしまった。

その顔には未だかつて見られなかった恐しい
苦悶の色が深い皺となって刻まれて居た。

一つ消え、二つ消え、部屋内の灯火ももう
あと一灯きりとなった。それは丁度消えゆく
若い魂を象徴する様であった。

その残りの一灯が尽きる頃、離れの一室に
吟子の呻きが起った。睦二郎の屍を前に、同
じように腹部を断ち割った狂女の嬉しげな最
期の呻き声である。

以上

附記

これは全然の創作ですけれど、腑分と云う
言葉は今日の解剖と云う意味で、杉田立白
が死体を解剖したのは事実らしいです。
未熟な文でさぞお読み苦しかったと思いま
す、お許し下さい。(筆者)

或る妻の記

——和装なるが故に——

牧

高

志

文・画

私の育った処が、下町だったためでしょうが、また花街に近いせいもあったかも知れませんが、小さい時から、ずっと着物を着せられ、遠足や運動会の時は別として、学芸会の折は羨ましがられるのをいいことにして長い袂を翻えして舞台上に立ったものでした。

ですが、別段着物に愛着があった訳ではありません。腕捲くりをして二の腕まで出し、お尻をからげて潮干狩に行ったのはいいのですが、蛤取りをそっちのけにして流行のダンスをしたと云って母に叱られた時は、つくづく裾や帯は嫌だなあと思ったからです。もっとも、その頃モンペと云うものがあって、女は制服のように着せられたものでしたが、怖ろしい戦争が済むと、焼け残った私の家の界限はまるで押し寄せた大津波のように復古調



となり、昔と少しも変わらぬ日本趣味があちこちに漲って、華かな着物姿も至るところで見られるようになりました。

場所柄、少女から乙女ともなると、定まったように宿命的な嫁入り婿取りの話も身近かに降って湧くようになりましたが、遊ぶ方が忙しくて、そんなことはまたその内に——なにと呑気な御転婆娘でしたものの、その身勝手な呑気も長くは許されず、四五町離れた或る染物問屋のあと取りの嫁にと話が急にまとまって、確か歳の瀬も迫る暮れの吉日でしたか、派手な御披露をして式を挙げてしまいました。

只今のような自由意志による結婚と違ってほんの少しばかり封建性が残っていた頃でしたから、老舗の若奥様と呼ばれると気儘に飛び歩いた娘の頃が懐しくて、よっぽど実家へ帰ろうかと思ったこともありました。

もともと主人とは、まるで知らない仲ではありません。小学校時代の腕白小僧で、お三味線の稽古帰りに一、二度つかまっては泣かされた、いわば幼な友達の間柄なのです。ですから、云おうと思えば或る程度のことは云い通せますし、また我儘もきくんですけれど、何んと申しましょうか、^{おつと}「夫の座」が余りに強

くて、妻となった日から、自然にガッチリと目に見えぬ糸で縛られたような振舞いになって行ったことは事実で御座います。

こうした夫婦生活の中で、季節によってはよろしいんですが、特別でない限り一年中和服で通すことを強いられたのは大変窮屈で、気軽にワンピースで用を足す御近所の奥さんをどれ位羨しく思ったことか……そんなことから時折、妻への自由を認めよなどと申出ではこっぴどく窮命された夜もありました。この着物の生活はお店とのつながりで商売柄應對の手前もあり、あなたがち封建的とは申せないかも知れませんが洋装の必要性を無視する夫の性癖からでもないようでした。

ただ常日頃、真面目一方の夫が何かのほずみで気が狂ったようになり、着物を着た私の姿に小うるさくつきまとわることには、ほとほと手を焼いてしまいました。この性格は私達と一緒にになってから今日まで続いております。

或る時、と申しても、まだ子供のない夫婦ですから新婚の部類に入るかも知れませんが嫁入って初の正月、持って行った娘時代の着物が無性に着たくて、夫を説き伏せ思い切りヤンチャな振舞をしたことが御座いました。

紫地に緑の葉も鮮かな赤クローバーをあしらったお振袖に紅白市松の帯を結んで、羽左の押絵の羽子板も軽く、狭い庭一杯飛んだり、はねたりして羽根を突き、つり込まれて相手となる夫の顔に墨を塗っては大笑いしたのですが、その折、

「そう奥さんが、はねちゃあ、いかんじゃなにか……」

と云われて、有り合せの紐で後手に縛られ「その手でついて御覧」

には困ってしまい、柄にもなく泣きべそをかいて夫の前で降参を宣言、挙句の果て、その日、一日中は着物替えをした後でもずっと両手を縛られていました。考えただけでも邪気めいた仕草だと、その時は思ったものでした。（い図を御参考に——）

勿論人の子です故、縛る縛らぬは別に気にも留めておりませんし、妻が愛情の余り夫の手で後手に縛られてお芝居のように折檻を受けようと、かまわないことなんでしょうけれど、私の場合、夫の商売の物議りが災いしてその都度、いちいち衣裳に云いがかりをつけられ、着物を着た女を対象としての愛情の発露は嬉しいような怖いようなものでした。

今時、和服の下に召される下着にしまして

も昔ながらの方は恐らくおられないと思いますが、それもお許しがなく、いつ何時のお調らべ（ついこんな言葉になってしまいました）が……が……があってもいいように、いつもきちんとお腰をして、長襦袢、それにお太鼓の帯の姿でなければならぬのです。

いつかも、近くのお店でパンティを買ったのが見つかり、小半日責められて取上げられたことが御座いました。もっとも暫く経った後で

『俺が女のパンティやブラジャーをしたらどうなるか……』

などと冗談まじりに御自身で、いつ買われたものか真白な乳バンドに肌色レース入りのパンティをはいたところを私に見せて、二人で大笑いしたことなどあるにはありましたけれど、これはこれなりにまた、何か訳があったのでしよう。

妻とはどうあるべきか、ということは充分わきまえておるつもりですが、前にもお話し申上げましたように、何かのはずみで妻が娼妓化し、お店の宴会に酌婦となったり、唄こそ歌いませんが狩り出されて余興の踊りまでさせられる折は、夫の眼が他人さまのよう思えて悲しく、女奴隷の気持をしみじみ味わう



ろ図

ことがたびたび御座います。

こんなことを題材に書いて頂けば、まとまった小説本になるかも知れませんが、このうち、今想い出しても恥かしかったことを一つ二つ申上げてみましょう。

私の婚家では、新春のお正月にはお年始参

りを兼ねて、近くのお稲荷さまに詣るのが毎年の慣わしになっておりました。その時は確か、結婚二度目のお正月だったと覚えております。

いつになっても正月は心はずむものと思えて、みそかのお勘定やら一通りの飾り付を

済ましての晴着の取揃えは、女性ならではの
気持で一杯、

『おいッ伊勢屋さんからの注文品は届けたの
かい?』

などの店先の夫の声を空耳に、お草履はど
れにしようか、重ね着はどの柄に、などと繰
りひろげるタンスの前は、妻の座を離れて私
の一番楽しいひとときなのでした。

ただ夫の考えから、商売繁昌のお稲荷さま
参詣はまだ人通りの疎らな暁方が当り前のよ
うになっていましたので、揃って歩く姿は見
方によっては湯島天神境内のお蔭のような気
分で満更悪いものでもなく、何か二人きりに
なつたと云う嬉しさで、影のように寄り添う
て行ったものです。

黒ずんだ赤い鳥井をくぐると焼け残った樹
が何本か茂っていて、普断でもひんやりする
薄暗らさに加えたお正月の風。幾らか凍てつ
いた石畳の道が白く光って、身をひき縮める
ような冷めたさ。思わずコートにショールの
島田髷を引込めなどしながら漱ぎ場に参った
のでしたが、突然夫は私の顔を覗き見ながら
『女は従順でなければいけないね』

と半分脱ぎかけたコートの袖を握って、眼
で会図を致しました。両の手を後ろに廻わせ

と云う意味なのでしょう。幸いすぐそばの茶
店の婆さんもまだ起きてはいませんし、昨今
の一流どこの神社仏閣寺と違って夜っぴいて
の参詣客も見当りませんので、ショールとコ
ートを柱に懸け、家の中での遊戯を街頭で演
ずる恥ずかしさを無理に押えて、いわれるま
まに夫の前で後ろ向きになると、真新しい麻
の紐で、形ばかりでしょうが一越縮緬の訪問
着の上から、しほるように手首を合せて縛ら
れてしまいました。縛られた女性には親切だ
よと云う夫は、本当にまめまめしく小柄杓の
水を汲んで私に差し出しましたが、こんな恰
好を真昼間にやるとしたら、定めし物好きな
カメラマンの的になったことでしょう。

その時の模様は、御好意で描いて頂いた絵
(ろ図)を御覧なつて下さいまし。余談です
が、この着物と帯は夫の見立てで求めました
もので御座います。

さて拝殿での何やらのお祈り、恵方へ向つ
ての家運隆昌祈願は、縄付きの儘で夫と一緒
に致しましたが、余っ程一年間の我儘が夫の
お気に召さぬものと見えて、お詣りが済んで
も後手の紐はとんと解いても頂けずに、上か
らコートを冠せられ、ショールを首に巻いて
家に連れ帰えされました。

町内のどなたにもお逢いしなかったことが
せめてもの気休めと思っております。

普通のかたよりも遅れて心配しておりますし
た私がようやく妊娠の徴候を得たのはそれか
ら一年程も後のことでしたが、妊婦としての
心構えが悪かったためでしょう。階段から
落ちたことが因で五カ月目に流産してしま
いました。

この時ばかりは、何んとお詫びしてよいや
らと、私はほんとに申し訳なく思いました。
日頃の暴君に似ず、夫は惜しい、惜しいと口
癖のように云つては沈んでおりましたが、目
出度く出産でもしておれば、初のお礼詣りも
出来たのにと、よそ様の赤ちゃんを羨しく見
送つたものでした。

めざしの頭も信心からのたとえにひかれた
訳でもないんでしようが、十一月も間近かに
なつた或る日、突然夫の口から

『今一度と云うこともあるから、お稲荷さん
にお願いしておこうか……』

と云い出され、吉日を見計らつて深夜お詣
りすることになりました。深夜と申しまして
も、これも暁け方近い頃だったと思います。
教わつた通り、大急ぎで外出着に改め、髪は
かつらの文金高島田、ピンク地に鹿の子散ら

しの縮緬の長襦袢に白羽二重のお振袖、緞子の白地に刺繍物の帯を結んで家を出ましたが

まるで狐の嫁入りだったよと今でも夫に笑われる始末。は、こ、せ、こ、こ、そ、忘、れ、ま、し、た、が、一、切、そ、



は四

ろっておれば、そう想われるかも知れません。ただ初めのうち奇異に思いましたのは、道不案内でもないのに夫が杖を持っていたことで御座います。何分月のない夜明け方のことと後手に縛られたのもぼんやりしたままにお賽銭箱の前に連れて行かれ、草履を脱いで石畳の上へ座らされました。夫の黒い影がうずくまって、白羽二重の裾が揺られ、鹿の子の長襦袢のままべたと正坐すると、例の杖の先きで肩から背へ、それから腰のあたりと軽るくたたかれ、今度は前に廻って胸や帯、膝頭の処を突いたりされました。

その間、夫は何やら口の中でお呪いの言葉をつぶやいていたようです。結局、私の身体から悪魔退散を祈禱するためにこのようなことを行ったことになりましたが、縛られた女から退散する悪魔はさぞかし顔を赫らめて出て行ったことでしょう。石畳の上をずったため、はだけた裾からお裾除、お腰を台無しにしたのもこの時のことでした。

こんなお恥しいお祈りをした後、霊頭あらたかにお恵みがあつたものと見えて翌年の秋待望の赤ちゃんを儲けることが出来ましたが只今では子煩悩であけくれする夫の手に麻紐の無いのが寂しく、身悶えする女の心、妻の願望をお笑い下さってこの恥ずかしかった頃のお話を一まず終らせて頂きます。

長篇連載MS小説

宇宙のどこかで

—或る無期懲役囚の告白から—

佐 治 麻 造

—或る新米奴隸の身の上話し(1)—

三、四日みっちり絞上げられて、奴隸の分際を骨身に叩き込まれた五名の奴隸男女は、談合入札して落札した指定奴隸商に曳かれ、号泣し乍ら管理所の門を出て、変り果てた浅間しい身を人間社会の風に吹き晒されつつ鉄鎖の音も哀れに去って行きました。同じ檻に繋がれて幾晩かを過した彼等の中で、三十過ぎの若い男の身の上は一きわ哀れなものでした。いつか債務犯監房区画で、肥えた紳士に哀訴嘆願して居た男です。

—あいつらめ。俺が自由の身になったら、きつときつと復讐してやるんだ—

彼は齒ぎしりして無念の形相で云ったことでした。元マダムの女奴隸に代って、私の隣りに繋がれた三晩目のことです。

—考えてみると胸が張り裂ける様だよ—

彼はこんな境遇に落ちる以前は、かなり名の知られた老舗の一人息子として何不自由なく育てられ、相次いで亡くなった両親の跡を継いで、二十才半ばにして老舗の店主となったのでした。親戚の娘を妻に貰って、少し神経質で線が細いと云う人もありましたが、ともかく豊かな生活を愉しんで居ました。

ところが、彼の妻の父を主とした肚黒い親戚の数名の者が、彼の若いのにつけ込んで店の乗取りを策謀しはじめたのです。娘を彼に嫁がせたのも計画の一端で、店の幹部も抱き込んだ一味は、彼の妻

となった女と内外呼応して、結婚後一年余りで彼を狂人に仕立ててしまったのでした。医師も勿論買収され、彼は土蔵にたたき込まれて監禁されてしまいました。肚黒い義父は後見人として直ちに乘込み、店と資産を自由に始めたのでした。

彼の首と両足首に太い鉄環が嵌められ、それぞれに象を繋ぐ様な太い鎖が一本宛ついて、三本の鎖で床に繋がれた彼は土蔵の中心から二米程の半径内に拘束されました。重い鉄扉を閉めれば土蔵内は殆んど真暗で、怒り悶える彼の怒号は土の壁に空しく響き渡るだけでした。

他人が近付くのを恐れた一味は、彼の食事の世話等を彼の妻にさせました。虫も殺さぬ顔をした此の悪女は、さぞかし貞淑な愛情深い妻として世間に評判された事でしたでしょう。

日に二度の食事を運んでくる彼の妻は、鉄鎖を鳴らし引張って、喚き、怒鳴り、そして訴える彼の哀れな姿を冷然と黙って眺めつつ、縄のついた食器を遠くから押しやり、便器の曳き縄をたぐり寄せて新しいのと交換するだけです。

「早くお喰べよ。箸なんかある訳がないやないの。手で喰べるのや。五分経ったら取り上げるで。ホホホホ」

買収された医者は、一日おきに土蔵にやって来て、訴える彼をただ眺めるだけなのです。

二、三日して、漸く自分の立場を腹の底から悟った彼は、信じ切って居た妻や店の者に裏切られた怒りに土蔵も崩れよとばかりに怒号し、身悶えし、のたうち回るのでした。

「さ、おひる御飯やで。氣狂いには勿体ない位の御馳走や。大分おとなしうなったなあ。」

店員達の手前をつくろう意味で、与えられる食事は、いつもかなり立派なものでした。

「はよう、ようなつてや。と云うても氣の違うてるおまえには分らへんのやなあ。ホホホ」

鉄枷に摺れた痛みに呻き乍ら、先程から床にうずくまって喘いで居た彼は、からかわれた怒りに逆上し矢庭に食器を彼女に投げつけました。続いて便器も投げつけます。

夢中で躍りかかろうとした彼は、非情な鉄鎖に引き留められて床に打ち伏し、男泣きに哭いて無意味な喚きを挙げ乍ら、鉄鎖を叩き、床を打って齒がみしました。直ちに義父を始め一味の者が駆けつけて来ます。

「やっぱり手も括つとかなあかな。」

床に押え付けられた彼は、両手をねじ上げられて後手錠を嵌められてしまいました。嘗ての使用人達に、囚人や奴隸と同様の扱いをされた彼は無念の余り声も出ませんでした。

「旦那様、くつわ、何か嵌めとかなでも、よろしゅうおまつしやるか？」

「ハハハ、それはいらんわ。喚きよったら自分で自分の氣狂いを宣告しとる様な訳やし、舌でも噛んで自殺しよったら厄介払いや。手数掛らんでええがな。」

振舞酒で、昼間から赤黒い顔を余計赤くした医者が、口を挟みました。

「食物も減らした方がいいですな。今度暴れたら窄衣かけてやりなさいよ。」

「ハハハ、まあ出来るだけ手荒な事はしたくないのやけど。こら、

もう諦めておとなしゆうせなあかんで。」

「ち、ちくしょう!! くそっ、此の盗人奴……」

齒ざりして身を悶える彼の顔に、若い店員の唾が吐きかけられました。

「此の氣違い野郎。旦那様に向って何をぬかす。」

「アハハハ、ま、氣が狂うてるんやから何を云い出すか分らんわいな。な、そうやる。さ、行こ行こ。」

足蹴にされて冷たい石の床に倒れて、後手の身をもがく彼を残して彼等は笑い乍ら立去ります。

「……近頃は大概の精神病はすぐ癒りますからね、患者が減る一方で保健局の連中は手が余り氣味なんです。此奴を、現在では治療困難な真性ヒモサイコ……」

「そんな難かしい事はええがな。つまりやな、此奴を、その……何とか云う舌噛みそうな病氣や、と云うことにしとくのが、難しいと云うのやろ。」

「まあそうですよ。しかし保健局の検診は、不意打ちさえ喰わなかったら、注射して誤魔化します。ちょっと若い連中じゃ見分けはつかんですな。だから不意打されんように……」

「分った分った。鼻薬は十分利かせてある。暫く様子見て、何とか始末しようと思うてんねん。おい、みんな。今夜は一つ一利喜へでも行こうやないか。」

重い鉄扉がガチャンと施錠されました。

自宅で拘禁されて居る精神病患者は、通常毎月一回、保健局が視察して不当な虐待をされて居ないかを調査します。

それを知って居る彼は、其の機会を掴み度いと思って、訴えるべ

き言葉を考え抜いてそのチャンスを待ち構えるのでしたが、いつも悪徳医師の注射一本によって、数時間の間は精神病の症状を呈して錯乱し、正氣に返った時には既に調査は済んだ後なのでした。見舞客等にやむを得ず見せる場合にも、その処置が取られたのは云う迄もなく、二カ月余りも経った頃には、彼は絶望の余り自殺し度いと考える様になりました。

しかし、それを思い止まらせ、又怒りと無念さの余り本当に狂いそうになる心を支えたのは燃え上る復讐心でした。少しでも反抗の氣配を表わしますと、容赦なく窄衣をかけられて脂汗を絞られます。鞭も時々は当てられますが、鞭痕をおそれ直ちに治療促進剤がタップリ塗られました。最もよくやられたのは擦ぐり責めて、厚い木の枷に両足を挟まれて押えつけられ、羽毛で足裏を擦ぐられるのです。妻が、いや妻であった女が一番しつこくて、彼が泡を吹いて失神する迄面白がって強く弱く擦ぐるのでした。もはや後手錠は嵌められっぱなしでしたが、日に一度は食事の後で、男の店員と一緒に女が来て暫くの間は外して呉れました。

「大分おとなしくなったやないの。もう、かれこれ三カ月になるかしら。」

其の頃は、もう大分粗末になった食事を犬の様にして食べる彼の頭上で、彼女は笑いました。男の店員が鞭を持ってやって来たのを確めた彼女は

「もう済んだ? さ、後向きになってみ。手錠外したるよって。」

外された手錠の痕を撫でさすって彼は唇を噛みました。

「昨日は何や忙しゆうて、とうとう嵌めっぱなしやったよって、今日はちょっと長いこと外しといたるわな。後手錠つらいか?」

カッとしかけた彼は、傍らの男の手の鞭を見て両手で眼をこすりました。

「頭も大分伸びたやないの。あんた、今日、先生来やはったら注射で眠らして毛を刈ったりいな。面倒臭いけど、しようあらへん。」
鞭を空で鳴らし乍ら男はうなずきました。

「けど、はよ許可取って病院の檻へブチ込まなあかんわ。わておちおち留守にもでけへん」

「そらあ、もうじき取れまっせ。何、かめしまへんがな。一日や二日飲まず食わずで放つといたかつて。留守しやはっても誰ぞにさしなはれな。」

「そやけど、女中は信用でけへんし、飢えさせたら世間がうるさいし、男の人は忙しいよってなあ。な、あんた、ちょっと見てみ。あの手錠の痕、物凄いやないの。余っぽどまがくのやなあ。なんぼもがいたって無



駄やのに。」

「首環のところには、もっとひどうついてます。」

「外して見よか？」

「やめなはれ。さ、はよ始末して行きまひよ。」

「ええ。あんた、もう此奴に云うといたるわな。ちょっと、わてな、お前を病院の檻にブチ込んだいて、暫くしたら此の人と結婚するねん。未だ誰にも内証やけど、教えといたるわな。さ、手え後へ回しいな。」

こんな女に今更未練はありませんでしたが、屈辱に呻いた彼は、後手に回しかけた両腕をブルブル震わせて齒ざしりました。

「もっと手を伸ばさんかいな。何してんねん。此のド氣違い!! 嵌め難い云うてはるやないかいな。」

正座した太腿に遂に鞭が鳴り、悲鳴を洩らした彼は、両手首にガチャ／＼と嵌められる手錠の音にオイ／＼泣き出したのでした。

何としてでもこの無法な扱いから脱け出して、人非人達に復讐してやらねばと、彼は日夜呻吟しつつ、考え抜きました。先ず床に体を繋ぐ鉄鎖から逃れねばなりません。とても叩き切れそうにも思えません、手さえ自由なら何とか萬一と云うこともあります。脱走のことは別としても、昼も夜も嵌められ通しの後手錠の苦しさ辛さに彼は全く耐え兼ねました。

「……お、お赦し下さいまし。おとなしく致しますから。手錠はもう嫌や。堪忍や。」

十分間程の手の自由を味わった彼の頭を、右手に持った手錠の環で小突いて顎をしゃくり、後向いて手を回せと無言で命じる女の足許で、或日彼は正座の両手を合わせて哀願しました。女の手持たれた黒光りする二個の頑丈なU字環の蓋が、彼の両手首を待って開いて居るのを仰ぎ見ますと、みじめな嘆願の言葉が、つい口を突い

て出てしまいました。

「……それに……せめて夜だけなりと、首環を外して下さいまし。もう冷たくて……切なくて。手錠もせめて前で嵌めてくれはったら。此の通り……拜みます。」

「フ、フ、フ、あかんあかん。お前がなんぼ辛うても、わての知ったことやないもん。はよ、回さんかいな。鞭当てたろか？」

「こ、こんなに……お願いしても……」

「当り前やがな。何ちゅう顔してんねん。阿呆やな。氣狂いの癖に未だ諦めへんのか？ 此頃おとなしゅうなったよって、たまには外で運動させたる思うてるのに、そんな事やったらあかんがな。さっさと手え後へ回して、お願いしますと云わんかいな。」

引き摺り倒して八つ裂きにでもしてやり度い衝動を漸く押えた彼の後手に、ガチャリ、ギリギリと鉄環が喰い込み、固く締めつけて嵌められました。

「大分やせたやないの。ほら、こんなにゆるんでるわ。」

彼女は、彼の首環から前に垂れた鎖の付根を握って、首環をゆすぶります。

「ハ、ハ、ハ、大分苦勞をして来はったよってなあ。」

男は小氣味よさそうに笑い、彼は首の擦れる痛さに呻きました。

「はよ、出ようなあ。此頃、急に何や臭うなったやないの。」

首から前に垂れた太い鎖の重さにうなだれて居る彼の眼前で、彼等はこれ見よがしに手を取り合って去って行ったのでした。

— 或る新米奴隸の身の上話(2) —

とうとう土蔵から一度も出ずに約四カ月の後、彼は担架の革紐に

縛りつけられ、注射で眠らされている間に或る私立の精神病院へ運ばれました。

「俺はな、注射で意識を失う前に、俺を見下ろして笑って居た奴等の顔は死んでも忘れないぜ。特にあの憎い女の顔は、今もハッキリ眼に灼きついてらあ。」――

翌晩、彼はコンクリートの床の上で語り続けました。意地の悪い婦人職員に、壁の上方の鉄環に鼻環を吊られて、壁に向って立たされたままの元マダムの女奴隷が、彼の隣りで泣き出しました。

「……誰か、……誰か、この鼻の茄子環を外して！　せめて坐らせて頂戴。お願い。ああ、手さえ自由なら直ぐ外れるのに……」

今日もみっちり脂を絞られて、疲れ果てた女奴隷は身をくねらせ、もだえて助けを哀願しましたが、私達にはどうしてやる事が出来たでしょう。哀れに思いますが、黙殺する外なかったのです。

――こんど気がついて見たら、薄暗い地下室に、ほうり込まれて居たんだよ――

廊下の片側に、十個ばかり並んだ薄暗い室は、病室と云うより監房と云った方がふさわしく、三米に四米位、低い天井にコンクリートの床、壁際に防水布で包まれたゴワゴワのマットがあり、床は隅の便器に向って僅かに傾斜して居ました。

冷いコンクリートの床から身を起した彼は、依然として手足は拘束されて居るのを知りました。両足首に嵌められた鉄枷は三十センチ位の鎖で繋ぎ合わされ、腰の周りには鉄鎖が捲きついて居ます。更にその腰の鎖の左右両側についた鎖が左右の腿の付根をそれぞれ周って、腰鎖がずり上がらないよう腰骨の所で固定して居ります。両手首にも勿論鉄環が嵌め込まれ、それを繋ぐ三個の鎖の環の中央

は腰鎖に留められてあります。

鉄枷や、鎖は、すべてボルトナットを使用して結合され、道具がなければ到底外すことは出来ません。手足の鎖錠もさること乍ら、彼がガックリしたのは口を閉ざされて居た事でした。前部の上下の歯に孔をあけられ、歯の前側に当てがわれたプラスチックの器具によって、歯を少し開いた状態でガッシリと固定されビク共動かないのです。そして歯の間から挿入されたプラスチック片で舌をスッポリと押えられ、更に直径一センチ足らずの短い管が、プラスチックの器具の中心を貫通して、歯の内側へ二センチ程、そして唇の外へも二センチばかり飛び出して居ました。切なかった鉄の首環は外されて居ましたが、額に番号を刷られて居る事が後で分りました。極めて兇暴な狂人に施される限度一杯の戒具なのです。彼はよろよろと立上って固いマットに身を投げ出し、涎を垂らし乍ら慄哭し続けました。十個の病室は患者が殆んど居ないらしく、遠くの方で微かに鎖の音が時々聞えました。兇暴な狂人としての彼の悲惨な日々がこうして始まったのです。食事は日に二回、嵌口具の管にゴム管を繋いで流し込まれて与えられ、一日おきに鉄格子の間からホースで激しく注がれる微温場によって、身体と床、マット等を洗われます。そして三、四日毎に引き出されて治療なるものを受けたのでした。

――電撃療法さ。痛いなのなのって。二回目からは、鉄の台に革バンドで縛りつけられる時にゃ、震えが止まらなかつたぜ。口は利けないうし、主な医者連中の他は、俺を本当の狂人だと思ってるやがるのさ。口惜しくって情けなくって。そして医者の奴め、治療とかを面白半分に済ませやがって、脳波曲線で云うのかな、しかめつらしく

見てさ、首なんかもっともらしく振りやがって。顎をしやくると体格のいい看護婦の奴が、二、三人で手足を抱えて引摺って行って檻の中へ抛り込みやがるんだ。一週間位に一回は、外で運動させて呉れたな。――

日が経つにつれ、救助の手が差延べられる見込がない事は彼にもはつきりと判り、彼は絶望に打ちひしがれ、壁に頭を打ちつけて自殺しようとして果たせず、絶食しようとするれば圧力をかけた流動食を管から流し込まれ、舌を噛む事は勿論出来ませんし、毎日々々が煉獄の様な苦しみでした。三カ月程経った或日、晴れて夫婦となつたあの憎い男女が見舞いと称してやって来て、檻の外からさんざんにからかい辱かしめを与えた時には、憤怒の余り彼は血の涙を流して、笛の様な怒号を挙げて床の上をのたうち回りました。

「折角御見舞に来てやったのに、あんなに暴れて。氣違いやから仕様あらへんけど。」

彼等は声を揃えて笑い合ふのでした。

彼がそこに居たのは五年余りの間でしたが、彼にとっては永遠の様な永い永い月日でした。毎月一回、注射によって眠らされて戒具を除かれ、嵌口具や枷の痕を手当され、頭髪を刈られたり致しました。諦らめた彼は終いには注射なしでもおとなしく手当を受け、鎖錠のいましめに手足を差伸べる様になってしまいました。

「先生、もう戒具は赦してやったらいいませんか？ 近頃はとてもおとなしくなつたんですよ。」

ガツチリした体つきの看護婦が医師に云って呉れましたが

「駄目々々。まだまだ発作的に兇暴になる可能性が充分あるから。君、何も可哀想がる事ないんだよ。そんな戒具を使用するのも、つ

まりは患者の為を思えばこそなんだから。」

彼は、看護婦が枷や鎖のボルトナットをボックス・スパナで固く締めつけるのを見乍らポロポロ涙を流しました。一度、看護婦に訴えかけて、窄衣と鞭で痛めつけられたことのある彼は、看護婦が嵌口具を取上げたのを見て、唇を震わせつつ口を開くのでした。

或日、おとなしくして居た褒美の甘味品をチュウチュウ啜り終えたが彼が、ボンヤリ坐って居りますと医師の許へ引出されました。「大分よくなった様だな。兇暴性もなくなったし、稀ではあるが正気を取り戻すこともある様だから、戒具を取ってやる。少しでも暴れると嵌めてしまふぞ。と云つてもお前にやよく分らんだろうがな。ハハハ」

医師は眼を細めてニンマリと冷たく笑いしました。漸く口を利ける様にして貰えたのですが、恐ろしくて余計な訴え等は到底出来ず、ひたすら正気をよそおって地下の檻の中で暮すこと約二カ月の後、彼は突然自由の身になったのでした。引き取りに来た義父が「よかったなあ、よくなつて。」

と、掌を返した様な態度で云うのに腹が立つ余裕もなく、ただ夢の様な心持ちで衣服を替えて車に乗り、店に帰りました。

――あの憎い女は何処へ行ったのか居なんだ。そして、兎も角、若主人が治つて帰つて来たんだから店の一切は返すと云うんで、まだ何が何だか判らないうちにいろんな手続が済んで、奴等は消えてしまいがつたのさ。自分乍らボンヤリさ加減に愛想がつきるよ、今から考えると。しかし、其時は唯もう、人間並に扱って貰える処か若旦那若旦那とおだてられて、嬉しくて嬉しくて。――

結局彼に譲られたのは、左前になつた老舗と、莫大な債務だけで



した。気がついた時は既におそく、彼は一味の陰謀を司直の手で糺明して貰う暇もなく、債鬼に追い立てられて東奔西走しなければならませんでした。尤も訴え出た処で何の証拠もなく、唯世間の嘲笑

を受けるだけで、悪くすると借金逃れの口実と考えられても仕方ない情勢だったのです。酷薄な債鬼の常套手段として、未だ少しは余裕があると彼に思わせておいて、電光石火の仮処分に出ました。或る朝、既に一人の女中すら居ない家で独り朝食を済ませた彼が、金策に出ようとした途端、立閃に執達吏が現われました。血の気を失って喘ぐ彼の口の上に赤い紙がペタリと貼られます。

「さ、一緒においで。おとなしくついて来ないと、これ嵌めて引摺って行くからね。」

執達吏の婦人は、黒いスカートの内側から手錠を少し覗かせて彼に見せ、封印紙の縁にペタリと印を捺してしまいました。

——そして、ここに連れて来られて、こんなざまにされてしまつて、一巻の終りと云う訳さ。娑婆の風に当たったのも一年足らずで、今度は鼻環迄嵌められて鎖をつけられて文句なしや。しかし、あれだけの財産や、店を五年程の間によくあんなに迄出来たもんだと思うよ。大分持つて逃げたに違いないが今更ごまめの歯ざしりたつて仕方ないものなあ。——

彼の債務額は莫大で、奴隷刑期も最高

の三十年を言い渡されて居ました。床に頬を当てて眠って居る彼の涙の痕を見乍ら、自分よりまだ哀れな男もあるものだなあ、と私はつくづく感じ入ったことでございました。

保管奴隷

五名の新米奴隷達が消えて十日程の後、再び四名の男女が奴隷にされて檻に繋がれました。三名の男のうちの一名は八十才を遙かに越して居ると思われる老人で、どこかバックボーンが通っている人柄らしく、与えられる苦痛や屈辱にも、呻き声さえ挙げないで耐え忍んで居るのには全く感心致しました。

「此のおじいさんはどうもね。ただでも御免でさ。」

夕方おそく下見にやって来た奴隷商の男が云いました。

「しかし、こんな老いばは珍らしいですな。」

「君、此の男、知らないのか。ちよっと有名な会社の社長だったんだぜ。」

職員に云われた奴隷商は思い出した様でした。

「……あ、あれですか。へーえ、まあ社長もいいけど、まさかの時には全責任負わなきゃならないんだから考えものですな。しかし、あれだけの会社で、身代りになる奴が一人も居ないなんてねえ。」

老いた奴隷は鼻の鎖をジャラジャラと揺すり乍ら、頬を紅潮させて云いました。

「わ、わしは、自分の責任は自分でとるのだ。他人に代って貰おう等とは思わん、自分の体で償うだ。」

「ずい分御立派なことをおっしゃる。矢張り違ったもんだ。」

「ねえ君。案外いい値で売れるかも知れんぞ。借金全部は肩替り出

来んにしても、此奴の体位いは引き受けようと云う人もあるに相違ないで。」

「ウーン。そうですね。よく考えて見ましょう。」

老いた元社長の奴隷は、私達には口も利かず唇を真一文字に閉じたままでしたが、後手錠で初めて過ぐす夜はこたえた様でした。翌朝、正午迄の正座を命じられた彼は

「こんなことを申して甚だ申訳ないが、少しの間でいい、手錠を外して頂けないだろうか？ お願いじや。駄目なら致し方ないが。」と孫の様な婦人職員に願ひ出しました。

「まあ、何と云う口の利き方をするの？ 自分が何だか分ってるのかい。」

二人の若い婦人職員は口々にきびしく叱りつけはしましたが、流石に鞭を当てたりはしませんでした。

「ね、あなた。若し此のじいさん、だれも買い手がなかったらどうなるの？」

「監獄行きに決まってるじゃないの。八十才を越してるから老齡囚監獄だけどさ。」

結局彼は、奴隷商に払い下げられ、保護的な買手も結構現われて、奴隷商は思わぬ儲けを得た様に聞きました。其後一週間程して、私も御主人に引き取られて奴隷管理所を出しました。

保管奴隷の番号を消され、鎖錠を解かれて懐かしい奥様の足許にひれ伏した時には嬉し涙が出ました。奥様は髪をアップに結って、左右がそれぞれ白と濃紺に分れた新感覚の和服に鎖朱の帯、白い足袋を短か目の裾の奥の方迄キリッとはいて、それは水も滴たる女振りでした。

「長い事、預け放しにしていたけど、さぞ辛かっただろうね。奴隷屋に預けると高くつくし、お役所の方が安心だと思ってそうしたんだけど、大分痛められたらしいわねえ。」

私は一瞬、自由の身になれた様な錯覚を感じましたが、勿論そうではなく、

「その店で買った出来合いのものだけど、これ足に嵌めて」

与えられた足錠を自分の両足に嵌め、両手を差し出しました。所有者である奥様の手で嵌められた手錠が両手首に喰い込みますと、何だかホッと安らぎを覚え、鼻紐を曳かれていそいそと管理所の門を出たのでございました。

途中、喫茶店で一服する奥様の足許に正座して、一きわ美しくなった横顔を見惚れて居ますと、

「それでね、一応引き取ってはやったけど、まだお店小さいのよ。私もアパート住いだしね。私の友達でアパートの管理人をしてる人が居るのよ。私が住んでるアパートじゃないの。そこで使って貰うことにしたからね。これからつれて行って上げるから神妙に働くのよ。分った？」

「……ハ、ハイ……」

失望しましたが如何とも出来る筈はありません。タクシーに乗せられて郊外の住宅地にある、かなり立派なアパートに連れて行かれたのでした。そこでの話しの前に、奴隷管理所の檻で、隣りに繋がれて居た男、S八〇二号から聞いた話を申上げておきましょう。S八〇二号は、私が引き取られて出て行くのを羨ましそうに見て居ましたが、彼も矢張り考えてみれば可哀想な男でした。

S八〇二号の話 (-)

——俺はな、いつ迄生きてられるか知らねえけど、考えて見りや、鎖に繋がれて暮す月日の方が多いうて事になりそうだぜ——

彼は貧しい漁師の伴として生れ育った。兄弟姉妹合わせて七人の真中の彼は、幼い時から貧乏の辛さを身に泌みて教えられ、小学校もそこそこに済ませた後は、父や兄の手助けをして生業にいそしんだ。富裕な数軒の網元達は、それぞれ配下の漁師達を支配し、網元の一家に対しては、低頭平身することのみを強いられた彼の心には、次第に反抗心が湧き上って来た。

何故に金持と貧乏人とがあるのだろうか、網元の家に入出入りする度、嘗て同じ小学校で席を並べて居た子供達に顎で使われる口惜しさは、少年の心を徐々に歪めて行ったのであった。

十六才の夏を迎え、既に潮風に鍛えられて筋骨逞ましい彼は、或日、父に命じられて、網元の息子、娘の海遊びの舟を漕がされた。彼がもはや御嬢様と呼ばねばならないその娘は、小学校の同級生であつたし、一年上の息子の方は、今は町の中学生で、今日は二人の友達を招待したのであった。四人共生意気盛りの年頃、そして御伴する女中も甘才になるかならずの小娘であつた。

彼等は勝手気儘に舟を漕がせ、釣の手伝いをさせ、そして釣った魚の料理を命じ、そして汗を滴らせて揮一本でろを漕ぐ彼には、ねぎらいの言葉を投げさえしないで騒ぎ楽しんだ。

「おい、船頭、しっかり漕がなか。」

彼等にとっては、漁師の伴が労働に汗を流すのは当然のことで、彼が額の汗を拭うことすら許さなかった。同じ年頃の少年達に我が

身を引き較べて、口惜しさ嫉まじさに胸が一杯になった彼は、御嬢様と女中とにからかわれて遂にカッとなってしまうたのであった。

「お菊さん、お願いだから、一口水を飲ませておくれよ」

彼の嘆願に女中は

「フン。お前でも人並に咽喉が渴くかい？ これでもお呑み」

と、米のとき汁や、野菜から滴った水を入れたバケツを顎で示した。

「あら、貧乏人の漁師の小倅に、こんなもの勿体ないわよ。お前なんかこれで結構よ。」

御嬢様は、舟底に溜った汚水を、釣の餌の空罎に汲んで

「そらッ」

と彼の顔にブツ掛けて声高く笑った。ケープを羽織った水着の下で、発育のよい胸が揺れるのを見た彼は、積重った怒りが腹の底から吹き上げるに任せ、矢庭に海に飛び込むや否や、訳も分らぬ事を呻き乍ら小舟を揺ぶりに揺ぶって、遂にひっくり返ってしまったのであった。

もとより魚同様の彼は、一散に岸に泳ぎ着いて、傾きかけたあばら家から身の回りの物を掻き集めるや否や、あっけにとられる母を尻眼に家を飛び出し、三里離れた停車場へと急いだ。裸一貫、都会へ出る決心である。しかし、汽車賃が少し足りない哀れさ、彼は十個以上向うの駅迄歩かねばならなかった。

一方、海に落とされた五名の少年少女のうち、四名は数時間後救助されたが、町から来た少年の一人は舟の下に入ってしまった溺死したのであった。

激怒した網元の大將に督励された警察は直ちに非常線を張った。

翌朝陽が高く昇った頃、空腹と疲労に、松の根方で突伏して眠って居た彼は、山狩りの青年団の手で難なく捕えられた。禪一本に剝かれてまりの様に括り上げられた彼は、顔がはれ上がる迄撲られた末来た道を棒で追い立てられて野次馬が集まる中を町の警察署に突き出された。

未成年者とは云え、人を殺した彼に対する取調べは峻烈で、すべてを自白してしまう迄は、如何に泣いて哀願しても縄を解いて貰えず、水一滴すら与えられなかった。

漸く痛い縄目を解かれ粗末な食事を投げ与えられ、留置場に放り込まれ、僅かに生気を取戻したと思うや再び捕縄を打たれて曳き出された。網元の両親がやって来たのである。地方のボスである網元には署長すら其の鼻息をうかがう位で、彼はさんざんに折檻され、ヒューヒュー泣き呻いた。彼の父親と母親がオロオロと顔を出し、膝で歩く様にして平身低頭を周りの人々に繰返しながら

「お、お前は又何ちゅう大それたことをしてかして呉れた。お前は、もう仕様ないとしても、俺達はこれからどうして暮したら……」頭を床に踏みつけられたまま彼は叫んだ。

「そ、そんな意気地のねえことだから、駄目なんだよう。皆でどこかへ行っちゃまえばいいじゃねえか。ヒュー。い、いたい。ここばかりが何も……」

其夜は、網元の命によって捕縄のままで留置場にブチ込まれた彼は、一晚中呻き続けて、金持を罵り、貧乏を呪うのであった。いろいろと説教されて、彼の気持ちも落ち着いた四、五日後、彼は少年審判所へ送られた。初めて嵌められた手錠は硬く冷たかった。

「おとなしくしないとひどい目に会うのよ。分ってるわね。」

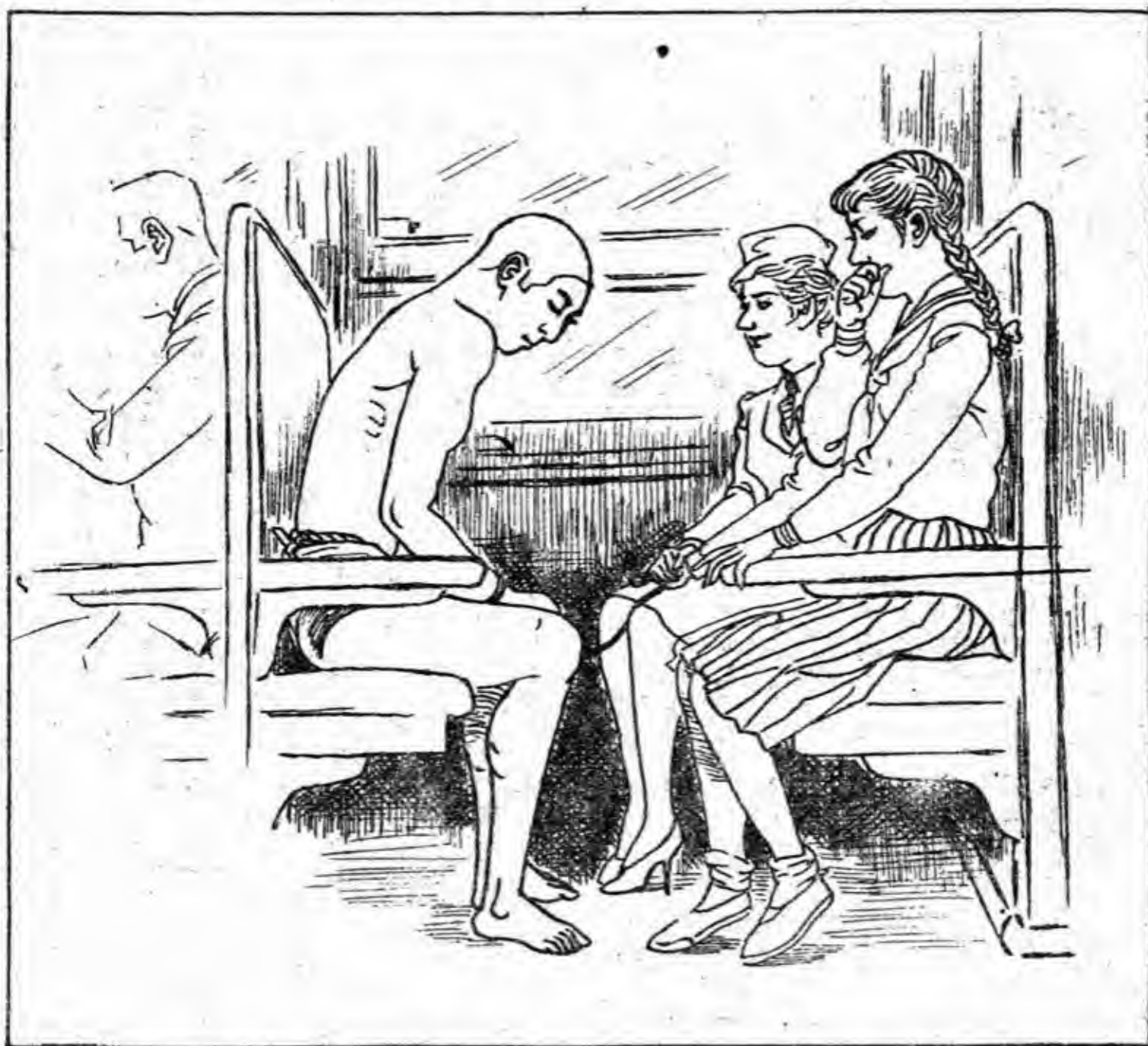
二十四、五手の婦人警官に腰縄を取られて、停車場から汽車に乗る彼の体に、小石が三つ四つ飛んで来て当たった。勝気な彼も、哀れな我が姿をジロジロ見られて全身真赤になって、うなだれた。

「恥かしいの？　けど悪い事したんだから仕方ないわね。これから罰を受けて償いをしに行くのよ。辛いだろうけど仕様ないの。」

汽車の座席に向い合って坐った婦人警官は、手錠の上でポトポト落ちる彼の涙を見付けて、鼻紙を出して眼や腿の辺りを拭いてやるのであった。

S八〇二号の話(二)

殺す積りはなかった点や哀れな事情もあった事等が考慮されたのであろう、彼に宣告された刑は五年以上



十年以下の、少年感化所に於ける労役であった。送られた少年感化所は、皮肉にも、彼の忌わしい故郷から山二つ越えた奥に在る、農耕労役を主とする所であった。

少年ばかり一〇〇名近くの中に混って、二十四号囚としての彼の受刑生活が始まった。中には二十才を過ぎた連中も少しは居たが、それは刑を執行中に二十才に達した場合、原則として二十五才迄はそのまま少年感化所で過させて貰える訳で、二十五才を越えると、残りの刑期は、監獄に送られて受刑せねばならないのである。

少年囚達は一級から四級迄に分られ、入所当初は三級であった。労役は所内の農園の農耕が主であるが、附近の開墾工事や道路普請

等にも駆り出された。首に嵌められた革の首環、そして錠の下ろされた革褌を二人宛連鎖した腰鎖の情けなさえなければ、労役そのものは、労働に慣れた彼にとっては何の苦痛でもなかった。

激しい労役よりも、日曜日毎に正座して聞かされる長い説教の方が遙かに苦痛であった。手錠を嵌められた両手を腰にのせて、固いコンクリートの床の上に身動き一つ許されないで正座して居ると、耐えかねて彼は思わず身動きして喘ぎ、痛い革褌をしきりと受けねばならなかった。

定められた時間以外は錠が下ろされて外すことの出来ない革褌、そして一日の労役が済むや否や、横一列に並んで両手を差し出し手錠を嵌められねばならない悲しさもさり乍ら、附近の中学生等が団体で見物に来るのには全く情けなくなってしまうた。

そして或日、彼が海へ投げ込んでやった三名の少年少女と女中がやって来て、捕縄を打たれて地面に引き据えられた彼を、勝ち誇った様に、さも小気味よさそうに辱かしめたのであった。如何に辱かしめられても、唇を噛んでうなだれて居る外なかったが、其の夜は監房の床に突伏して、彼は一晩中、齒ぎりして泣いた。

溺死した少年の両親がやって来た時には、彼も済まなく思ってたので、平身してひたすらに詫びたのであったが、父親が止めるにも拘わらず、金縁眼鏡を掛けた母親は、いつ迄もしつこく鞭を彼に当て続けるのであった。そして、母親の申し出によって、一週間の間、右足に鉄丸を曳摺って労役せねばならなかった彼は、罪を悔いる念も吹飛んで、唯社会に対する反抗心が一杯になってしまった。

しかし、表面は、ひたすら従順を装う他はなく、二十才そこそこ

の看守達に、虫ケラ同然に扱われ乍ら、神妙に刑を受けたつもりであったが、年齢の割に大柄で体格も良く、苛酷な労役にも余りネを上げないのが却って災いしたのか、憎まれてしまい、いつ迄経っても、昇級させて貰える所か、些細なことで降級され、やっと這い上ったと思った途端、又も四級に蹴落されるのであった。

四級囚にされると、労役時間が二時間長くなるのは左程辛くはなかったが、食事の度に後手錠を嵌められて手を使うことを許されずそして後手に捕縄を掛けられたまままで監房に蹴込まれてしまうのが何としても苦しく情けなかった。

「二十四号。お前、三年近く経っても未だ三級のままだなんて駄目じゃないの。本当は、二級以上になってからなんだけど、もう一年足らずで成年に達する訳だから、明日から三カ月間、所外使役に出すからね。」

或日、足枷を嵌められて事務室に曳かれた彼は、桜色の頬をした婦人職員に申し渡された。

不定期刑を宣告された少年囚は、其の最低刑期満了時、又は成年に達した時に、確定した刑期を言渡される訳で、それ迄の受刑成績が決定材料になる事は勿論である。そして少く共一回は科される所外使役の成績が特に重視される訳で、所外使役とは、当局が選んだ附近の家に預けられて働かされることであつた。旧家及び中流以上の家庭が選ばれる訳で、良家の家庭に接せしめる事によって少年囚を教化善導するのが目的であるが、奴隷同様の労働力を得る上、僅かとは云え手数料迄貰えるのであるから、希望する家には事欠かない。殊に此の感化所の附近は集約農業地帯であるから尚更であつた。

彼が翌日連れて行かれたのは、其の附近で一、二の大地主の家で

あった。朝早くから夕方おそく迄、彼は、外庭の木に繋がれて、捕縄をかけられたまま、飲まず食わずで丸一日、立たされた。家族の人々は奥深く住んで居る様で、近くの長屋には、多くの下男下女が住んで居るらしかった。人が近付く度に彼は大声で叫ばねばならない。「感化刑五年以上十年以下の二十四号囚でございます。本日から御当家で使役して頂くことになりました。有難う存じます。」

人々は憫れみとさげすみの眼で眺めて通った。

「あら、今度のはどうしたの？ 禪が革だわ。錠が掛ってる様だし……」「三級囚なのよ。此の前のは二級だったから赤い布の禪をさせて貰ったのよ。けど、今度のはいい体してるわね。使いでがありそうだわ。」

「そうねえ。けどこれから忙しくなると云うのに一匹じや少いわ。」
「一人宛と云う規則なんですよ。今年は臨時奴隷が高いそうよ。」

「どうして奴隷をお買いにならないのかしらねえ。文句云わずによく働いて便利なのに。」

「そんなことなさらしたら、私達お払い箱よ。フ、フ、フ」

彼に小石を投げつけた赤い前垂れの二人の小娘達は、野菜の入った籠を抱えて奥の方へ入って行った。

「私がお前の係りだよ。さ、おいで」

夕闇迫る頃現われた年かきの女中に、木から解かれて内庭へ曳かれた彼は、縁の下の地面に顔を摺りつけ、家庭の方々を拜まされた。家族と云っても、中年の夫妻と十六、七の娘とだけであった。

「お松さん。縄解いて、檻へ入れておやり。食事は明日からやればいいわ。」

使用人の長屋に接した納屋の入口にある檻は、漸く横になれる程の大きさであった。檻の真向いは長屋の便所で、鼻の先にある大きな汲取口からの悪臭が、隣りの牛小屋からの臭いと混って激しく臭

った。

翌朝、鉄檻の扉が開く音に起上った彼に「その汲取口の蓋を取って済ませるのよ。済ませたら台所へおいで。顔なんか洗わなくてもいいのよ。尤もそんなこと忘れてるだらうけどさ。」

と云い捨ててお松さんは足早に立去りかけた。

「ア……お、お願いです。鍵を……禪の錠前を外して下さいまし。」

「ああ、そうだったねえ。鍵どこへ入れたかしら。けど面倒なこと三級囚は。ホラ。」

「申訳ございません。ありがとうございます。」

「早くおしよ。」

再び禪の後ろの錠を締められ乍ら彼は少し恥かしかった。

「このとこ迄締め上げるのね。ずい分きつく締めるのねえ。お前痛いだろうね。」

「ありがとうございます。」

彼は両手を合わせて彼女を拜んだ。

「朝晩二回だけ外してやれて、旦那様のお云いつけよ。分った？」
「ハ、ハイ」

「けど私、よく見たことないけど、鎖の禪もあるんだってねえ。悪い事は出来ないわねえ。」

台所の隅で残飯を与えられてガツガツ食べた彼が門の近くを掃除して居ると、ひだのキツチリついたスカートをはいた登校姿の令嬢が、ジロジロと眺めて通り過ぎた。

「何故土下座しないの？ 馬鹿!!」

あわてて、地面に平伏して額を摺りつけた彼の尻に落葉が二、三枚当たって落ち、彼の頭を踏みつけて蹴飛ばした令嬢は、スカートを翻えしてバスの停留所へと走り去った。



【雑感】

臍とサディズム

南方佳男

結婚生活二年余りというのに、私は妻の臍が、どんな形をしているかよく知らなかった——と、こんなことを書いたら笑われる方もいるだろうが、本当の話である。

S派の私が臍にもつ興味というのは、私流の言葉でいうなら、腹部加虐癖からきているものである。

広い腹部の中央で、アクセサリー以外に何の役割りも持たないくせに、かなり横着に控えているこの愛嬌者を、いじめてみたいのが私の趣味なのである。

この趣味は、結婚生活に入って、一層高まってきたようである。若い女性が、想像以上

に腹部露出を恥かしがることが判ったからである。

新婚旅行の第一夜、D温泉で私は妻の裸身をみた。

幾十度、あるいはそれ以上も、着衣のうえからひそかに空想していた肢体よりも美しいと感じた。

浴場での妻は、終始タオルで、肌をかくし続けた。なさけない話だが、私には結婚直後から妻に対して、サド性を発揮するだけの勇氣がなく、同夜はついに、妻の臍型を眼で確かめることはできなかった。

それから二年余り、私の教育?で夫婦の間の軽いSMプレーは営まれるようになった。

——が、しかし、妻の切願で、いまだに妻を裸にしてゲームしたことがないのである。

薄い下着を透しての観察では、妻の臍は、小肥りな体にふさわしく丸くかなり深い大きなもののように思えた。

昨秋、妻は妊娠した。

勿論はじめてである。

正月過ぎの「戌」の日、妻は岩田帯を締めることになった。

この日、妻はひどく嬉しそうだった。

「ネエ、自分じゃ判らないんだけど、私のお腹、そんなに大きくなってる?」

二人だけの部屋の中で、まだ岩田帯を締める前に、妻は私に問いかけながら、はじめて私に腹部をみせてくれたのだった。

色白の妻の体で、最も美しい部分だった。

想像した通りの大きな臍は、妊娠による腹壁拡張で、浅くひろがってはいしたが、手入れをしていないため、ゴマもたっぷり付着して、私のサド性を高ぶらせた。

「本当だ! 案外ふくれてるなア……若羽黒級じゃあないが、若乃花級だ!」

「……」

力士の名前が飛び出した私の答は、一寸、

妻には判りにくかったらしいが、やがて

「いやッ！ あんなの……」

と、そのくせ一向にいやらしくもない笑い顔でいった。

臍の位置の上三分くらいのところから、少し縦長の円型に盛り上った白い妻の腹。私の心は、眼の前にあるその女体が、妻でなく、また私の愛の結晶が宿されていないのなら——と考えたりした。

そして、当誌の古くからの執筆者である羽村京子女史の心境が、深く理解できるものがあつた。

○ 臍型の論議は、すでに

多くの先輩が書きつくされているのでさけた。

私は臍型を大きく四通りに分類している。

仮に当誌のモデル嬢を例にとってみると、

①梨花悠紀子さんのような浅く渦巻きが外見できるもの②絹川文代さん、竹野ひろ子さんのような突いてへこませたようなもの（腹部面積の割に小さい）③大塚啓子さん、愛川悦子さんのように大きく奥深いもの④四方清美

さんのように縦長の溝状になっているもの——ということになる。

その他のモデル嬢の場合、桜井葉子さんは③型の変型だが、俗に「ほていベソ」とでもいうのか、失礼ないい分だが魅力の乏しい型である。東浦ひかるさんも、いわば同型だから、しいていえば⑤の型に分類してもよい。

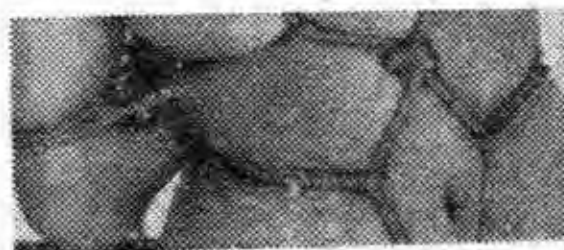
前本妙子さんも独特の形の臍をもっているようだ。⑤型の感じもするが、むしろ②型に近いと思う。



山路ミヨ子さんは⑤型に似た①型である。梨花悠紀子さんの④型傾向の①型であるから、おのずから違いがある。

私の妻は③型である。大塚啓子さんに似た体つきのトランジスター・グラマーである。

いまの妊娠した姿は、丁度、昨年十一月号グラビヤ「膚はコードにくびれて」の左ページ右上の写真。あの大塚さんの臍下をもう少しよけいに突き出したと思えばよい。



以上四つの型の臍で、どれに魅力があるかという、個々の好みがあると思うが、私はボーイッシュな感じのする④型と、女性的な③型にセクシーなものをおぼえる。

④型は十代、③は二十代の魅力である。当誌の挿絵は正直にいつて、臍に対してあつかいが軽卒である。

私も昔は、絵心があつたので、ときどきザレ絵を画くが、なるほど臍は画きにくい。

しかし、その画きにくいという問題は抜きに、年令とか体質に応じた臍型の変化を求めるだけの研究的な面はどうであろうか。

二、三の例をあげると流れい子さんは②型の臍を画く。四馬孝氏は④型オンリーで、それに位置が不安定だった雑である。南村俊平氏は①型だ。少女を画くのでまあまあ納得している。

④型専門だったが、古い当誌の挿絵家の畔亭数久氏は魅力的な臍を画いていた。

最近の挿絵で興味を持ったのは、昨年十一月号の口絵「坊主の嫉妬」の滝れい子さんでほんの僅かな陰どりのテクニクが活きてい

た。

臍うらない——というものがあるそうだが私はあまり興味がない。どうせ統計的に割り出したものだろうが、その割に似かよった環境や生活を営んでいる人で、臍型の違う人を知っているからである。

女優さんなんか、そういった意味で、いろいろいえることが有りそうだが、プライベートにふれたりすると困るので避ける。

ブリジット・バルドーとか、ミレーヌ・ドモンジョ、ジーナ・ロロブジーダとか、外国の女優方は相当拝見する機会もあったが、洋画はあまり見ないので、充分な知識がないから、お許しをいただく。

日本の女優さんで、お臍を御披露した人は少ない。

といっても、二十人くらいはあるだろう。

①型つまり浅い臍の人は、三条魔子（新東宝—大映）叶順子（大映）中島そのみ（東宝）万里昌代（新東宝—大映）重山規子（東宝）などがある。とくに中島そのみと万里昌代は浅く渦巻がわかるほどだ。美人の万里昌代の場合など、なんだか艶けしみたいな感じがする。

る。

②型つまり小さな臍の人には、紺野ユカ（大映）小園蓉子（日活）九条映子（松竹）浦里はるみ（元東映）中田康子（東宝—大映）などがあるが、浦里はるみや中田康子は大柄な割に小さい臍なので、実際にはかなり深さをもっている。それに総体に、腹部へポツテリとかなり厚い脂肪層のできている人たちである。

③型とよく似た②型の人は、三原葉子（新東宝—フリー）扇町京子（元新東宝）炎加世子（松竹）北あけみ（東宝）毛利郁子（大映）三ツ矢歌子（元新東宝）左京路子（元新東宝）などがあげられる。

深々と大きな臍である。そして②型の人たちの腹が、脂肪が回ってポツテリしているのにくらべて、この人たちは腹筋が発達して、腹部の皮フがピンと若々しく張り切っている。

④型は私のもっとも好きな若く活々したものを感ずる縦長い臍だが、この型の女優には瞳麗子（松竹）市田ひろみ（大映）中原早苗（日活）前田道子（元新東宝）泉京子（松竹）



芳村真理（松竹）などがいる。とくに瞳麗子や前田道子などは少しそり身になると、鳩尾から縦に浅い溝があらわれ、美しいラインをつくる。

私が思わず加虐性を感じるのが、こんな腹部に対してである。

女優とはいきれないが、よく映画にでる人で、奈良あけみ、春川ますみ、小浜奈々子などがいるが、いずれも③型である。

また、お臍をみせてくれそうな役のくせにまだ拝見できない女優方に白木マリ（日活）なくなった小宮光江（東映）香月美奈子（日活）水野久美（東宝）宮川和子（大映）などがいる。

古い古いことを思い出したが、浜田百合子のお臍も拝見した。十二、三年前だから、おそらく日本の女優さんたちのうちで、彼女のこのストリップパーの役が一番最初に臍を出した人だろう。

綿之助夫人となった有馬稲子も、かつての作品「胸より胸へ」でストリップパーをやったが、ついにお臍を出さなかったので、残念な記憶がある。

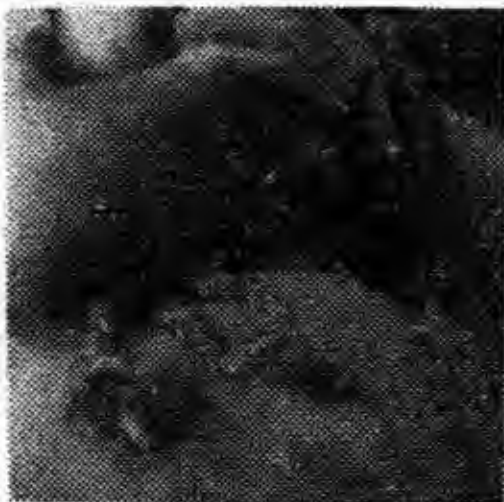
東宝の原知佐子は新東宝時代に、みせていただいているようだが、記憶がない。

○

「お臍いじめ」——というと、まず思いつくのがクスグリとお灸である。

現実性があるからであるが、私はまだ実際にためしたことはない。

ためす以上には徹底的にやってみたくて、妻が出産でもして、体が回復したところに、フトンの下に板きれか何か敷き込んで、手足を大の字に開かせて、この板きれに縛りつけて実験してみようかと、考えているところである。



いる。

空想の世界だったら、ずい分残酷な臍いじめもできそうである。

私は三、四年前の作品で、ハリツケにした女の臍を凹面鏡の反射光線を集中して焼く——といった、ひどい折檻の方法を書いたが、これと同じことで、例えばビキニスタイルで日光浴でもしている若い女性のお臍を、こっ

ら、あまり大きな灸にしなかったらひよっとしたら熱さ痛さを辛抱するかも知れない。そうになったら、悲鳴をあげるまで続けると面白と思うたりする。

一月号の水木清一氏の作品の中に、少女のお臍へお灸をすえる個所があった。

私の小学校一年生ころの同級生の女の児に

も、同じように継母に、寝小便がやまないからと、お臍に灸をすえられたという児がいたので、懐しい思い出である。継母にいじめられているくせに案外活発な女の児だったので、身体検査の時、平気でみせてくれたが、ひどい水ブクレになっていたのを憶えて

そりと凸レンズを使って焼いてみたら、さぞや驚くだろうと、独りひそかにほくそ笑んでみたりする。

美しい女性のお腹を、お臍の上を通るように縦にブスリと鋭い刃物で、切り裂く空想は、あまり血なまぐさ過ぎるし、第一お臍の型を消してしまうので敬遠しよう。

これも三十年ごろの休刊前の当誌にていたのだが、空想の世界で、スパイの若い女性が敵に捕われ、いろいろ拷問をうけた末に、最後の手段として、十字架にハリツケにされ、三ツ目錐を臍にギリギリともみ込まれる——といった筋の作品があった。楽しかったし、あの時の挿絵もよかった。

実際にはできる問題ではないが、これを応用して、お臍の中に刺青をするのも、随分痛く、たえづらい責めになるだろう。

こう考えて工夫してみると、お臍とサディズムの関係は浅からぬものがあるようだ。

本音をはけば、私のサディ性は、女性のお臍に対する憧憬が、誘い出したものではなからうかと、このごろになって追憶してみることもある。

(了)



マ ニ ヤ ノー ト
愛 好 家 の 記 録

不 浄 な る

聖 物

と や ま か ず ひ こ

い た ず ら

社の内祝があつて、ある料亭を借り切つて一夕の会食ということになった。飲むほどに奇抜な余興もとび出し、座の相当乱れたところで、招待客の友人、新聞記者のSと共謀でちよつとした「実験」にとりかかった。実験というと聞えはよいが、たちのわるいイタズラである。

お運びさんを口車にのせて半紙とすずりを出させ、こしらえたのが「故障、使用禁止」

のハリガミ。

これを女性用トイレのドアにベツタリと貼り出し、こちらは物かげからソツとうかがおうという寸法。この作戦は一〇〇パーセントの成功。

とつかえひっかえ、日頃かずひこの血をさわがすBGたちが、足早やにやってきてはハリガミをみて「アラ、ヤダワ」とばかりにたちすくむ。

その困惑のていも各人各様。ご当人たちには気の毒ながら、こちらはおもしろくてたま

らない。

三十分間ほどの間に、約二十人の「お客さま」がおいでになった。本日の出席女性は三十四名だから、ザツと三分の二。女性軍も相当地ビールを空けたとさっせられる。

困りきつて、恨めしそうに立ち去ってゆくうしろすがたに、なんとなくSの味を感じ、同時に、ハリガミがなかったらこれだけの女性が用を足したろうと思うと、そのあこがれのものを想像してうれしくなった。

その内、誰かが帳場にでもいつけたものか、番頭さんらしいのがやって来て悪事ろけん。たちまちこのタチのよくないイタズラは幕ということになってしまったが、とにかく、トイレというものは、かずひこにとってはたのしい存在である。

ベ ン ピ

会社のヒルヤスミ。オフィスの片すみで女性軍が、ヒソヒソとさも重大事らしくヒタイを集めている。

わり込んで、シブるのをようやくくどいてききだしたところ、オフィスNO1のすみ子さんが、これはまたオイロケのない「ベンピ」で困っているという。一方、すみこさんと甲

乗せ、両手には長靴をはかせて、恰かもナオミに騎乗されているものの如く、狂人の様に部屋の中を這いまわりはじめる。

(ナオミ) 「ふん、馬鹿な奴、徹底的に降参させて、二度と生意気を云わさない様にしやる。

と、いいつつ玄関に廻る。

(譲治) 「おお、ナオミ。ナオミ、帰って呉れたのか。ナオミちゃん」

と、いって抱きつこうとするのをナオミは荒々しく振り切って

(ナオミ) 「うるさいわね、お前なんかもう相手にしてやるもんか。ちょっと着換えを取りに來ただけよ」

こんな具合で再会することにして、その後はしつこくまとわりつく譲治、それを冷然とつき離しながらじらすナオミのやりとりが数場面続く。

それから映画にあった通り、彼は頭から着物をひっかけられ、ナオミが「何よ、その格好は、まるで馬みたい」「そうだ、馬だ。その馬にして呉れ、お願いだ」の場面につづくのである。

目の前に四つ這いになって許しを乞うやつを、美しい顔でにっこりと微笑みながら、無

抵抗な奴、

「さう、ペーパーをこつて

「そんなにいうなら、可哀そうだから望み通り馬にしてやる。しっかり歩け、ハイシ、ドウドウ、ハイシハイシ」。

女王様は艶然と笑いながら、こっけいで哀れな馬を責めて、ぐるぐると面白そうに部屋の中を乗り廻す。

「どうした、やせ馬。ヒンヒンと鳴け、もつと鳴け、ハイシ、ハイシ」

とにかく、こここのところは映画として最高の場面であるから、映写はたつぷりと、十分でも二十分でもリアルに続ける。

やがて力つきて、もう一歩も歩けない馬の正面からの大写真。デンとつき出された女王様の両の御足。

「こいつめ、歩かないか。云うこと聞かないと承知しないぞ」

「ひいひい、もう勘忍して」

「駄目、駄目。おやッ、こいつ。反抗するつもりかい。ようし、こうしてやる。さあどうだ」

いうより早く、見事な首乗りでとうとう馬を潰してしまふ。

「立て。こら、立てといったら立たないか」

馬の髪の毛、痛さに堪えかねて重なる宝物。は

うめきながらよろよろと立ち上る。その首根っ子に情け容赦もなく、再びぐっと馬乗りに跨って、ぎゅうぎゅうと締めつけながら、あの征服の言葉が続く。

「どうだ、参ったか」

「はい」

「これからは、何でもあたいの云うことを聞かいか」

「はい」

「きつとか」

「は、はい」

「よし。じゃあ、今度のことだけは許してやる。これから二度とあんな事すると、それこそひどいぞ」

「そういつて、やっと女王様は憐れな馬を許しておやり遊ばす。

心持よい懲りめのあとの軽い疲れを、ソファの上で休まれる女王様の前に、奴隷は飲物を運んだり、足をマッサージしたりして、大奉仕を捧げる。

その姿を小気味よさそうに横目でみていた女王様は、いたずらっぽくいう。

「どう。私の恐いことがほんとうに判った

かい”

“はい、よく判り……”

答えはそこまでで切れてしまう。

いきなり、奴隷の首筋が女王様の足にしつかと踏みつけられて、床に押し潰されたからである。

女王様の御口からは「ハイシ、ハイシ走れよ小馬……」という鼻唄が流れる。

勝ち誇った御姿がだんだんと絞られて「終り」

ロバ 乗り

驢馬と云うのは、馬と何とかの子で、うで、可愛らしい動物である。日本でも、よく子供の集る遊園地などに飼ってあったり、車を曳いてパンなどを売っているものもある。しかし一般的にいつて、街ではあまり見掛けないようである。

ところが西洋では、特に地中海沿岸のギリシャ、マケドニヤ、イタリア南部、スペイン、シリヤその他中近東、及びアフリカ北岸あたりでは、乗用として現在でもかなり普及して居り、美しい女性が普段着の姿で無造作に乗っている姿をよく見掛けるそうだ。例に出すのは憚りがあるが、キリストや聖母マリヤも

よくロバに乗ったようである。

子供の頃、幼年雑誌で可愛い男と女の子がそれぞれ一頭づつ驢馬に跨って「さあ、向うの丘まで駆けっこしましょう、負けないわよ」という説明付きの写真があったのを今でもおぼえているが、それを喰い入る様に見つめながら、その女の子が「ハイシ、ハイシ」とロバを責め、手綱を引きしめ、お腹を蹴って、ゴールまで走らせる姿を想像して、独り夢中になった事を憶い出す。

考えて見ると、子供とロバの関係が丁度大人と馬の関係になるのではないだろうか。つまり本物の馬に比べて、それだけ小さいので馬ほどのいかめしさが伴わないのである。だから、一人前の大人がロバに乗るのは人間馬と本物の馬との中間位にある訳で、案外気易くまたがれるらしい。

第一、ロバの背の高さは、大人の腰の辺りに当るから、足の長い人なら伸ばせば地面に届いてしまう。まるで自転車に乗る感じである。買物籠を下げて、スカートを一寸つまんでひらりと跨れば、鎧もいらぬ位である。それで却ってマゾ気をアップीलする結果となるのではあるまいか。

昨今は団地づくりで急速に立派な田園都市

が出来つつあるが、一寸用足しの乗物に不便という向きもある。

こんな時に「春はロバに乗って。御婦人は三割引大奉仕」という貸しロバ屋でも現われて、ショート姿のグラマー方が揚々と打ちまがって、三々伍々と連れ立つ風景を夢みるのは私だけであろうか。

随筆「またがる」

“流れる”という幸田あやさんの小説が出てから、動詞の現形、例えば「生きる」「みつめる」といった類の創作が目につく。これにあやかって書いてみたいと思うのが、標題の随筆「またがる」である。

× × ×

或る歌劇スターの憶い出話の中に、自分の育った家に山羊が飼ってあって、それがとてもなついておとなしく「あたしが背中にもたいても、じっとしてということ聞くの」という一節があった。

勿論「またぐ」という意味ならこれでもいいのだろうが、この場合は、山羊の背の上にもたいて立つという意味ではなく、馬の代りにして背中に「またがる」描写であらうしそれならば、「またいで」では無く、「また

がって”が正しいと思われる。

それにも拘らず敢て「またがる」と云わな
いのは、やはり女性には本来的に、この言葉が
タブーとなっているのではないかと思うので
ある。ただしこれは一般論であって、時代の
変遷と共に風潮も変化する。最近の女性はM
型が多いようで、早いとこまたがっちゃえ”
とか、よし、馬乗りになっちゃえ”という具
合に、平気で使用される。

最近の人に限らず、一寸意外だったのだけ
れど、”流れる”の御本人幸田女史が、確か
「男と女」というような座談会で、若い頃の
氣風を質問されて、齒切れのよい江戸弁で、
あたしは小さい時からお転婆で、よく男の子
と取っ組み合いをやりました。勿論勝つのは
あたし。組みついて馬乗りになまたがって、ギ
ュウギュウ”と云ったそうだ。

ここで男性軍代表が「ダー」となる。
とにかく、”またがる”という語感はしと
やかなものではない。”またがる”為には脚
を開かねばならない。しかも脚を開くという
のはあまり女性的ではない、ということなの
であろう。

語源的考察、そのタブー性、人間本能との

関連、女性のまたがり動作、乗馬との関連、
征服話としての”またがる”等々、随筆の題
材には事欠かないようである。ただ、悲しい
かなそれにふさわしい知識と文才がないだけ
なのである。

KK誌の編集方針 について

四月号巻末に、編集方針についての考え方
が載った。これについての拙い意見を述べさ
せて頂きたい。

最近、急激に発行部数が増えたのか、KK
を購入するのに、あまり苦勞がいらなくなっ
た。大ていの書店や売店には、一日二日の差
はあってもKK誌が並べられるようになった
からである。

この事実はマニヤには誠に喜ばしい限りで
KK誌の着実な発展を示すものである。値段
も確かに安い。比較にはならないかも知れな
いが、粗末な風俗雑誌でも、大概是二五〇円
はするのである。

ただ反面、一般大衆、殊に青少年に対する
反応も、当然問題となって来るだろう。私に
云わしめれば、週刊誌の中には、ずい分ひと
いものがあり、むしろ自肅するのは、この方

だろうとも思うが、只、回転期間が一週間と
いう短いあいだなので摘発もルーズになっ
てしまい、本誌の様な定期刊行物が対象になっ
てしまうように思える。

私個人の趣味から云えば、三月号の特別グ
ラビア「人間馬の調教」の数頁は、確かに圧
巻であり、よくここ迄やって下さったと感謝
の念で一杯である。と同時に、この様な写真
も、この辺が一応の限界ではないかとも思い、
不安な気持がある。

問題はKK誌の永続性である。いつ迄も続
いてほしいのである。故に発表にもおのずか
らピークがあつていいと思う。毎号、より高
く、”より刺戟的に”ということでは問題も
多からうから、三カ月に一遍なり、半年に一
回なり、”あつ”という編集が行われるならば
その余は、多少おとなしいものであつても一
向差支えないと思う。

この際、従来の行き方と全く異なる別のも
のになつてしまふことだけは、絶対に反対で
ある。

何卒この点御含みの上、マゾヒストの為に
がんばって下さい。妄言多謝。

夢幻小説

牧神の饗宴

香 椎 隆 彦

ケネシト
火殿——

アグレリアン派東京寺院の火殿の中へ、KDTの踊り子、重山佳子は、背の高い黒衣の僧侶に荒々しく曳き立てられてくる。数カ所の扉の奥の隔離された一室に、臀を蹴られて、放り込まれた。毎日の踊りのレッスンに美しく鍛えあげられた肢体は、蹴とばされてたたらを踏むように倒れた。石の床に崩れて悶え、ひくつと体を波うたせたのは、瀕死の白鳥の踊りを思わせて、悲哀美をかきたてた。すんなりと伸びた、たおやかな腕は背中にひきしほるように括りあげられている。不意の誘拐と恐怖に、惑乱した彼女の顔

は蒼白であった。

四囲の壁は、赤煉瓦の荒肌を剥き出しにしている。高い天井に近く、換気口のような小窓が開けてあって、一筋の初秋の、淡い光線が射し込んでいた。

明りはそれだけで、薄暗く殺風景な室内の空気は、冷え冷えとよどんで、陰うつに動かない。古い倉庫か牢獄の獄舎の趣きで、そこには、教会の火殿という名称から想像される宗教的な雰囲気などは、微塵もうかがえなかった。

黒衣の僧侶がいったん出て行くと、一切の

物音を杜絶した不気味な沈黙が、俯伏している佳子を、ひしひしと呪縛した。グレイのスカートがまくれて、形のよい白い脚がさらけだされている。やがて、その背に波状的に痙攣が走ったのは、唐突の誘拐に運命を激変させられて、恐怖と絶望に打ちひしがれるむせび泣きであった。

——碧かったノ

と泣きじやくる彼女の錯乱した脳裡に、車を下されたとき抗いながらちらと眼にした、アグレリアン教会の白い円頂塔をくっきりと浮かび上らせる紺碧の青空がよぎったのは、

いつの日に、再びあの空の下を自由に歩けるのかという、底知れぬ恐怖の戦慄をかきたてる衝撃だった。

彼女は、涙をこぼしながら不自由な体を、のろのろと苦心して立たせた。黒い円らな瞳は凝然と見開られて、幽閉された室内を見まわした。逃げ口はない。荒れすさんで陰湿な部屋だ。

不意に、また噴き上げるように涙が黒い双眸に湧き出して、彼女は声をあげて泣いた。彼女は壁に体を打ちつけて身悶えた。泣き声は虚しく赤煉瓦の壁の中に共鳴した。乱れた黒髪をかき上げる自由さえ、彼女にはないのだ。括り上げられた腕も肩も背も、痛みから痺れに変わってきた。涙はぬぐえず胸につたつた。

泣き声がふと落ちたのは、鉄の扉の門がはずされて、背の高い青い眼の黒衣の僧が戻ってきたのを見たためである。若いが皺の深い僧侶の顔には、唇が光って、ぞっとするほど虚無的な翳が刷かれている。男の手が上って手にした金具が光った。

佳は、はっと身をひいて後ずさりした。胸の動悸が、烈しく高鳴った。

「逃げなくてもいい」

と黒衣の僧侶は、片言の日本語でしずかにいった。

虚無的な若い僧侶は、しばし後ずさりする彼女を見つめていた。黒髪を乱し、蒼ざめて泣き濡れた瞳に抗^{あへ}がいの光を光らせる縛られた女を、美しい、と眺める充分の余裕が、男にはあるようであった。

だが、一瞬の後、ずいとい歩踏み込んだ男が、長い猿轡を伸ばすと、ひとたまりもなく佳子は捕えられた。恐ろしい腕力であった。その烈しい力は、彼女の抵抗心をもろくも失わせるに足るものだった。

「いたあっ！」

思わず半泣きの声が紅唇を迸ったのは、痺れにいたむ腕をむずと握まれて、火のつくような疼痛が走ったからだ。

薄光を受けて、僧侶の手にしたU字型の金具が光った。内側に鋭い刃をつけた金具で、それは思いがけなく、佳子を縛っていた太い紐を、ぶっぶっと切断した。ふうっと香わしい息が洩れて、彼女は訝しさと意外さに力を抜いて慄えた。

だが、縄目を解いた男は、つぎに、左手で彼女の髪を大掴みにすると、苦痛にしかめた彼女の蒼白な顔を、ぐいと上向きにした。白

い首が苦しげにのけぞった。男は冷酷な笑いをかすかに光らせる眼差しで、彼女のつりあがった眼を覗き込んだ。

それから男が手にした刃物は、いたぶるように彼女のすんなりした首筋をびたびたと冷めたく叩くと、息を呑んで身動きも出来ずに立ちすくんでいる彼女の襟もとをはさみ、ずずずと裁ち切っていくた。あっと思う間もないとっさの出来事だった。

「かんにんして！」

「楽にしてやるのだ」

「いやっ！」

本能的に裂けた胸許をかきあわせた彼女を再度引きつけた僧侶は、こんどは彼女の服の背面を委細かまわず裁ち切った。滑らかな肉づきのよい背が、露わに白さを現わした。曝けだされた佳子の素肌は、瞬間、鳥肌立った。

そのままの恰好で、重山佳子は、髪を掴まれて、獄舎を曳きずり出された。人を人とも思わぬ残酷なあつかいと惨めな恰好に、新たな恐怖と惑乱が湧き立って、彼女はぶるぶると慄え、脚は萎えんばかりにがくがくとよろめいていた。

火殿に通じる中庭の向いには、同じような



赤煉瓦の僧院があつて、奥まった火殿に最も近接して、アグレリアと東京寺院の総主事、フレデリック大教司の院長室がある。

院長室のインターホーンが鳴ったとき、フレデリック大教司は、客と対座していた。太って血色のいい油ぎった体軀を、金糸の縫いとりのある純白の僧服に包んだ大教司は、ゆっくりと太い腕をのぼして、インターホーンのボタンを押した。流れ出てきたのは、火殿主任のキャサリン尼僧の声である。

「重山佳子を、火殿の展覧の間に入れておき

ました。同室者は入江美沙とマリアン・レーンです。御巡視をお願いできますか？」

「わかりました」

「それから附属高校の中込学監から、火殿礼拝堂の使用を求められておりますけれど、よろしうございませうか？ 生徒の処罰を行いたいそうですが」

「今日は特別夕拝があるが」

と大教司は、ふと分厚い臉の底の威厳に満ちた眼を客に走らせたが、

「夕拝の準備にさしつかえなければよいでし

よう」

「恐れ入ります。すぐ行わせるように連絡いたします」

「学校は、もう放課後ですね」

「はい」

附属高校とは、寺院に隣接してあるアグレリアン女子高校のことである。

「結構でしょう」

「神の恵みを……」

「アーダの神の恵みを……」

インターホーンは切れた。通話を終った大教司は、油ぎった顔にゆったりとした微笑を浮かべて客を見た。

客は公示書を読み終ってサインをいれ、小切手を取り出して、これには相当の金額とサインを認めていた。

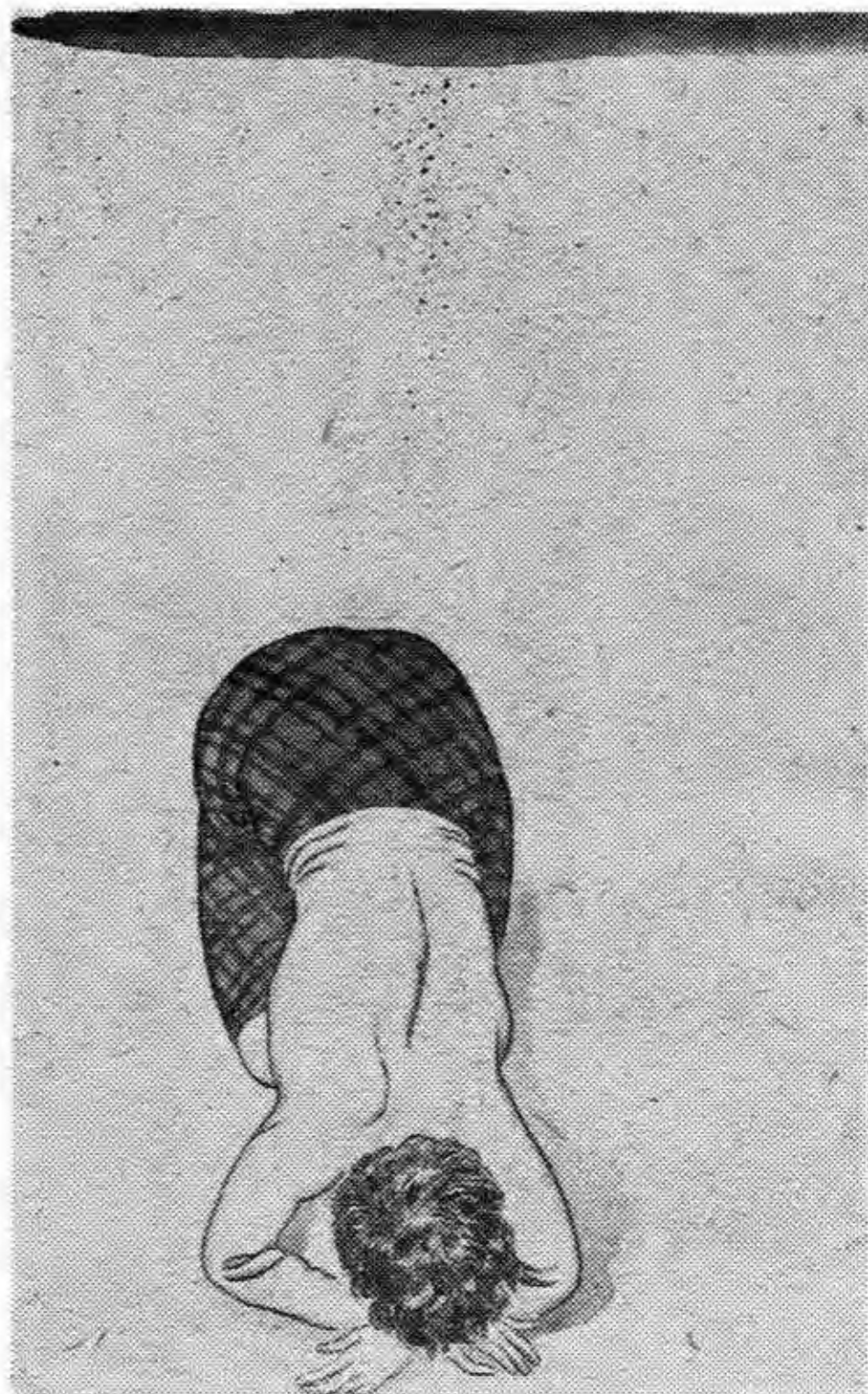
冴田と呼ぶ、教会長老の職籍にある南米婦りの富豪であつた。白髪で、皺の深くきざまれた顔が陽に灼けている老人だが、老人にもかかわらず大柄ながっしりとした体は矍鑠かくしやくとして驚のような隻眼は、一介の南米移民から巨富を積むに至った老人の尋常ならざる過去をしのばせて、大教司の威厳に満ちた眼光に、いささかのひけもとらない。左眼は、不気味に無表情な義眼であつた。

「お帰りの前に、女どもを御覧戴きましようか。新しい女が数人入りましたが、お気に入るものがあるとよいのですが」

「女……」

と老人は、サインを入れた公示書と小初手を手渡しながら、ふと睡むたげな眼つきをした。

「女といえ、前にお預りした女の中で、お返ししたいものができた」



「ほう。病気にでもなりましたか？」

「いや、飽きたのですよ。入れ替えてもらいたいです」

フレデリック大教司は、ごもつとも、と肯いた。

「それは、二三日中に引取り人を差向けましょう。鎌倉の御宅の方ですね」

「御手数をかけるが、まだ、軽井沢に置いてある」

「承知しました。」

大教司の口調は丁寧だが、余人には犯し難い重みがあり、中込長老の声にも、深い底力があった。

フレデリック大教司は、それから、デスクの上の一葉の封書を取り上げた。

「ネヴオラシテイの総教会への月例報告ですが、御検討いただきますよう」

その折、大教司はさりげなく、冴田長老の寄越した小切手の金額に眼をとめた。満足気な表情があった。老人は封書を開いた。

二人が、どちらからともなくソファを立て、堂々たる風格を並べて、中庭の渡り廊下から火殿へ廻ったのは、それから数刻後であった。

アグレリアン東京寺院は、表通りの白亜の一般礼拝堂を除いては、凡て赤煉瓦建てで、高いコンクリート塀に囲まれた僧院構内にある附属女子高校も、例外ではない。屹立する円頂塔の翳が投影する、白砂を敷きつめた中庭を通過して、うなだれた制服の女生徒達が、こわばった顔つきで、黒い僧服の学監に引卒されて、火殿に入っていくた。

この一カ月間に、なんらかの落度があつて

操行点を可及び不可と認定された女生徒達である。

就中、深々とうなだれて、とぼとぼと厩所にひかれる白い羊のようだったのは、不可と認定された三年生の高木玲子と英子の、美貌の双生児であった。

赤煉瓦の陰惨な火殿の特別通用門を入ると奈落の底のような、暗く湿った冷氣が、ふわっと顔にあたる。

点々と壁の青ランプが照らしている細い回廊を通って、生徒達は火殿礼拝堂に入った。

不気味さが胸を震わせる。

極彩色に天井まで奇怪な人獣壁面の描かれた広間に、華麗なステンドグラスが異様な幻想感をかきたてる複雑な色光を、眩しく暗うつに流していた。祭壇の前の礼拝台に立つ何基かの大小さまざまな、胴のねじれた燭台にはの燃える灯がはいっている。

だが、正面に一段と高い、悪魔的な神体を安置する祭壇は、血色の真紅の垂帳に蔽われて、女生徒の眼には隠されていた。

処罰を受ける生徒達は、先生の指示に従って、ぴかぴかに磨かれた床に、白い影絵のようになり、うずくまっていた。

神の前にぬかずいた少女達は、両腕を後に

廻して掌を組み合せ、祈りのポーズをとった。

だが、清純な乙女達が、それを知らずに従順な祈りを捧げる神が、実は黒ミサに用いられるような、よこしまな神であるとは、呪われたことであった。

「エスカ、マリント、ケマルセ、ハヤ、ロール……」

と中込学監のしわがれた声が、ドームの中にひびいて、こだまする。

不気味な圧倒的な雰囲気、少女達をひしひしと押さえつけた。

その言葉の意味は、神よ、我が罪を許し給え、再び罪を犯さぬよう、固く懲しめ給え、という祈りである。

生徒達が、その言葉を唱和して繰り返すうちに、中込学監は立ち上ると、銀製の祭壇の鞭台から、油ののった太いボアド製の鞭をとって、生徒達の後に廻った。並んだ少女達の背に、伝染するようにいっせいに怯えが走って、本能的な恐れにこわばった。

三十才を過ぎたばかりの、元体育教師だった中込学監は、殊更に冷やかな表情をとっていた。だが、清純な少女達を思いのままにあつかえる立場に、喜悦のこみあげるのを押さえ難いように、男は、金齒のはまった唇を薄く

くあけて、ごくりと咽喉仏を動かした。

「くうっ」

と不意に左端にいた生徒の祈りの声が途切れたのと、ぱしっと、傷のつかない鞭音が鳴ったのは、同時だった。

生徒は、鞭を受けるのは初めてと見えた。

最初の一撃に早くも逃げ腰になったが、わなわなと慄えたちに襲われ、第二の鞭がふり下されぬ先に、ぴくっと縮んだ。男の唇が、にやっと歪む。

「エスカ・マリント・ケマルセ……」

祈りの声は波うち、鞭は、音をたてて弾けた。

先生が、自分の後に立って、順番が廻ってきたのを悟ると、それぞれの生徒の後に廻して組み合せた指には、思わずぎゅっと力がはいり、うなだれた首は、一層がっくりとうなだれた。

「神よ、懲しめ給え」

生徒の可憐な声に応ずるように、空気を裂いて鞭が泳ぎかかると、ぴくんと背筋がそりかえる。

「はあっ」

と熱い息が吐き出され、

「うっ！」

と、咽喉もとに押し殺された呻きがあふれ出るのだ。

「三年一組の高木玲子、二組の英子は前に出なさい」

双生児の姉妹は、列の真中にいた。はっとバラ色の頬をこわばらせた美貌の顔形から、甘美な繊細さをたたえた体格まで、全く酷似した姉妹だ。

一瞬、呼びあげられた二人は灼けつくような瞳を伏せた。

「立って、前に出るのだ」

学監は重ねて鋭く促すと、うずくまった二人の臀を蹴った。姉妹は、ぱったりと手をついてつんのめった。

はじらいと決意に顔を紅潮させて、同じ女生徒達の見守る鞭打ち台の前に立ったのは、これ以上無益に叱られて、一層の恥を晒したくなかったからである。

「女生徒を懲罰にかけているのです。あれも教育の一課程なのです。あおして、服従と奉仕の精神を身につけながら被虐に目覚めさせていくと、私共の必要な女の予備員数がたぐわえられていく。私共は、人間形成に教育とは最も大切なものだと考えていますが、御同感頂けることでしょうか？ 本来は幼稚園の

課程から短期大学の課程までも設けたいのですが、いずれ長老会議にお計りする時期をもちたいものと思います」

フレデリック大教司は、丁寧に老人に説明した。老人は足をとめないまま、真紅の垂帳に浮きだす女学生の影絵をすかしみて、うなずいた。

二人は続いて、女学生の連れ込まれたのは別の青銅の扉を開けて、青白いランプのともる回廊に入った。

その回廊は右に曲って、鉄格子の扉の前に出るようになっていた。そこは黒い垂帳がかかっていて、下の隙き間から、光線が洩れていた。扉の前に立つと、陰うつな冷えた空気の底に、かすかに甘い香りが匂った。明らかに女の匂いである。

鉄格子は内側から開けられて、赤い広襟をとった黒服のキャサリン尼僧が、二人を迎えた。

「冴田長老をお連れした」

「拝見するよ」

「ようこそ」

キャサリン尼は、彫りの深い美しい顔を伏せた。これが、フレデリック大教司の情婦で、誘拐した女を冷酷に処理する残忍な心の持ち

主だとは、おくびにも現わさない優雅な淑女やかさである。

「どうぞ、こちらへ」

と彼女はデリケートな身振りで、半開らきになった木の扉の奥を指し示した。

総面、鏡張りの間である。間接照明が柔らかな明りを漂わせ、薄い透き通る紗の垂帳がたれこめて区切る室内に、甘美な匂いは、豊醇に陶酔的にたちこめている。

青い紗の幕の中には、一羽の美しい女が、細そりした足首を、床にはめこまれた鉄環に絞められて、仰向けに倒れていた。

楚々とした風情の女だった。色白の細面で、眉が濃く眼もとが涼しい。ファッションモデルの入江美沙である。形のよい唇には、痛々しさをそそる金属のクツワが噛ませてある。

床と鉄環の間にはゆるみが全然ないので、仰臥したまま、上体を起すことはできても、寝返り一つうつことはできないだろう。

美沙は、突然現われた白い僧服の僧侶と不気味な隻眼の老人を認めると、おびえた視線を黒い眸に走らせた。

「息が細いようだな」

といったのは、フレデリック大教司の声である。

「今夜の、特別夕拝の生贄に、と思いますけれど」

とキャサリン尼はつつましく答えた。

もったも、生贄といっても、投げ矢の儀式的にはされるが、殺されるわけではない。

冴田老人は冷淡な視線であった。

その向うの緋色の紗の幕の中には、これは匍匐の恰好で、手足を床の鉄環に囚われた女がいた。重山佳子だ。四肢を突張ったままの伏臥の姿勢を長時間続けているために、すでに息は荒くあえぎ、虚脱した頭はがっくりと垂れて、苦汁の汗がにじみでている。

「如何でしょう。これは踊り子でございました」

「いずれね、あなたによく信仰心を教えこんでもらってからだ。老人になってくると仕込む手間がわずらわしいものですよ」

冴田老人は、キャサリン尼に答えた。

「これが、ステイワーデスだったという女だね」

フレデリック大教司は、次の金色の紗の幕に入って訊ねた。

「はい。マリアン・レーンです。14ニグロの血が混じっています」

キャサリン尼はいささかのよどみもな

い口調で説明した。

エア・ワールドのステイワーデスだったその女は、両腕の上に吊られて、蒼白な額に汗を光らせていた。

老人の手が、つと上った。その武骨な太い指は、彼女の形のよい鼻をつまむと、不意に餅でも千切るようにねじりあげた。女はかすかに顔をそむけようと虚しく抗^{あら}がったが、その抗がいは、いっそう彼女の苦痛を鋭くしただけだ。クツワを噛まされた唇から息が苦しげに吐きだされて、鋭い激痛に、目尻に涙がにじんだ。

「う、う……」

と声が咽の奥を叩いて、顔をそらそうにもそらせない彼女の柔軟な体が、悶えるように

足踏みをして、蠕動した。むっと息をつめた女の顔が赤くなつて、悲しげな双眸の視線が宙に泳いだ。

隻眼の老人は、その声の音質を聞きわけけるように耳をすませ、微妙な蠕動ぶりに鋭い一瞥をくれた。

だが、忽ち老人の手は下りて、一足さがった老人の眼差しも、一沫の睡む気を浮かべた冷淡なものに戻った。

フレデリック大教司は、その老人の動作に満足した笑みを洩らした。

その瞬間、ぱしっとキャサリン尼が、その女に突然鋭い平手打ちを加えたのは、なぜだったのか。ステイワーデスの体がゆらりと弾けて揺れた途端、いっそ凄艶な程の美しさが



キャサリン尼の表情に訝えかえった。

……秋のツルべ落しの早い夕陽が落ちた頃、火殿礼拝堂では、特別夕拝の儀式がとりおこなわれていった。祈禱式は、世のあらゆる聖なる神々を片端から罵倒するフレデリック司祭の悪魔的な呪詛の祈りから始まる。

礼拝につどっているのは、二十数人の男の信者達と、ほぼ同数の連れの女達である。特別礼拝の秘儀の正式な信者となるのは、男に限られているが、女達の中にはこの礼拝の奇怪な風の吹きすさぶ陶酔境に魅せられた女も、わけも知らずに男に連れてこられた、初めての女もいる。

男達は老若混然だが、連れてこられた女達は、いずれも、若い女ばかりだ。しかし、男女とも、黄色人もいれば白人も褐色のものもいる。ほかに、司祭を勤めるフレデリック大祭司と儀式の介添役の四人の屈強な僧侶、教会に囚えられて、移動人間燭台に狩り出された女達十余人が、参列者のすべてだ。

祭壇を閉じていた真紅の垂帳は、一杯に押



し開けられて、フレデリック司祭は、声高らかに呪いの祈りを唱えていた。その司祭の囀りを、人間燭台にされた薄物をまとう女達は全員、左手に火の灯った太いロウソクを捧げ持ち、右手に持った鞭でそれぞれ自分の前を

ゆく女を叩き、自分もまた後の女に叩かれながら、ぐるぐると廻っていた。魂を惑乱させる熱っぽい原始的な単調極まりない音楽が、執拗に鳴り続ける礼拝堂の中に、狂的な司祭の祈禱の聲が響き、鞭音が熱を帯びて突き抜

けた。

鞭打たれて泣きべそをかきながら鞭をふっている女もいれば、ぎこちない鞭さばきの女も、諦めの冷めたい鞭をふるう女もいる。そして女達の鞭が一閃するたびに、互いの捧げ持ったロウソクの灯は妖しく揺れて、奇怪な壁画のある礼拝堂の、黒色と見まがう深紅色の祭壇と、祭壇の正面に安置された巨大な半獣神の神像を照らしだした。

フレデリック司祭の祈りは次第に昂調して初めは膝まずいていた巨軀は、いつの間にか仁王立ちに立ち上っていた。奇怪な幻惑に次第に酔い痴れて、熱っぽい空気をたちのぼらせる信者達の間からは、女の押し殺した悲鳴や囁やかな声が、細くあがりはじめていた。男達は悪魔の祈りにききいりながら、早くもおののかたわらに連れている女を、つねり、叩き、虐めだしていたのだ。

フレデリック司祭は、精悍な勢いをつけて突然声を切った。

呪詛の祈禱は終わったのだ。

司祭の右手が大きく円を画いて、縛られた五人の女のブロンズが支える金色の香炉に、香を投じた。異様な鼻孔をさす媚薬の匂いのする煙がたちのぼった。介添えの僧侶達が、

それを合図に、祭壇の両端に設置された、二基の洗礼槽の据盤に火を点じた。

据盤からは蒼白いガスの炎が噴きあがって高さ二メートル余の総ガラスの円筒型の水槽がくつきりと浮かび出た。水を満たした総ガラスの水槽の中に、軽くなった重心に頼りなげに揺れて、水藻のように髪を漂わせた女が、首までとっぷりとつけられた白い熱帯魚のようになり、蒼い炎にあぶり出される。片方が重山佳子で、一方がマリアン・レーンだ。フレデリック大教司は、信者達の方に向きを変えた。

その鋭い双眸は燃えていた。その脂ぎった顔は、不気味に皺だった彫りを深くして、てらてらとはの暗い明りに光っている。

大教司は信者達を見廻して告げた。

「御覧の通り、今夕は洗礼を授ける女達がい

ます。御要望があれば……」

と大教司の声は太く響いた。

「敬愛する兄弟達の女の中から、特に二名を選んで、洗礼の同伴者をお受けいたしたいと思う」

人間燭台の女達は、ようやく鞭をおさめえてはっとしながら、祭壇の中央にある、大きな舟型の寝台のような黒布で蔽われた聖台の

周囲に、膝を折ってうずくまった。

この司祭の言葉の終らぬうち

「ここにいます」

と、待ち受けていたかのように信者の中から声がかかった。

「私の女も、お願いしたい」

と続いて何人かが叫んだ。

祭壇の前に選ばれて追いだされたのは、裾の割れた豪華な支那服の女と、白磁色の清楚なカクテルドレスを着た若い女である。支那服の女は、どこか暗い翳のある面ざしの、三十才くらいの女で、カクテルドレスの女は、まだ二十才に手のとどいたばかりというところだ。どちらも、この儀式には初めて見る顔であった。

さっと駆け寄った介添えの僧侶達が、あっという間に、二人の選ばれた哀れな同伴者を捕える。年若い女達は、恐怖の驚愕をあらわにして、おどおどと抗がいながら逃げようと、泣き声をあげた。

その報いは、屈強の僧侶の腕のしたたかな平手打であった。

彼女はぶざまに床に匍匐した。支那服の女は如何に仕込まれていたのか、その黒曜の眸をかすかにとまどわせたが、無抵抗であった。

フレデリック司祭は、二人の女の髪をむす
と驚嘆みにすると、ひきずりあげようと、自
分の両側に引きつけて立たせた。

「この二人の女は、我々の洗礼を授けるに足
る美をそなえていますか？」

と司祭は信者達に、儀式にのっとった問い
を發した。

髪を掴みあげられている二人の女の眼は、
ともに痛々しくつりあがって、白い咽頭がひ
くひくと蠕動して、含羞のこわばりに貫ぬか
れた四肢の中で、豊かな胸があえいだ。

「前歴の如何は問わない。我々の教義は、美
を最高の罪惡と教えています。美しい女は、
その罪を、おのれのすべてを投じて償わねば
ならない宿命の所有者であります。我々信者
は、その女の罪を我々の坩堝に投じ、焼き尽
し、贖罪させる義務を負っている。この女共
は、贖罪のための洗礼を授けるにふさわしい
罪をこの容姿にそなえていますか？ とくと
御覽いただきたい」

抑揚のない声は、型式だけの問いであるこ
とを示している。だが、その言葉は、美しい
女を恐怖で凍らせ、肺腑を刺して烈しい動悸
を波立たせる内容をもっていた。信者達は、
どよめきと露骨な言葉を浴せて、二人選ばれ

た不幸な女の美貌の罪を肯定した。司祭は頷
いた。

「乞い願わくば、我らの神よ、この女にその
罪を償わしめ給え」

司祭は声とともに、二人の女を、荒々しく
左右に突きとばした。

よろめいた二人は、がっくりと介添僧の手
に捉われると、そのまま祭壇脇の踏み台にひ
きあげられて、抗がらうのをかまわず、それ
ぞれマリアンと佳子の入っている水槽に投入
された。狭い総ガラスの水槽である。水量は
変らない。が、一人づつ増えたことで必然的
に水面は顔より高くなった。

女達はしたたかに水を吞んで、なまめかし
く哀れなものがきに冷えた体をくねらせ、嬌や
かな腕に力をこめて、互いに必死に顔をだそ
うと、美しいだけにみじめさをさそう争いの
踊りを踊った。

「聖餐会に移ります」

と司祭の声がたからかに告げた。

信者達は——つまり男達は、その声に応じ
て、連れの女達を放ったらかしにして、むく
むくと体を立てると礼拝堂の壁際にしつらえ
られた長いテーブルの黒布の蔽いを取り、並
んだ銀の食器に盛り上げられた喰い物をつま

んだり、グラスに芳醇な酒をついで饗宴にか
かった。

つかつかと祭壇にあがったフレデリック司
祭も、舟型の聖台の黒布をはいだ。しかしこ
ちらから現われたのは、今夜の生贄とさだめ
られた入江美沙である。彼女は両足首だけを
縛られた体を、ながながと豪華な寝台のよう
な聖台に仰臥していた。

司祭は粗暴な動作で、がっきとその細いう
なじを掴むと、ぐいと顔を持ち上げて、傍らの
僧侶が銀盃に捧げて差出した銀盃をとった。
薄茶色の異様な臭いのする液体が、なみなみ
とつがれている。僧侶が盆を置いて、彼女の
鼻をつまんだ。彼女の清楚な唇がひらいて司
祭はそこへ銀盃を傾けた。

無理に流し込まれる臭気の強い苦がい液体
に、彼女は眉をひそめ、齒を喰いしばった。
たらたらと唇をこぼれる液体は、憔悴の弱を
刷いた頬にたれ、薄い緋色の蟬の翅のような
衣裳を濡らした。

銀盃を空にした彼女は、俯伏せにひっくり
かえされて、足首の緊縛を解かれた。屈辱と
悲哀と苦悩を包みこんだ清楚な肢体は、緋色
の布地に透けて、紅を浮き出した白バラの
ようである。聖台の囲りにうずくまっていた

人間燭台の女達が立ち上って、その集中した明りは、司祭の手にした、生贄を潔める洗滌器を眩ゆく光らせた。四人の女が、さすがに抗がいをもせてもがく美沙の手足を押さえつけた。

凡そ十分後、フレデリック司祭の喰い入るような凝視を注がれて、美沙は苦しげにあえぎ、体をひくつかせ、遂に大きく背を波うたせて、ぐったりと伸びきった。

それから彼女は、その髪に聖水をそそがれると、人間燭台の女二人に抱きかかえられるようにして、聖台の上に立った。

容姿を人眼に晒すことには慣れていたファツションモデルだ。水着のショウでは、半裸となったこともある。だが、かつて華やかな七彩のライトを浴びて、ニューデザインのモードをびったりと着こなした肢体は、ここでは異常な礼拝堂の異様なざわめきの中に立たされて、よこしまな視線にこねまわされる生贄となっていた。

「ごめんなさいね、しっかりして」

と美沙を苦境に晒す役目を負わせられた両脇の女が囁いた。

その声を耳にとめると美沙は、がっくりと観念の眸を閉じてうなだれていた顔に、かす

かな表情を泳がせた。不幸に堪えている女の静かな悲しみの微笑である。

かえって、哀れな生贄よりもびくびくしていたのは、そういった女達の方であった。信者がシャンペンを抜いた音に、びくっと怯えたのを笑止とみた僧があった。

「我が神は讃むべきかな！ 熱情の祝宴に我らをいざなう神を讃えん！」

風をまく叫びとともに、生贄に第一の投矢を刺したのは、フレデリック司祭であった。

「我らの神を讃えん」

「我を陶醉の境にいざなえ！」

男達は手に手に投矢をとると、次々と喚声をあげながら、生贄を目がけて投げつけた。聖台に身を晒す美女に、いたるところから、いっせいに細い投矢が殺倒しかかった。

がっくりとうなだれていた美女は、身をのけぞらせて呻吟しはじめた。軽い矢の先端の細い金属の部分が、するどい痛みとともに突き刺さるのだ。

生贄に命中すると、矢の軸は落ちて、色鮮やかな飾りのついた針だけが、その体に残った。的はずれた矢は、介添えに立つ囚われの二人の女にも刺さった。聖台の女達は呻いてしきりに身をよじった。

生贄の蒼白な額に、みるみる汗の露がにじみだし、腋の下からたらたらと冷汗が流れ落ちた。

いたましい美女の容姿は次第に増える針の花に飾られ、手足が痺れて、はげしい眩暈に襲われたように体がぐらりと揺れ、嫋々たる悲鳴が空気を貫ぬいて、凄愴なまでの風をかきたてた。

「……女の罪をあばいて、限りある生命を我が神に捧げるのだ。さあ、兄弟達よ」

潮が高鳴るように燃え上る狂宴の中で、司祭は、跳びかかるようにして祈りの声をはり上げていた。

——なにごとくも、なんびとも、うかつに信じてはいけない。信じられるものはなにもない。

火殿の礼拝堂のなかで執り行われている凄惨な儀式も知らぬげに、アグレリアス寺院のある一劃は、夜景に落ちて華やかに騒がしさを増す大都会の中で、ここだけは、ひっそりと夜の静寂に蔽い込まれて、如何にも宗教的な沈黙をたたえていた。



手記

綿ネルの素肌に対する感触

山本 早苗 (西宮)

私は先達って、「私の好きなネル」を投稿した者です。私は二十才になる青年ですが、生来気が小さいので女友達もなく、味のない生活を送っています。これを忘れさせてくれるのは、唯一つ綿ネル、それも上質の起毛の多いヤワラカな綿ネル（桃色の無地のもの）をおこしに仕立て、夜寝るとき素肌にまとうことです。

今では、すっかり完全なおこしフェチシストになってしまいました。このような異常者は私だけだと思っておりました所、奇巧を見るにつけ、二、三の先輩がいるの

が分り俄然たのしくなりました。私は一度でよいから、一遍女の人が素肌にまとうた桃色綿ネルのおこしをさわって見たり、それをまとうてみたいと思っています。

今日では遊廊等は皆無ですし、又和服の女性も次第に少くなる現状です。残念です。里乃糸様などは赤線の水の人から、おこしを分けてもらったそうで、まことにうらやましいかぎりです。又、私は洋装の女性には全然興味がありません。

私の興味の持てる又好感のいける女性には、常に和服を着用して

おられ、しかも下着であるおこしは桃色の綿ネル製のものを着用していられる方にかぎります。編集部の皆様、女性の読者の中で、このような方がおられましたら、ぜひごしうかいして下さい。

里乃糸様は今日では呉服屋に無地の桃色ネル等は売ってないよう述べていられますが、そのようなことはないと思います。現に私は近鉄百貨店で白いネルを三米と桃色綿ネルおこし二枚を三月二十一日に買いました。しかし里乃糸様のおっしゃる真のトキ色のは見当りませんでした。

それから、この百貨店の前の橋断歩道の所は、大阪市内のどこよりも和服の女性を通るように思います。又、風などが吹いて裾がめくれると必ずといってよいくらいチャット「ネル」が見られます。

私は昨年二月頃など、十九才ぐらいの娘さんが和服を着てそこを渡るのを見ていましたが、風が吹いて着物の裾がめくれました。そのとき四、五人の娘さんがおりました。その中の二人は本当にやわらかそうな桃色ネルのおこしを素肌にまとうているのが、よくわかりました。

このように若い女の人でも、少

しはネルのおこしの好きな人がいるのではないのでしょうか。又、和裁の本を見ると和服の下着には、ネルなど用いないように記載されていますが、中年の御婦人、仲居さん等はネルのおこしをしている方が多いのは何故でしょうか。又私の近くの若奥さんもネルのおこしをしています。

これは私の考えですが、女の人でも、あの綿ネルのなんともいえない肌ざわりに興味があるのではないのでしょうか。又綿ネルは洗濯をすると、その感触が半減するようになっていますが、この感触の減少を防ぐ洗濯方法はありませんか。又女の人で特にネルの好きな人、或は御自分のなさったネルのおこしを分けていただける方はありませんか。

里乃糸様、お元気で暮らして下さい。誌上で意見をかわしましょう。

編集部へのお願い

一、モデル嬢には出来るだけネルのお腰をまどわせて下さい。又そのお腰の誌上販売を願う。
二、おこしに関する特集をお出し願う。
三、一度モデル嬢のネルのおこし着用姿を見せていただきたい。



正春

女相撲思い出話

津谷正春

文と絵

第一話

女相撲のかくれたフアンは、今も、なかなか随分あると思われるが、これの興行はなくなってしまったようだ。私もなんとなく女相撲に興味を抱く一人であるので、実際に今までに見物した思い出を書いてみることにした。

私が初めて見物したのは昭和二年の事で、東海道線が箱根の北を廻っていた頃、所謂箱根七つトンネルにさしかかる處に小山という駅があった。山間の街ではあるが紡績会社のある處で、町の芝居小屋に女相撲がかかった。私は下宿屋の主人と見物に出かけた。芝居小屋の見物席をかたづけて中央に土俵を築き、周りにムシロが敷いてあった。

丸太を立てた四本柱の上に電灯が三つ点いていた。ハッピを着た女が呼び出し役で土俵へ上って「関取衆土俵へ上らっしゃい」と呼ぶと行司が続いて、これ又ハッピを着た二人の女力士が舞台の横から出て来た。

そして東西に分れハッピを脱いで土俵に上り型通り水をつけたり

塩を撒いたり、チリを切ったりして仕切って取組んだ。前で合せるように作ったシャツに白いサルマタをはいた上から褌をしめ込んでいた。髪こそ角力髷に結んでいたが、まことに色気のない女力士の姿であった。見物の中からもシャツ脱げとか、サルマタ取れとかのヤジがとんでいた。

十数番の取組みがあった。その中で中年同志の取組みで一人が相手をノド輪で押し立て土俵際へ追いつめて押し倒さんとした。追いつめられた女は、左手でノド輪の手を外そうとして体を弓なりに反らしてもがいたが、相手が容赦もなく咽喉に爪を立てるようにして押し立てるのに耐え切れず、相手の髪をひっ掴みながら重なり合って仰向けに土俵の外へぶっ倒れた。勝った女は直ぐに立ち上ったが押し倒された女は仲々立たなかった。やがて立つと両手で顔を蔽うて楽屋の方へ入って行ったが、私には泣いていたように見えた。恋のサヤ当てか、それとも仲の悪い二人か、ともかく髪をふり乱し歯を喰いしはってノド輪を外そうとして眼を見開いた女の形相が未だに見えるようだ。

△手記▽

女子寮の争い

高木紀久枝

初めておたより差上げてよろしいでしょうか。私は或る会社の製作工場で働いている満十八才の女子工員ですが、ふとしたことから昨年の八月号に載っていた三隅千恵子さんの「女学生を組織せよ」を読んできて以来、すっかりその魅力にとりつかれ、千恵子さんの真似をすることに無上の喜びを感じるようになりました。

私達は五十人程一緒に会社の女子寮で生活していますが、特別な監督者もなく自由なものですから若い女ばかりの無遠慮さから、随分お茶目なおてんばぶりを発揮することが珍しくありません。殊に休日の前の晩などは、仕事から開放されて歌ったり踊ったり、跳ね回ったり、はては冗談まじりにふざけ合ってキヤキヤワーワーと大変なさわぎなのです。時にはふざけ合いがこうじて、逃げるのを追い廻してのランニング。あまり広くもないお部屋でバタバタとまるで運動会さながら、やっと思いがつて、とらえたと思ったら今度は女同志の、お相撲に早がわ

り。一人が他愛もなく投げ転がされて終る場合もありますが、念の入った際には、ドゥーと折り重なって転がったまま、ドタンバタンと、上になり下になりしながら、白い脚を太もものあたりにまであらわにして、あられもない寝技を見せることさえあるのです。

二人の力量にあまり差がなければ、勝負なしの引き分けに終りますが、かなりの差がある場合は、力まさらの方が非力な者を組み伏せて馬乗りになり「さあどうだ、降参か」と、ぐいぐい押えつけている光景を何度も見ました。

皆がそんなですから、生来お茶目とおてんばでは、あまり人にひけをとらない私が、大人しくしていられるはずはありません。どちらかといえば、自分から進んで友人同志ふざけ合いもしますし、場合によっては、冗談まじりのお相撲や取っ組み合いに、女の身も忘れて興じる方かも知れません。そんな頃、誰が持ってきたのか知りませんが、三隅千恵子さんの「女学生を組織せよ」を数人で読み合

って、皆、眼を丸くしました。

「ワーツ、私等も勝負せよ」「あら、女の押え込みって、こうするのよ」「まあ、すごいじゃない顔を脚にはさむのね」「いや、私も真似してみよう」と、勝手気ままに気炎を上げています。女同志取っ組み合って、馬乗りになったことはあっても、千恵子さんのように、首の上にとっしり跨って相手の顔をあらわな太ももの間にはさみ込んだ経験者は誰も居ません。まして、組み敷いた女の顔の上へ、べったりお尻をのせて、まともに跨るなどは、私等の夢にも思い及ばないことでした。

それから間もなく、私等の女子寮では、誰からともなく、三隅千恵子さんの真似をして、女が女を組み敷いたら、首の上に跨がるのが流行し始めました。私も初めて友人の一人が誰かに組み敷かれ頬を太股でぎゅうとはさまれている光景を目撃した時には、あまりのことによろこびました。あれが二度三度と見なれていくうちに、それ程にも感じなくなりました。勿論、私も千恵子さんの真似をしてみました。私等の女子寮には中学を卒業したばかりの少女が何人も居りますから、あまり強そう

でない若い子をふざけ合うと見せかけて、捻じり倒し、うむを云わせず組み敷いてから早速押え込みに移りました。此の時は私も大分とりのぼせて夢中でしたから、どんなことをしたのか、はっきりとは覚えていない位でしたが、一度やってみれば、二度目からは一層楽でした。

中でも絹子と云う、とても可愛い顔立ちをした細がらの若い子がいいますが、私は彼女を組み敷くのが大好きですから、何かにかこつけて誘って来ることにしています。絹子は私に組み敷かれるのはあまり好きではないのでしよう。口実をつけて私を避けようとして居るらしいのですが、女子寮に一緒に居ては逃げることも出来ず、三度に一度は、私につかまって獲物にされるのです。私は絹子を組み敷いて首の上に跨ったことが、今までに都合五度あります。

私等の女子寮にも、中にはお淑やかで、そんなはしたないことを好まない者も居ないではありません。それでも皆つり込まれることもあり、又、お茶目なおてんばの中には、態と意地悪く大人しい娘を無理にふざけ合いに誘い込んでいじめめる場合が多いものです。からお淑やかな子はたまりかねて、女子寮を出ることもあります。

四月号の読後感

近 藤



四月号グラビヤの美しい吊り責め、後手吊りの変化が適確に把握されていて特筆すべき作品です。背景もよく、しっかりと細目を締め上げられている悠紀子嬢の長縄絆姿とマッチして、痛々しい美女の被虐を盛上らせています。悠紀子嬢の「足枷とくさり」の可憐さも愉しく、我々が妖しくアタセサリにしか感じられませんか。「緊縛フォト撮影の実際」でも後手と首縄のテーマで匂うような演

技を見せて下さった彼女の健斗は嬉しい限りです。絹川嬢、大塚嬢はそれぞれ特色發揮の實力者ぶりを示し、殊に絹川嬢の妖艶ぶりは今後の期待を大くします。「風流いろは歌留多」はここ暫らく見られなかった丁寧な出来ばえでした。記事の充実ぶりは予期しなかった程で、最近数号の中で特に極立っています。私自身の好みも影響

するでしょうが、しかし、表紙の色彩からして、前号や前々号と違いうムードがあります。

「宇宙のどこかで」と「奇譚三十九夜物語」の連載が単なる号を逐う作品としてでなく、奇巧の長篇の双壁として、毎回新しいアイデアによる感激を覚えさせて下さる作者の筆力の賜である現状は心優しい限りです。

四月号の特別記事は羽村京子さんの「あるラブレター」と辻村隆氏の「クリスティーと讃歌」だと私は思います。その嗜好は、人により異なるでしょうが、私が惹かれたのは、この誌上の応待が、お二人のもどかしい心から出た求め合いだからだと思ふのです。只、羽村さんが、私の「川端多奈子を想う」という文章を幾分ドンファン的な口説き方とおっしゃったことは、予期しなかった批評だけにびっくりさせられたものです。

中村良子さんの愛蔵記「鼻と紐と私」は鼻責めマニヤでなくとも以後の展開が知りたいところでしょうが、ヒロインの物の考え方に関心があり、心理的経過を描いて欲しいと思います。

西田仁氏の「落葉の墓」は単にMの作品というだけでなく、文章

構成の起承転結の巧みさは、思わず息が込まれる想いがしました。淡々とした綴りが却って人間像を鮮烈に浮上らせるものです。

藤村陵子さんの切腹体験記は貴重なレポートであり、ショックングな目撃の極致の端的な描写として迫力を持っています。

楠佐和子さんの「平家部落」は興味深い設定で、挿絵も佳かったです。肝心のお仕置の描写が弱く、意余って言葉足らぬ記述に終ったことは惜しまれます。後半が充実すれば、桂牧次郎氏に似たムードを醸して下さったでしょう……。

「華々しき報復」(古沢五一氏)も面白い作品です。思いきりのいいイメージでありながら、実現可能と思わせますし、マゾ、洗脳、女装を盛込んだ責めのプレイだけに楽しく拝見しました。

「精神病院の檻」(鮎川和男氏)も短い文章の中に要を得たまとめ方で、かつて都立の某精神病院を限なく参観したことのある私の共感する所も多かったのです。

「鏡のある生活」(水口晴子氏)は四月号の収穫の一つだと思います。これだけ冷静に、深刻に自己をみつめる筆者を私は極めて魅力

的な女性と考えます。信太答子さん以来の自虐と露出に憑かれたマニヤと云いたいのですが、それでいて実生活が健康そうなのは、得難い女性と云うべきでしょう。

小田奈美夫氏の女装プレイ、長井須雄氏のウイスキー浣腸をはじめ、奇クサロン所掲の種々の嗜好の面白さは、私の好奇心を満たしてくれるのです。思いがけずサロンに東浦ひかる嬢の通信が載りました。性格的には余り知るところのなかった東浦嬢からの通信で感激しました。近々彼女に因するイメージを綴ってみたいと思います。サロン所掲の相川嬢のフオトは見事でした。

読者通信欄の拡充も、それが奇クの大きな特色の一つであるだけに嬉しいことで、中でも咲本栄子さん、河井ルリさん、長田妙子さん、村井やす子さん、里野糸枝さん、上原アキ子さんという方々の初めての投稿は明るい希望を生むものでした。

奇クが有害出版物であることの反論はともかくとして、現実の制約は無視できません。目録は当然の結果でしょうが、その中から四月号のような躍進が見られたのは大きな喜びでした。それだけに編集部各位の御苦労も偲ばれます。どうか御自愛の上、今後ともよろしくお願い致します。

外国映画にみるS・Mシーン

江口紅雨



ドーン・アダムスという女優とそのヒロ役クロード・ブラッスール(B・B)の「何が何でも首ったけ」に出ていた男優」とが、狼ぐつわをはめられて後手で燐の柱を背おわきされて揺られる。かなり長い時間見られる。D・アダムスのバック・ヌードのロング・カットも正常な色気がある。

蒙古の嵐

一二三九一四年に露、独、ポーランドへ侵入した蒙古軍の残虐行為を主軸に恋とエロ・グロを枝づけたもの。ポーランド娘(アントネラ・ルアルディ役)が蒙古軍に捕えられ、両手首を別々に縛られて、吊り上げられるところがある。伊美人の典型と評判のあるA・ルアルディの苦痛にゆがんだ顔の表情はさぞかし見ものである。又、後半のそれも終り頃に、ジンギス汗の死体と一緒に火葬されるべくX型に組み合わされたハリツケ台に、数人の美女がはりつけにされる。もちろんA・ルアル

ディもはりつけにされている。後で主人公が助けにきて、ルアルディの縄を切る時には、たっぷりと彼女の苦痛にゆがんだ美しい表情が見られるだろう。

海賊旗を上げる

スチール写真では美女がマストに縛り上げられる。又、男性責めも見られる。

素晴らしい恋人たち

B・Bが魔女の烙印を捺されて首に縄をかけられて後手に縛られたまま川の中へ投げ込まれる。

女体地獄

題名からして全く刺戟的だ。一九六一年度ミス・アルゼンチンでミス・ユニバースに見事当選した世界的美女の大胆な肢体が拝める

又、ボスが労働者にリンチを加えたり、ボスの情婦(ミス・アルゼンチン役)が労働者に乱暴された後、全く刺戟的。嫌せめがあるかどうかは自分でもわからないので上読されてからのお楽しみ。

ローマの恋

M・ドモンジョが恋人に、なぐ、けるの乱暴をされた上、グロッキーになった所をベッドに投げ出されて犯されるシーンに期待。

(おしまい)

激しい夜

外国映画からサド・マゾに関する作品を収録してみた。上映期間が切れない中にこの記事が載せられることを希むが、たとえ第一週の上映期間が切れても、一、二週間すれば三本立五五円で見られますよ。

ガン作・マニヤのノート

＜私のバーでの会話＞



芳野眉美

A おしめの当て方

「浅草のK座のコントでね、ストリップバーにおしめを当てるのを見ましたよ」と私。

「ほう」

「もっとも、普通のパンティの上からですけどね。ツンパだけの裸より、スカートをめくっておしめを当てる方が魅力がありますね」

「見たかったな」とN。

「当てる真似だけだから、見ても物足りませんよ。もう一步、おむつカバーをさせれば、ゴキゲンだったのですけど」

「女の子たち、どんな気持ちだったかな」

「ステージで、きゃあきゃあ云っていましたが、やはり恥しいんでしょう」

B 「襠褌抄」に就いて

「お客にはやらせなかったの？」
「勇敢なのがいましてね、ステージに上ろうとしたら、ストリップバーたちのほうがあわてて楽屋に逃げちゃいましたよ」
「そうだろうね、そこまではさせないな」

「昨年十月号におむつカバーを着用したフォトがあったね」とN。
「今年の二月号にもありました」と私。

「そうそう、そのフォトを見ながら、三月号の『襠褌抄』を読んでいたら紀子夫人（だったかな）ホウフツとしてきちゃってね、妻にもおしめを当ててみたくなっちゃって困ったよ」

「で、奥様はどうでした？」

「だめ」

「簡単でさね」

「そう、いたって」

「ほくも好きですよ。ああいう、ほのぼのとした作品は——」

「おむつカバーのフォトは、やはりおしめを当てて、その上にカバーで包むという量感があってほしいな」

「その上に、水分の量感があつたら最高なんですよ」

「そりゃあね」
「カメラでは無理ですよ。奥様にお願いしなさい」
「そうしますか」

C 室内の干物

「これは男のマッサージ師に聞いた話なんですがね」と私。「あるキャバレーの女の子の、一人の部屋にあがってマッサージしているうちに、室内の乾物に気がついたんだそうですよ」
「男の下着でも混っていたかい」とN。

「いや、おしめが数枚乾してあったんですって」

「ほう」

「赤ちゃんもいないのに、変だなと思っていると、その手のほうで気がついて（お隣りのよ）」

「で——」

「残念ながら、お隣りは夫婦ものだけど、まだ赤ちゃんはいないんだそうです」

「その子がおむつマニヤだったって云うのかい」

「そんなシャレ言葉はマッサージさん御存知ないですよ。マッサージに行く度に注意していたら、月に一回乾してあることがわかった。それも室内に限って、外には

絶対に乾さないんだそうです。ゴムのむつカバーも見たことがある」

「推理小説だね」

「結論はね、その、メンスがね、あまり強いんでむつカバーをし

ているんじゃないか、という」
「そんなところかもしれない」
「メンスバンドのことはよく知らないけど、そんなにたよりないもんかね」

「どうだかね、個人差があるから」

SM対話

社長と女秘書

中野三郎

社長「節子さん、馬にして！」
女秘書「今日は、いくらくれるの？」

社長「五十万では？」

女秘書「いつも五十万じゃ、面白くないわ。どう、今日から百万にしない？」

社長「そう私の自由になる金が沢山あるわけじゃないか」
女秘書「株売ったら、どう？」

社長「節子さんにあげる為に、もう五百万からの株を売り上げましたよ」

女秘書「うふふ、あんたも随分私に入れあげたもんね、感心するわよ。でも会社の株、まだ一つも売ってないんじゃない？」

社長「あれは売れないよ、そんなことをしたら、自分の首を締めるようなもんだからな」

女秘書「どうしてさ、何も社長だからと云って、株を半分以上持っていないくちや、いけないこともないと思うわ」

社長「いや、もし私が会社の株を手放したら、専務や大株主の山本などが……」

女秘書「心配は御無用よ。あの二人は、すぐく仲が悪いのよ。組む筈ないわ」

社長「本当か？」

女秘書「本当よ。だから社長さんが持株の半分やそこら売ったって絶対大丈夫よ」

社長「分った。半分売るとしよう。これで、又しばらく節子さんと遊べるわ」

女秘書「節子さんの馬になれるって、はっきりおっしゃいよ。うふふ」

「メンスバンド雑考、という研究しませんか」

「関根さんの（むつカバー雑考）は貴重品だったね、妻が参考にしてたよ」

「（試作室レポート）なんかも」
「大きな赤ちゃんになりたくなるよ」

「同感」

D 口に捨てる

「入院しているガールフレンドを見舞に行ったんだけどね」とN博士。

「ガールフレンドですか」と私。
「そう。病名を聞かなくて、よかったよ」

「恥しいところなんですか」
「ほくのところとは関係ないわ」
「何ででしょうかね」

「ボーコーエン」
「ははあ」
「冷えと不潔からきたんだな」

「フケツですか？」
「彼女、風呂が嫌いでね」
「そうでしょうね」

「何がそうでしょうね、だ」
「いい人を見つけたものですね。下着も汚れたのを平気で着ているんでしょ」

「そうなんだ」

「パンティなんか、殊にね」

「俺が喜ぶものだから、いつまでも同じものを穿いているよ」
「病気になるよ、それじゃ」
「俺にも少し責任あるな」

「大いにありますね」
「そう言うなよ」
「お見舞品は、パンティじゃないでしょうね」

「あたた」
「やれやれ」
「ベッドの上で綿を小さくタンザク型にするのを手伝わされたよ」

「へえ」
「その一枚を、ひょいとパンティの下にはさんでね」
「むつカバーでも、あげればよかったのに」

「大人用の、なかなか売っていないんだ」
「残念そうだ」
「よせよ」

「綿をすぐとりかえるんでしょ」
「そうなんだ、少ししみ込んだやつをつまんでね、あなた好きなんでしょ、だってさ」

「どうしたの、それ？」
「あなたの口の中に捨てればいいわ、だって」
「やれやれ、大変なお見舞客だ」

告白

夏の昼の夢

橋本幹雄

夏の海は私にとって最高のものであり、私を心の底から喜ばしてくれます。泳ぎも楽しいのですが、それにも増して私を満足させてくれるものがあるからです。

仕事の終えた今日の土曜日も、お天気は上々です。海岸へ行くのに必要なものと云えば、水泳用の簡単なバイク一つだけです。近頃では海岸で見る男性の総てが水泳用のパンツをはいており、バイク姿が見当らなければ見当らない程私は私一人だけがバイク姿でいることに、はかり知れない魅力を感じるのである。

今日も軌道に乗りバスに乗り換え、色々空想にふけていたうち、目的地に着きました。停留所の前でフト思い出し、たった一軒だけある薬屋で、一寸薬を求め海岸へ急ぎました。この海岸は都会地周辺のように手を洗うような人出はなく、眼を楽ませてくれる程度に男性女性の姿が眼に入り本当に海を楽しむには絶好な海岸です。陽は中天高く輝いて午後の陽が

サンサンと照りつけております。私は早速衣類を脱ぎ始めました。上下のシャツを脱ぎ終るとブリーフだけになりました。ブリーフを脱ぐときには一寸ためらわずにはゆきませんでした。しかし、ちゅうちゅうしてはいけません。そう自分に言い聞かせ乍ら、ブリーフを押下げました。

腰の下を風が吹き抜けたと思うと、もう自分の体はバイクだけの姿になってしまいました。腰のあたりで融れてくる風が特に意識されてきます。なんだか周りの人達の視線が私をとりまいていっているように思えてなりません。しばらく休み、おもむろに準備運動をすると私の気分も少しづつ落着いてきました。

水に入り二十分位泳いで休み、又水に入っているうちに体が少し冷えたのか生理現象をもよおしてきました。直ぐ水から上り甲羅を干し体を温めることとして用を果さないようにしました。私は先程求めたねむり薬を人に目立たない

いようにしてのみました。

運動後の程良い疲れが感じられ私は砂の上に横たわりながら煙草に火をつけました。煙草の味が身に沁みてきます。しばらく空を眺めながら、くゆらせていると何となく眠くなってきました。

煙草を吸い終る前、私はその残り火でバイクの紐の結び目の無い方の側の紐を真横より少し下の方で切って見ました。紐は仰向けになっている紐の上から砂面の方へ静かにたれ下りました。他の結び目の方も、おもむろにほどいて見

私は 僕（しもべ）

ると、バイクは事実上、腹の上に三方向にかかっているだけのものとなりました。

昼頃の静かな丘からの和風は殆んどないで人影は程近くにち見え乍らも声は聞えず、平和そのもののようです。顔をタオルで拭くと私はいつしか夢路にさそわれてゆきました。大分運動したせいか、何度か寝返えりし、寝返えりする度に砂の熱さを夢の中で感じました。

午後も大分経過し風はいつの間にか海から南西風になり、沙の満

身如輪・生



まぞ川柳自註
わけ知り

西 田 仁

ちてくるのと同じように風も次第に強くなってきました。風が吹き始めてからは、しのぎ易くなり、すっかり熟睡してしまいました。突然の汽笛に私は夢を破られました。

眼を覚めますと近海航路の船がしんきろうのように沖を走っているのが眼に映りました。もう陽は大分西に傾いておられます。我に返った途端、私はびっくりしてしまいました。

それは先程まで体にかかっていた

た苦のものが全然ないではありませんか。

四方から、ひそひそと笑い声が聞えてくるように思えてなりません。

まわりを見まわすだけの心の余裕も今はありません。私はうつむいて、あわただしくシャツを着流して、そうそうにその場を立ち去りました。

私はこれ程迄に大胆ではない。もう少し控え目な形を予想して、その楽しみを期待していたのです

わけ知りの女史もこれには初対面

数年まえ、特殊女性の生態を描いてさる文学賞の候補となりデビューした女流作家が、あるマゾヒストを扱って娯楽誌に執筆。なんとも慌ただしいその口調から察するに、さては彼女も驚いたのかな。

さもあらんハズはM派で賢夫人
恐妻のもととはいえばデビュー作

ある化粧品会社がおこなっている新聞一頁の大広告には毎週名士夫人が十数名サイン入りで研を競う。文士の細君内職特集というのを蹴ったのは昭和の初めの私小説

が、事実自分自身がびっくりするような予想以上の結果となってしまったわけです。

しかし、自分では全く知らない間に、多くの人々の前に自分の体をさらけ出して、見る人の目に自由な角度から、完全に思う存分見られたと云うこと、その喜び、その満足感は何にもたとえる事が出来ませんでした。

私は夏以外には、しばしば陽当りの良い山での全身の日光浴を楽しんでおりますが、見られる喜びを

家。現代のマスコミを泳ぐご主人のほうにはアブ・ゴシップもかなりあるが、「これがあの先生の奥さんか」なんてニヤニヤするのはワルい趣味だろう。

乗りウマの目を抜くばかり

婦人記者

ねだられぬ乗りウマを買う

下ごころ

ビニールをシールで包んだ縫いぐるみのおもちゃ乗りウマは、ビニールより耐久力（圧力）が十倍も強いというからママが乗っても平気。1月30日付読売婦人欄で親切失礼な保証をしているが、こういう記事は婦人記者がいろいろ試

得られないのが、どうしても物足りません。

真夏の暑さも未だこれからであり、海辺へ行くことを考えては胸が高鳴るのを抑えることが出来ません。

終りにのぞみ、同好の方が居られましたら、何らかの形で名乗りを挙げて頂きたいと思ひます。文通ないしおつき合いしたいと思ひております。

（おわり）

駿してから書くのかな。

イガ栗がブルマーもぐる馬ッ飛び

私たちの子供の頃にも盛んだった馬飛びという荒っぽい遊びを同地の庭で男女中学生が。見物のマダム連「あたしたちは親に叱られるのでかくれてやりました」なるほどむかしの女学生がこんなお遊戯しているのはあまり見掛けなかったネ。

艶消しのくすり草買う美しさ

註を自失せり。謹んで羞じらい多きマニヤの諸姉に捧げよう。

△サロン通信▽

女装愛好家へ

石川県石川郡

林 田 二 郎

奇クに毎月出ている女装愛好の青年達よ、君達は女装をしたければ、美容師になればよい。

僕も小さい時（小学生）より女性的で友達に女ばかりだった。

歌舞伎の女形などにあこがれたりしたものだ。家人の留守のとき母親の着物を着て、鏡でうつしてみたりしたこともある。初め理髪師になるつもりで、理髪学校へ行った。卒業後、美容をならい美容師となった。

女装に興味のある男性は、女の髪型にもセンスを自然にとりいれて早く一人前になる。美容院にいれば、カズラはお手のもの。化粧もしかり、毎日女を見ての仕事だから女のことかすべて分る。

最近男の美容師が多くなってきた。外国（フランス、アメリカ）では昔から美容師は男である。商芸会や盆踊り、町の祝日など、女装するチャンスは、いくらでもある。世間にも大っぴらで女装出来るのである。

僕も盆踊りや演芸会、宴会には

いつもカズラをかぶり、舞妓、芸者などになり、やんやとほめられる。軍隊にいた時も、芸居で女形をやり一等になった。普通の会社なんかには勤めて居ては、女装は無理だ。

女装希望者にはマゾ的性格が多く、たくましい男性にいじめられたい可愛がられたい気持を多く持っているものである。僕も二十代の頃には、好ましい友人があるとよく喧嘩をした。僕はサド的でいつも相手をいじめる方だったが、これは戦争でマゾからサドに移り変ったのである。

今の時代にも、この事で悩んでいる多くの青年がいる。その人たちよ。美容院に弟子入りすべし。

僕の家にも十七才と二十才の男性が二名住んでいる。女装愛好にはもってこいの場所である。

マゾの男性は美容院に弟子入りして、先生に叱られながら技術を習うべし。そうすれば食あり住あり、女性を女王様と崇める性癖もかなえられてピッタリだ。



京町柳一郎個展

床の間の妖花

バーのマダム吟子は、パトロシ氏から、情夫をこしらえた疑いで、そんなに男が好きなら、

お前自身男になれと、裸にむかれ黒の褌までされた情ない恰好で床の間に引きすえられた。

先生は二十八才の色白の餅肌でポリウムのある女性である。希望者は名のりをあげれば僕が紹介してやる。但しM男性に限る。

女の奴隷になりたいマゾ男性は美容師がよい。女客に叱られ、女店主（先生）に叱られ、先輩の女美容師に叱られ、初めは洗濯、飯

飲み、掃除、技術の勉強と追いつかわれるのだから、M男性にはもってこいの仕事場だ。

なるべく、若くて美人の意地の悪い、ヒステリー気味の店主や先輩のいるところを選んだら、成功するだろう。

モデル嬢への御願

吊りへの憧れ

間島一夫



写真は大塚啓子嬢の緊縛ポーズ

梨花悠紀子嬢

最近の吊りの連作は素晴らしいの一語につきまします。これだけの作品はちょっと他では見られません。

その際立った美しさ。激しいブレイへの忍耐力の点でも、かつて現れたどのモデル嬢よりも勝れた最高のブレイヤーとして尊敬しております。

唯、吊りの際の少々厚ぼったい（モノクロームフォトの為か）感

じの長襦袢はなんとしても、折角美しい貴女の肢体をすっかり台なしにしたいです。願わくばショーツ一枚でのブレイを見せて頂けませんか。

それから次に、一度、逆さ大の字型に両の足を左右に大きく開いた吊りを見せて頂けないでしょうか。若し裸だったら肌に傷がついて無理だと云われるのなら、薄くすけて見えるナイロン・スリッパ

かネグリジエを利用願えれば、楽しく拝見させて頂けましょう。

大の字には両足を別々の方向に引き上げるのが一番ですが、或は足を長い棒の両端に結えて吊すのも興味があります。

その他には股間繩をかけて、これで吊したり、胴吊り、乳房を縛っての吊り、勿論胸へ回した縛りで結構です。片足吊り等は可能性はないでしょうか。

私の一番好きなモデル梨花悠紀子嬢への御礼の言葉と共に、私の願いを申し上げます。

大塚啓子様

貴女の美しくよく手入れのされた長い黒髪と、柔軟性に富んだ豊かな肢体とは、毎月のグラビヤを一層引き立ててくれます。

一度、その見事な長い髪を利用しての吊りを見せて頂けないでしょうか。そのままでも、人間の体は髪で吊るせるということですが事実、外国のサーカス等で髪で吊り下ったフォトを見ました。

と、いっても、いきなり実現も無理かと思しますので、先ず手足を結え、髪をそろえて一つに縛ってロープをつなぎ、体を風呂の中に首まで沈めて天井に滑車を取付けて少しずつ引き上げます。

水の浮力を利用して次第に吊り上げて行けば、極めて徐々に髪全体に力が加わり、安全に髪吊りが出来るのではないのでしょうか。いきなり引き上げて、髪が抜けたり負傷しては困ります故、このようにして、美しい髪吊りを実現して頂きたいと思います。

貴女の長い素晴らしい黒髪による髪吊りは、私の見果てぬ夢といつてよいでしょう。

私のアブ散歩

何でも書こう

北村 健 二



パンティイ

私は女性のパンティイに恋いこがねて、街を歩いている時でも物干しを見上げては、パンティイを鑑賞する。一番好きなのは、桃色の少し小さ目のパンティイで、それも相当使い古した物で、それが干してあると、一日に二回も三回もそこを往復して眺める。なんとかしてパンティイを手に入れたものだ。

モデル嬢の古くなったのを、高くついてもよいから、譲ってほしいものだ。

妊み女

裏の人妻が妊娠しているの、夏休みを幸いに、一夏中注視していた。彼女はいつも四時頃に腹帯をとり換えるのが日課だった。私はいつも、その頃になると裏の物置小屋に入り込んで、窓から

裏をのぞいてやる。裏の部屋とは二米ほどの奥行き、庭をへだてただけなので、手にとるように見える。

もちろん、こちらはカーテンのすき間から覗いているので、向うからは見える筈がない。彼女は先ず腹帯をとく、ぶっくりと突き出した蛙腹、その最前端にはお臍があぐらをかいている。産の前でそれをおしおしに撫ぜまわす。(八カ月乃至九カ月と見た)

撫ぜる毎にお腹がゆれて全く素敵だ。腹帯をゆっくり巻きおえると、今度はパンティイをはく番だ。まず左手を壁につけ体を交えたと右手でパンティイを持つ。脱いだ時に、くしゃくしゃになっていて、二、三回、パッパッとそれを振る。このシーンのくりかえしをこの夏休み中に三十回も見た。蛙腹パンティイだ!

KK誌に寄せる

夢と希望

「マニヤ特望の総グラビヤ、サド特集二〇〇円、全モデル出演写真一〇〇葉、写真鮮明。」
「妊み女、ひろ子嬢の豊腹。ひろちゃんの縛り。」
「モデル嬢愛用のパンティイの一

覧写真展覧。乞御期待!

四 梨花嬢の浣腸中の尻の表情。
田 浣腸器のほしい方は、どうぞ当社へご注文下さい。密封の上、個人名にて送りいたします。(薬局でとり寄せるのが恥しい方はすぐにどうぞ)

六 モデル嬢愛用のパンティイを市価の五割高で販売(これは絶対受けること間違いなし)

——この項に御賛成の方は「どしどし投稿し、この六項目の中で一つでも多く実現するように誌上運動を展開しようではないか、SM同好者諸君。

竹野ひろ子

ここ六年間にKK誌に現れたモデルの中で最上玉だ。ポリウムが豊かだし、乳房の型が最高にすてきだ。一月号の冒頭の「美しき緊縛」は題目の通り全く美しい。近年稀に見る清純さと気品あるお色気の漂う作品だ。芸術的作品といってもよい。

惜しむらくは、彼女のヌード縛りがすべてざらざらの紙上にのせられて、彼女の豊尻と豊かな乳房をグラビヤでくっきり表わしてほしい。



鼻はかわいい愛玩物

＜絹川文代の鼻いじめのポーズ＞

美しい顔の真中に、鎮座します鼻に無惨ないたぶりの触手が加えられる。

S 女の 事

男を責めたいなんて、なんと無礼な女だ。そんなやつこそ、私にまかせなさい。私とS女と両方ムチを持って、なぐり合ひ、きつとS女をノックダウンしてやるから

S女なんか全裸にして、逆さ吊りにして二分も放っておけば、Mになっちまうだろうよ。

M 男の 事

男の風上にも風下にも置けないやつ。この世から抹殺してやるか

ら、そう思え。

春日ルミについて

ルミを私に会わせて見たまえ、一日でM女にしてやるから。でっかい尻にいやというほど、ミミズを走らせてやりたい。

流 腸 妙 案

女性に流腸してみたいとばかり思っていた事から転じて、自分に流腸してみたくなった。

薬局でイチジク流腸を求めるのが恥しくてなかなか出来ない。或る日、鼻がつまって仕方がないので点鼻用ナール、噴霧式（中外製薬株式会社）を買ってきた。全部使ってしまった、くず箱に捨ててしまったあと、あれに流腸液をつめてみたらどうだろうと思いついて、早速、くず箱をさがさ。容器に少しでもすき間があると露になって出てくるので、一回目は失敗、二回目は一杯ぎりぎりに入れてやってみると、全くすこいこれで流腸のだいご味は十分に味わえる。

一度読者諸氏諸嬢も試みられてはいかがですか。（但し私は中外製薬の社員ではありません）

◆アブストラクト◆

○男性の禪が好きだからといって別にどうということはないが、大の男が、女装するのが好きだと聞けば、ちょっと奇異に感ずる。

○しかし、女装といっても紅頭の美少年がするのだったら、いささか食指も動こうというものだが、女形という年輩者には、歌舞伎においてさえクロテスクだ。

○女の鼻の穴が魅力的だといったって、足にセックスアップビルを感じても趣味の問題だから、別にどうということはない。

○あのゴムのヌメヌメした感触の好きな人は、それがオシメであるうとメンスパンドであろうと、それはその人の勝手である。

○まして女の縛りが好きだと公言したからって、排泄物に興味を持つと言うのと同様、その人の正直さを表わす以外の何物でもない。

○会社で威張っている社長が宴会で芸者の馬になったからって、驚くには当たらない。マンガによくつかわれる題材である。

○世にある無生物もあらゆる有機物も、我々万物の霊長さまには、悉く奉仕してくれるのである。あたかも降りそそぐ春光の如くに。

感想

竹野ひろ子さんへの私感

南方佳男

モデルでないモデル——

こない方はないかも知れないが、彼女の支配人（不適当な言葉で御免なさい）辻村隆氏に聞いても、おそらく彼女は「モデルではない」とおっしゃるだろう。そのくせ誌面では、ちゃんとモデル並みに撮ってあるのだから、やっぱり私は竹野ひろ子さんをモデルと呼びたい。これからの文章が書きにくいからだ。悪しからず。

美しい人である。
三十才代の男性が好むタイプである。

美しさとは美貌ばかりではなく女性らしい整った肢体の描いてくれるラインの共通した意味である。マスクについては、表情の乏しさなど——と、ついケチがついたくなる私の弥次馬根性がでないうちに過ぎかっただけで、肢線美に

ついて私感を述べたい。

私の理想とするモデル・スタイル——といたいののは、これからのべる幾つかの条件で御了解を願えると思うが、その前に、その真の美しさを確かめ得たのは、五月号の「私のよろこび」を拝見したときである。

奇巧のモデルは美しい人ばかりである。しかしあえていうなら、一長一短がある。たとえば、絹川文代さんは乳房と体の厚味に、大塚啓子さんは上背に関連して総合的なバランスに、梨花悠紀子さんは発育過程で完全な柔軟性に、とまず三大スター・モデルにさえ、注文をつければつけ得るものである。

ところが竹野ひろ子さんの場合はこれら前記三人の短所をことごとく、補っている人だといえる。一寸みた感じは、愛川悦子さん



京町柳一郎個展 樹海の怪

怪なお暗い樹海の中……。傷ついた怪鳥のようなうめき声にふと見れば、あわれ妙齡の美女が、鎖ぐつわをかまされ、片足吊りの奇妙な姿で樹木の間に挟まれていた。

に似た体つきだが、愛川さんにくらべて、体に疲れがない。モデルでないモデル故かも知れない。

とくに乳房と胸を中心とした腹部の肉味が素晴らしい。

野球でいえば稲尾級の大エースである。プロ野球にエースも多いが、稲尾が何故大投手かという

彼は、ベスト球がない。百点をもたえる武器はないが、そのかわりすべての球が八十五点―九十点の力をもっている。百点の力の球が使えないときの他の投手は七十点や五十点の球をポンポン打たれるが、稲尾は一つの八十五点の球が調子悪ければ、他の九十点の球を



使うし、それも悪ければまた別の八十七点の球が使える。ようするに完全無欠ではないが、ほぼ完全な状況が幾段階も多彩にそなわっているということだ。

余談だったが、竹野ひろ予さんにもこれと同じようなことがい

いう扱いをしても、まんべんに美しい。とくくな人である。

名伯楽の辻村氏は、さきに梨花嬢を、こんどは竹野さんを発掘、飼育している。うらやましい限りである。

以下は私から辻村氏と竹野さん

る。

絹川、大塚、梨花の三大スター・モデルはそれぞれ個性をもっている。而してこの切り札の個性にあきがくると、いわゆるスランプがくる。

絹川さん、大塚さんはすでにそれを悟って整調している努力がうかがえるし、梨花さんはこれから迎えるようとしているようだ。私たちが勝手に防止というつまらない言葉だ。

その点において、竹野さんには個性がない。モデル意識がないせいかも知れない。

そのかわり、どう

へお尋ねしたいこと柄である。

まず辻村氏へ――

- ①あなたは竹野ひろ予さんを、こんどどのようなモデルに飼育しようとしているか。(例えば○○さんのような型とか、吊り責め専門とか、ムード派に仕立るとか)
- ②あなたは彼女に自分の要求するポーズを強制しているか。それともあくまでも妥協的な取り扱いをしているか。
- ③もしポーズを強制しているなら(してなくても)こんど彼女の美しさを最も誇張するには、どのようなポーズを求めるか。
- ④それが彼女にふさわしいとかふさわしくないということは別として、梨花嬢のような強烈な縛りを竹野さんにためす意思はないか。
- ⑤あなたが求める彼女の最大の魅力は何か。

次いで竹野ひろ予さんへ――

(本人が都合悪ければ、辻村氏の代弁でも結構ですが、できるだけ……)

- ①貴女はブレーを楽しんでおられるのだが、貴女が自覚しないうちにできた貴女へのファンの要求に貴女は応じ得るか。

②たとえば私が、貴女のファンとして、貴女が好まれるフードとかカバ―を着けた緊縛以外のものを求めたとき、どの範囲まで応じていただけるか。

- ③例に私が、貴女の吊り責めポーズを求めたらどうか。もし拒否するならその理由も。
- ④ハリツケにされたいと思わぬかその理由とともに。
- ⑤そろばん責めやエビ縛りは好きか嫌いか。嫌なら理由も。
- ⑥最初はモデルになる意思がなかったにしても、現在、幾度か奇巧のグラビヤを飾り、奇巧への愛着心はどうか。
- ⑦他のモデルの写真を見て、自分もあのようなポーズがとりたいたい、と思ったものはないか。
- ⑧貴女が自信をもって示すポーズはどのようなものか。

以上、はなはだ一方的に質問で恐縮ですが、是非お答えをいただきたいと存じます。

竹野ひろ予さんが、いつまでも私たち多くのファンを楽しませてくれるよう切望して、筆をおきます。

△短信往来▽

泥腸の実験

竹淵芳寿



上原様、味本様、村井様等クリスターファンの方々の出現を心より頼もしく感じております。

皆様それぞれに色々新しいアイデアを御工夫の上楽しんで居られる御様子、うらやましく思っております。最近の週刊誌等に種々生活の刺激を求めてクリスター・ファンの増加等聞いておりますがその刺激が激しく又精神的にも強い屈辱と羞恥感を与える割合に身体に傷痕を残すこともなく、又生命の危険も少ないところから次第に出るべくことと思ひます。

皆様の御便りを拝見しますと、それぞれダリセリン、空気、イチジク、牛乳、温水、塩水、ドナン、

石鹼等色々工夫しておられますが何と申しましてクリスターの極致は羽村京子様も述べて居られます様に、大量の液をイルリガートルを使って蛙腹とか風船腹とかいう状態まで注入する事でしよう。

こんな事を書きますと、いかにも無茶な様そらどこの様に思われるかも知れませんが、人間の腸と云うものば思ひの外、簡単に大量の液が入るもので、技術と訓練によつては随分入れられるのではな

いかと思ひます。大体その方法で注意する事は嘴管とイルリガートルの水面の高さの間の落差を二米位迄にして、それ以上の高い圧力を使わないで、

ゆっくり液を注入することではないでしようか。液の注入されて居る間は、精神的な羞恥心によつて全身に力が入るために、液が逆流したりしますので、出来るだけ口を大きく開けて深呼吸させたり、腹を左回りに軽く撫でたりして腹圧をかけない様にすることが大切だと思ひます。

こうすれば、何の予備知識のない人でも、千から二千CC位なら大した苦痛も危険もなしに注入出来るものです。大体千から千五百CC位で成人の大腸全体に一杯に液が充満し、それ以上になりますと盲腸を越えて小腸に迄入って来ますので、此の辺りからは前よりもずっとゆっくり静かに入れないと入り難くなつてきますが、マニヤという選ばれた人々ならば、三千、四千の大量にも耐える位の研究心と忍耐力があつても良いかと思ひますが、皆様の記録を御聞かせ下さい。

冷水等を用いますと、その冷さがどの辺り迄注入されたかよく判り、腹から体全体が冷えてくる様な心持がするものです。空気をを用いますと、かえつて痛みも強く、入った空気は中々腸から外へ出ま

せんので苦痛は水よりも強く、一度入れると長い間、自分でその苦しみから逃れる事が難しいので、これは十分訓練されてから行う事がよいと思ひます。

羽村様の御経験では、四千とか承ったことがございますが、後はぐったり疲労して歩む事も出来なかつたとか、その記録の時の状態をもっとくわしく承りたいものと思ひておりますが、誰方が私と協力して新記録樹立のため、よきアシスタントとなつて下さる方はございませうか、若し名乗り出て下さる方があれば喜んで紳士的に御交際する事を御約束します。

小量のグリセリン等での泥腸はスリルも乏しいものです。注入して直ぐ排泄してしまわないでオムツとかバンドとかを当て、或は何も下につけないで一定の距離、時間をきめて外出する等のプレイはスリルを一層深める事でしよう。更に素裸にタイトスカート一枚で後手に縛り、クリスターを施した上にオーパーを羽織らせて街を歩かせたら何とも動きがとれないでとでしよう。誰方が試みられる勇氣はございませうか。



「掟」について

近 藤

一

相当の旧聞に属することになりますが、一昨年の夏ごろでしょうか、イタリヤ映画「掟」というのが公開されましたね。シャンソン歌手のイブ・モンタンが主演というところで、美女ジーナ・ロロブリージーダがからむ作品でした。

この映画については、当時、数多くの方々から誌上紹介があったと記憶します。ただ、それらは、ロロブリージーダが台上に縛りつけられて鞭打たれること、終り頃にその報復をすることが中心であって、主題の「掟」については余り触れられていませんでした。

美女の被縛や折檻が、SMシーンであるこ

とに異論はないのですが、実はこの映画の「掟」こそ、SMムードの極致なのです。「掟あそび」と、それを生み出した社会的戒律の厳しさが、妖しいまでの残酷ムードを醸しているのです。

「親」は「子」に対して命ずることだけが存在価値であり、「子」は「親」に対して絶対服従の義務を負うのです。勿論、反抗など許されるはずもなく、陰での批判さえそれを受けることは「親」としての資格喪失を意味するのです。

こういう「親」と「子」の絶対的社会秩序の中から「掟あそび」なるものが創り出さ

れ、「親」に対する尊敬のかたちをとりながら、実はその裏で、「親」を嘲笑する寓意の皮肉だと思われます。

映画の中の「掟あそび」は、ブドー酒を賭けた遊びであって、新興ボスのイブ・モンタンが親になり、自分の腹心を副親に指名します。子の中に旧来の大地主の家の使用人がいます。大地主が「帯の土地の「親」であることに日頃から我慢ならない想いのモンタンと、「子」になった使用人との衝突は凄惨であり、残酷なのです。

使用人の酒好きを利用して、まず一人だけ

おあずけにします。頭上に杯を載せて酒を注いだり、卓にこぼれた酒だけを吞ませたり、最後にはどうしても酒が欲しいという「子」に、手を使わずに一息に吞めと命じ、壺一杯の酒を喰いながら口に流し込むのです。全員が雰囲気になされ、囁きたてる中で、一人の男が欲しがり抜いた酒に息も出来ず、間もなくぶっ倒れてしまうのです。

ところで、ごく最近に私は一冊の週刊誌を手にしたものです。表紙のなくなった雑誌の頁をパラパラめくって、私はある記事に眼を惹かれました。タイトルが「異常地帯の掟あそび」。

記事そのものはたった四頁の短いものです。が、当時としては重要ゴシップの石原裕次郎、北原三枝御兩人に関する噂話に続く記事なので、多分、特ダネというところなのでしょう。

ごらんになった方もあるかと思いますが、今まで紹介されていないので、敢えてとり上げる訳ですが、雑誌は「アサヒ芸能九月六日号」です。

「掟あそび」というものが一種の黒ミサであるということから「黒ミサ」を説明し、そしてこの「掟あそび」が日本にもあったという書出しです。

紹介された参加者は七名。

日本画家棚川雅堂氏(四六)、歌舞伎俳優祝弦士郎氏(三八)、会社重役高沢清造氏(五一) 大学教授小野十一氏(六〇)、歯科医島本夏江さん(四九)、バー経営春日真弓子さん(二八) 台東区内のモデルグループから雇われたヌードモデルの少女(一七)という顔ぶれです。

棚川画伯が親の座につき、次々に命令を發します。

まず高沢氏が生きた鶏を抑えつけ、春日嬢が手斧でその首を斬り落すのです。次は高沢氏が島本女史の頸を締め上げます。その次に少女を縛り上げ、リープメーターにかけて、グッタリするまで気違い踊りを踊らせるのです。そして今度は、六尺禪一本の高沢氏が宙吊りにされるのです。SMのプログラムはこれからさらに進行し、いよいよ佳境に入っていく訳です。

ところで、この「掟あそび」なるものを皆

さんはどうお考えになるでしょうか。アサヒ芸誌上に紹介された集まりが、フィクションか否かは不明ですが、私としては充分あり得ることと思います。

「会員(白い夜の会)」の全部が紹介された訳ではありませんから興味は半ばなのですが、だいたい仮名というものは、本名の発音や文字の一部を利用するのが普通ですから、特異な人物であれば容易に仮名から推測が出来るものです。

この「掟あそび」の「白い夜の会」の影の男は、相馬英介氏(三五)「仮名Ⅱ」という、一見アブニストのようで、実は正常な性格の人物だそうです。

「白い夜の会」が組織された動機と経過は注目すべきものです。変態者の投書がヒントという説明で、実例として鼻責めサドの神戸市・後藤圭吾氏、パンティフェチの東京大田区・山崎和雄氏、女性切腹と白足袋フェチの埼玉県・桜恵之介氏という三人の投書が掲げられ、これらの投書は、月刊誌「J」「裏窓」(東京中野区江古田)や「奇譚クラブ」(大阪市阿倍野区)からとったものとなっています。

相馬英介氏は、そういう特異なマニヤ達の

需要と供給の媒介で儲けを考え、彼自身が娯楽雑誌「K」の編集記者であるところから、同系雑誌社にもわたりをつけて、異常者リストを作成します。

医師、弁護士、教師、芸術家など経済的、社会的に高い地位の人々を対象に、さらに興信所を使って家庭の状況から資産関係までを調べ、その上で初めて案内状を送るという周到な準備で、会員十名のリスト作成に一年がかりだったとのことでした。

会の経理面は私には興味がありませんから省略しますが、モデルに関しての短かい文章は興味が湧きます。

『大阪には変態専門のモデルがいて、昭和二十七年に第一号の名のりを上げた川端文代さん(三三)をはじめ、五十人ぐらいが「あぶちうくクラブ」「あるす」などのグループを作っているが、東京にはプロといえるものはせいぜい二、三人で、ヌード・モデルや売春婦のアルバイトがほとんど』

『面白いのはモデル達は十人のうち九人までが正常な神経の持主だ。中には川端文代のように、実演しているうちに自分もマゾヒスト

になって転落したものもいるが、絹川文代、花坂道子、大塚啓子、岩井美智子(奇譚クラブ専属)などのスター・クラスは、みんなノーマルで、正常な結婚生活をしているのも多い……』

『川端文代』というモデルを私は知りませんが、これはやはり川端多奈子さんのことでしょうね。デビュー当時、川端棚子という名前であったように記憶しますが、文代とはどういう事情から出たものでしょうか。それに年令も現在三十四才ということになると、奇クの歩みも長いナアと思います。奇ク専属のモデルとして列挙された女性達が、皆、ノーマルで正常な結婚生活を送っているというのものは嬉しい話です。

しかし、考えてみれば当り前の話で、被縛モデルを狂人視することがおかしいのです。アブチックなポーズを演じて、モデルはあくまでも職業であり、本質的な「縛られたがり」とは違って当然です。それに、もし「縛られたがり」であったにしても、それは只、ひどく女臭い女だというだけで、狂女ではありません。

大体マゾ傾向の全く感じられないような女には、私自身、殆んど関心がもてないのです。恋を知る女にはマゾ的資質が多少とも認められるものではないでしょうか。

奇クが変態誌か否かは議論のあるところでしようが、たとえ変態誌にしたところで、モデル諸嬢をノーマルでないと即断することの方が非常識だと思います。

前記の相馬英介氏なる人物が、悩みを寄せた投書の主の氏名、住所、職業等を、他の雑誌にもわたりをつけてメロシ、更に家族関係や資産状況までを調べ上げたというに至っては、プライバシーの権利云々以前に、編集信義や人間としての誠実さの欠乏を感じ、奇クの経営方針と雲泥の差を見ないわけにゆきません。

私自身は、前記の「白い夜の会」の掟あそびのアイデアには格別目新しい魅力は感じませんでしたが。しかし、数多くあるといわれる「掟あそび」そのものには強く関心を惹かれるのです。